

宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第1条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に3つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の100年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

1. 目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

2. 産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

3. 地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

4. 地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

(平成29年11月1日制定)

子育て支援研究センター年報 第11号 2021

目 次

I. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告	
市川 舞・桂木 奈巳・田野邊 涼	1
II. Tiny（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告	土沢 薫 11
III. 親子遊びの会－子育てネットワークづくりプロジェクト－実践報告	
今村 麻子	29
IV. 自然遊びの会・行事実践報告～親子ふれあいネイチャー事業～	
桂木 奈巳・田野邊 涼	35
V. 地域産学官連携活動報告	45
1. 大学地域連携活動支援事業報告	45
2. 大学コンソーシアムとちぎ第17回学生&企業研究発表報告	60
3. 宇都宮市環境学習センター事業報告	80
VI. 宇都宮共和大学子ども生活学部 卒業研究	86
1. 2020年度卒業研究題目一覧	86
2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第34回学生研究発表報告	87

資 料

I. 2020年度子育て支援研究センター事業報告	95
II. 2020年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部）	99
III. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程	104
IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領	106

I. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告

子ども生活学部 准教授 市川 舞
教授 桂木 奈巳
助教 田野邊 涼

はじめに

子ども生活学部の開設以来、学生が子どもを身近に感じながら学ぶことをねがい、地域の就学前施設との交流保育を授業に位置づけ、実践してきた。科目間連携によって〈教材研究—指導計画の立案—実践—反省・評価〉を行い、子ども理解や保育のしくみ、子どもの生活に身近な教材や環境構成、保育者としての基本姿勢など実践を通して学ぶ機会となる本取り組みは、本学の保育者養成教育の特色の1つでもある。しかしながら、今年度は新型コロナウイルスの影響によって本交流の計画も変更・中止が余儀なくされた。本稿では、今年度実践した交流保育に加え、変更・中止も含めた取り組みについて報告する。

1. 令和2年度の交流保育計画

前年度に続き、認定みどりこども園（岩本眞砂枝園長）、認定しらゆりこども園（岩本春枝園長）の二園と交流保育を計画した。令和2年度の交流保育の計画と実績を表1に示す。

4月当初より、新型コロナウイルスの状況を注視しながら連携園と連絡を取り合い、園児・学生の健康安全を最優先とすることを基本に、園児・学生の発達・学びに必要な経験を確保するために時機をとらえ、交流保育の実施の可能性を模索した。

認定みどりこども園との交流保育は、年間2回、計5日間計画したが、第1回交流保育、第2回交流保育ともに栃木県に発出された「緊急事態宣言」により中止となった。そのため、今年度は認定みどりこども園の園児が来校して学生と直接交流する機会はすべて中止となったが、その代替として「園外保育」の場としての校地貸与（グラウンド、保育実習室など）を行った。認定みどりこども園は、昨年台風19号の影響により令和3（2021）年3月まで仮園舎で生活している。園児に必要な経験として「心身を開放して思い切り身体を動かす」ことを目的に本学の校地を活用いただいた。

認定しらゆりこども園とは、今年度3回の交流を計画した。第1回交流保育、第3回交流保育は「緊急事態宣言」の発出により中止となった。第2回の交流については、園と協議の上、時期を10月から11月に変更して実施した。

実施に至った理由として、「子どもの森」を活用した交流であり、屋内での活動と比べて3密を回避しやすいこと。さらに、10月から11月にかけては感染症の発生状況が比較的落ち着いた時期であったことが挙げられる。園・大学双方で協議し、交流の仕方を工夫して適切に感染症拡大防止対策をとったうえで実施することとした。

なお、中止した交流保育に充てることを予定していた学生の授業は、教材研究に振り替えた。

以下、「子どもの森」を活用した交流保育の準備および実践について報告する。

表1 令和2（2020）年度 交流保育計画

年 度 当 初 の 計 画	実 績
<p>認定みどりこども園</p> <p>第1回交流保育</p> <p>2020. 6. 1 1-2限 年中・年長</p> <p>2020. 6. 8 1-2限 年少・満3歳、2歳児</p> <p>テ ー マ：体を動かして遊ぼう</p> <p>関連授業：保育内容総合演習Ⅱ、保育内容身体表現（2年）</p> <p>主 担 当：月橋</p>	<p>緊急事態宣言発出により中止→校地貸与に代替</p> <p>6/26（金）12：00～14：00 年長</p> <p>7/8（水）10：30～13：00 年少・年長93名</p> <p>7/9（木）10：30～13：00 年中・年長95名</p> <p>7/15（水）10：30～13：00 年少・年長93名</p> <p>7/16（木）10：30～13：00 年少・年長93名</p>
<p>第2回交流保育</p> <p>2021. 1. 13（水）年中・年長</p> <p>1. 14（木）年中・年長</p> <p>1. 15（金）年少・満3歳・2歳児</p> <p>テ ー マ：いろいろな遊びを楽しもう</p> <p>主 担 当：市川・桂木・月橋・田野邊</p> <p>関連授業：保育内容基礎演習Ⅰ（3年）、フィールドワークⅠ、保育内容総論、保育内容総合演習Ⅰ（1年）</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大防止により中止</p> <p>→校地貸与に代替</p> <p>1/19（火）10：30～13：00</p> <p>1/20（水）10：30～13：00</p> <p>1/22（金）10：30～13：00</p> <p>→緊急事態宣言発出により校地貸与中止</p> <p>→栃木県「大学地域連携活動支援事業」により教材提案・訪問型の交流を実施 2月10日（水）、2月17日（水）</p>
<p>認定しらゆりこども園</p> <p>第1回交流保育</p> <p>2020年5月</p> <p>テ ー マ：体を動かして遊ぼう</p> <p>主 担 当：市川・田野邊</p> <p>関連授業：保育内容総合演習Ⅰ（1年）、保育原理（1年）</p>	<p>緊急事態宣言発出より中止</p>
<p>第2回交流保育</p> <p>2020年10月14日1、2限 1年生</p> <p>テ ー マ：秋の自然に親しもう</p> <p>関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ、保育内容総論（1年）</p> <p>担 当 者：田野邊、桂木、市川</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大防止により日程変更</p> <p>2020年11/18（水）実施。年少児90名、1年生58名</p> <p>※3密回避のため森で活動</p> <p>※新型コロナウイルス対策について、大学・園・保護者と文書にて共有</p> <p>※園の常勤看護師が引率に加わり、健康安全指導</p>
<p>第3回交流保育</p> <p>2021年1月27日 1、2限</p> <p>テ ー マ：いろいろな遊びを楽しもう</p> <p>関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ（1年）</p> <p>担 当 者：桂木、田野邊、市川</p>	<p>緊急事態宣言発出より中止</p>

2. 事前打ち合わせ

交流保育の実施に先立ち、園と事前打ち合わせを行った。例年は、交流保育のねらいおよび活動の流れを中心とした打ち合わせを実施しているが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策についての申し合わせと森の下見を中心に行った。概要は以下の通りである。

- 1) 日 時 2020年10月27日（火）15：30～16：30
- 2) 出席者 認定しらゆりこども園：保育教諭3名
大 学：桂木、田野邊、市川
- 3) 内 容 ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に関する申し合わせ
・森の下見
・当日のタイムスケジュールについて

(1) 健康安全対策

交流実施に向けた健康安全対策について検討した。その結果、交流保育実施にあたり、新型コロナウイルス感染症対策について園・大学で共有し、園児の保護者の承諾をもって実施することとした。

具体的には、文部科学省通知「学校における新型コロナウイルスに関する衛生管理マニュアル(2020.9.3.ver4)」および本学学生・教職員向け文書「新型コロナウイルス感染予防について」の内容を文書にて共有すること。学生への健康指導については、交流実施2週間前からの健康観察および行動記録、当日のマスク着用および手指のアルコール消毒の徹底をすること。さらに、今回の交流保育では、従来行ってきた園児とペアになる活動形態ではなく、園児と学生との密な関わりを回避する目的で「見守り(=観察)」を主とし、子どもの求めに応じて「関わる」こととした。また、園児についても交流当日まで健康観察し、体調を確認の上、園児の保護者から交流保育の参加の承諾を得ることとした。なお、教職員も同様の健康管理をしたうえで活動に参加することで合意した。

(市川)

(2) 森の下見

今回の交流保育は、例年行なっている「学生-子どものペア」の形式ではないため、連携園の保育者が展開する「森を使った保育」を学生が観察する形態となる。そこで、保育者と共に「子どもの森」の下見を行った。先方には図1に示す「子どもの森」マップを示し、ここに記した番号を辿りながら林内の案内を行った。今年度は4-5月の大学閉鎖に伴い、林内の整備が進まなかった。そのため、手入れが行き届かず、安全の確認ができない領域は大学側で「立入禁止」と設定し、ここに子どもたちが入らないよう協力を求めた。表2には各ポイントで伝達した概要を示す。「秋の自然と子ども」というと、どんぐりや落ち葉等の自然物等を拾う活動になりがちである。しかし、子どもの森は、野生動物も生息する環境で、街中の公園とは異なる利点がある。我々が日常的に行なっている整備活動は「子どもにも多様な自然を感じてもらいたい」という願いを持って行なっている。そこで、当日の保育に資することを目的とし、この場で見られる木々や空の様子、野生動物の痕跡等を伝え、さらに園内での共有を求めた。

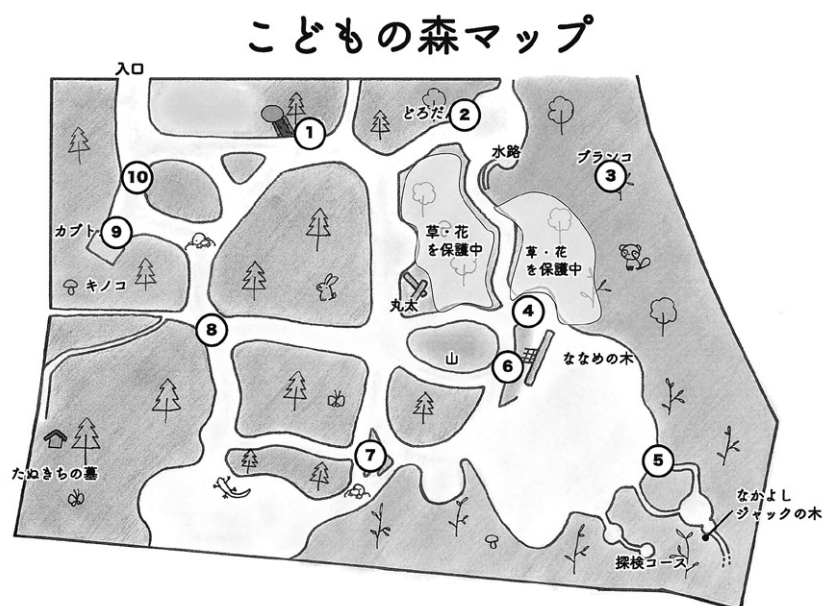


図1 子どもの森マップ

表2 林内の各ポイントにおける留意事項

ポイント 番号	場	留意事項
①	ビオトープ	生物の追跡中。今回は学生の目が届かないため、立ち入らない
②	砂場	今回の目的から外れるため、使用しない
③	ブランコ	ブランコは三歳児が遊ぶには補助が必要。今回は使用しない。また、エリア外に迷い込む可能性があるため、立入禁止とする
④	保護ゾーン入口	植物の保護をしている領域のため、柵内には立ち入らない。道沿いには、花や生物が見られるが、虫等は持ち帰り禁止（責任を持って飼育できるなら可）
⑤	探検コース入口	この中は未整備エリアのため立入禁止。この前の広場で遊ぶ
⑥	ななめの木・小山	子どもが登った場合の補助は保育者が行う
⑦	簡易屋根	⑦と⑧を結ぶ線より東側は立入禁止
⑧	たぬきちの墓分岐	危険生物を確認。墓に入る道は立入禁止
⑨	カブトムシエリア	危険生物を確認。立ち入らない
⑩	入り口	子どもが外に出ないように、見守りが必要（大学で対応）
立ち入らない：子どもが入った場合、速やかに出てもらう 立入禁止：事前に子どもが入ることを禁止する対策をとる		

(桂木)

3. 活動に向けた森の整備

交流保育に向けて、「子どもの森」の環境整備を行った。整備体験を通して自然の営みに触れて森に親しむこと、子どもの姿（自然との触れ合い）をイメージしながら環境構成（整備）することを目的として実施した。

(1) 整備体験の概要

整備の概要は以下の通りである。

- 1) 日 時 2020年10月26日（月） 2限（Aクラス）3限（Bクラス）
11月9日（月） 2限（Aクラス）3限（Bクラス）
- 2) 授 業 保育内容総合演習Ⅰ（1年生）
- 3) 整備内容 ①道づくり（落枝や木を集め、道沿いに置き並べる）
②落ちてきそうな枝の処理
③栗のイガを一部回収・廃棄
④小山の整理（刈った草の廃棄）
⑤草刈り（剪定ばさみを使用した、笹切りを中心に）

(2) 取り組みの様子

学生には森の中で多様な自然を感じられるよう、五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）をはたらかせることと自分自身で子どもの目線（高さ）を意識し、発見を楽しむよう教員より伝達した。教員のアドバイスを取り入れる中で、自然に興味を示す学生や、作業を通して試したり、工夫したりする学生など、熱心に取り組む姿が見られた。体験を通して、子どもが遊ぶための環境づくりはもちろん、自然との触れ合いや、森での発見を言葉でやりとりする姿もみられた。



写真1 枝集めて、道づくり



写真2 長い枝をのこぎりで切断



写真3 刈った草を熊手で集めて



写真4 集めた草を袋に入れる

(3) 学生からの気づき

以下は、整備体験後の学生から出された感想等である。

- ・実際に子どもの目線になると植物が大きく見えるなど、子どもたちの新たな発見につながるよう整備した。
- ・子どもの身長を考えて、顔にぶつかるものを切って整えた。枝の鋭いものは端によけたり回収したりした。
- ・子どもたちがどんなところに目を向けているのか興味を持つのか考えながら行った。また、どんなところに危険が潜んでいるのか考えて環境作りを行った。・森を歩きながら、道に出ている枝などは「ちょうど子どもの顔の位置にくるな」と考え、足場も木や切り株のようなものが落ち葉で見えづらくなっていて気付かずに転んでしまう可能性などを考えながら、意識して取り組んだ。
- ・子どもが触れたときにとげが刺さったり目や口に入ったりしないか考え、どのぐらいの長さにすべきか考えながら行った。また、触れても良い食物なのかを事前に確認した。

これらの記述にみるように、学生は「森で子どもが遊ぶ姿」を意識して整備に取り組んでいた。学生の気づきの中で子どもが森の中でどのようなことに興味関心を抱くのか、安全面への配慮についての記述がみられた。学生自身も実際に森に入り整備体験を通して自然から得た発見を楽しんでいた。また、子どもの目線になって、子どもが楽しむ環境とはどのようなものかを意識していた、と考えられる。

(4) 今後の課題

整備体験を通して、体を動かしたり、学生同士で協力したり助け合ったりする等、他の授業ではできない直接体験ができ、今後の学びの動機づけに有効だったと思われる。しかし、「森に入る」ことに抵抗を感じる学生の姿もあり、自然体験の経験の差が大きい現状が見られた。今回の整備体験を通して、学生自身が疑問や葛藤、課題を見出せるような実体験を増やし、自然との触れ合いを重ねていくことが大切であると感じた。今後さらに学生の自然体験や生活体験などについて把握し、多様な体験を重ねていきたい。(田野邊)

4. 交流保育実践報告「秋の自然に親しもう」

(1) 活動の概要

- 1) 日 時 2020年11月18日(水) 1-2限目
- 2) 場 所 宇都宮共和大学こどもの森
- 3) 参加者 認定しらゆりこども園 年少児 4クラス90名
引率保育教諭10名、看護師1名
子ども生活学部1年生52名(「保育内容総合演習I」)
- 4) 担当教員 市川、桂木、田野邊
- 5) テーマ 秋の自然に親しむ
- 6) ねらい 園児：大学の森で、秋の自然に親しむ
学生：園児の様子を観察し、子どもの興味や関心、環境とのかかわりについて理解する
教員：活動の様子から学生の実態を把握し、授業内容、方法、カリキュラムを振り返る機会とする。

7) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 環境整備	身支度確認、 手指消毒
10:30	○来校 (10:10園バス発予定) ・排泄(アリーナ) ○森の探検 ・森を探索し、発見や見立てを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・遊びの動線に留意し、安全に遊べるよう配慮する。 ・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。 (・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場) ・子どもが話しかけてきた際には応じる。 ・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・トイレに踏み台 ・森の入口に消毒設置 ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
11:30	○帰園		

(2) 活動の経過

- 1) 関連科目 保育内容総合演習I 市川、田野邊
フィールドワークI 桂木、田野邊

2) 日程

年月日	曜日	時限	科目	担当者	内容
2020. 10. 26	月	1～2	保育内容総合演習Ⅰ	田野邊、桂木	環境整備
2020. 11. 9	月	1～2	保育内容総合演習Ⅰ	田野邊、桂木	環境整備
2020. 11. 18	水	1	保育内容総合演習Ⅰ	田野邊、桂木	環境整備
		2	保育内容総論	市川	保育観察
2020. 11. 30	月	2～3	保育内容総論	市川	振り返り
			保育内容総合演習Ⅰ	田野邊、桂木	

(3) 活動の様子

秋ならではの自然に触れる中で、子どもは環境との出会いから自分なりに遊びを見つけたり、探索を楽しんだりする姿が見られた。森という環境に抵抗を感じる子どもの姿が予想されたが、当日は天候もよく、日差しが温かく森に差し込み、関心をもって森の中を探索する姿が見られた。学生は見守り中心の観察となったが、子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもが話しかけてきた際には応じるといったかかわりの中でソーシャルディスタンスを保ちながら子どもに寄り添う姿が見られた。子どもから自発的な学生へのかかわり（発見や気持ち）が見られ、子どものペースで交流ができた。

(4) 学生の気づき

以下は授業内での振り返りシートより学生から出た感想の抜粋である。



写真5 築山を駆け降りる



写真6 丸太によじ登る



写真7 誰かいるかな？



写真8 発見を楽しむ



写真9 面白い持ち方発見！（自分なりの発見）



写真10 ぼくの長い？



写真11 開放的に（葉っぱにまみれる）



写真12 イガ栗、つんつん



写真13 トカゲ、発見！



写真14 触ってみたら



写真15 森の妖精



写真16 何か釣れるかな？

- ・自分たちは虫がいるのが嫌だったり、服に植物が付いたりして処理が面倒だと感じてしまっていて、森に対して少し抵抗があったが、子どもたちには全然そんなものがなくて無邪気に走り回ったり夢中になってどんぐりや葉を探している姿がとても印象的だった。
- ・3歳という年齢でも自ら発見を楽しみ、自分が思っていた3歳を超える面白い発想をもっていて「子どもってすごい」と感じた。
- ・「この葉っぱは何?」「この木の実は何?」など自然物に興味をもって、目を輝かせている姿がとても印象的だった。次回は私たちが遊びの種をたくさん作って、子どもたちがよりたくさんの種類の遊びを見つけ、展開していけるような環境づくりをしたい。
- ・何もしないと葉っぱだけに見えるが、手を使ってよけると土や木の実があるということを発見していた。このような発見が子どもにとっては経験の一つだと実感した。子どもたちにもっと自然に触れて、新しい発見や自然の面白さや楽しさを知ってほしいと思ったので、自分自身虫が苦手ではあるが、自然とのかかわりを増やしていきたい。

実際に子どもが森という環境にかかわる姿を観察して、学生の想像を超える子どもからの発見があったようだ。子どもがもつ想像の豊かさに触れ、心を開放して遊ぶ姿や、夢中になって自然物を集める姿等、葉っぱ1枚でも子どもにとっては教材のひとつになり得るということ子どもから学べたようである。コロナ禍に合わせた「見守り中心」の観察だったため、子どもの姿をよく観察でき、子どもと環境とのかかわりの理解が深まったと考えられる。

(5) 課題

学生と園児との交流は、各授業で学習したことの総合的な活動である。子どもと直接的にかかわる中での気づきや発見は学生にとって大きな経験となり、交流の意味は大きい。

今回の交流は「見守り中心」ではあったが、必要に応じて子どもの気づきや助けに応じる学生の姿が随所に見られた。ありのままの子どもを受け止め、一人ひとりの子どもに応じるなど、援助が過度にならず、子どものペースでかかわることができる状況がよかった。例年、交流保育となると学生の意識が「かかわること」にのみ向いてしまう傾向があるが、今回のような「見守り中心」の交流保育における気づき（客観的な視点）は、現時点（1年次）での学生の学びとして必要なものである。

今後の課題としては、子どものペースを意識しつつ、子どもの主体的な活動、遊びを支える援助の在り方について考えていきたい。

(田野邊)

5. 今後の課題

今年度は、計画の変更・中止が相次いだ一年であったが、その都度の状況に応じて最善を尽くした結果である。一方、「保育現場と連携・協働した保育者養成教育」という本活動の趣旨から振り返ると、学生が園児と出会う機会を失ったことは学生の学びにとっても大きな損失と言わざるを得ない。今年度は、その補完として教材研究を行ったが、「実際の子どもの姿からの学ぶ」経験は他に代えがたいことを改めて実感した。今後しばらくは新型コロナウイルス感染症の影響が継続することを念頭におきながら、本取り組みにおける今後の課題について考えたい。

第一に、交流のあり方の検討である。本交流活動はこれまで就学前施設の園バスで園児が来校

し、本学の校地を活用して実践してきた。今年度は、この「園バスでの移動」が必然的に「密」の空間を生むとして、実施へのハードルの一つとなった。今後、オンラインを活用した交流やモノを介した交流、さらに小グループの学生による訪問型の交流など、交流保育のあり方そのものを柔軟に検討していきたい。

第二に、交流の方法の検討が挙げられる。前年度までは園児と学生がペアになる活動が多く、まさに「密」な交流が主であった。本報告の「見守り中心」の交流のように、保育の本質を大切にしながら、安心して学生が園児と関わることのできる交流の方法を検討していきたい。

保育者養成は、養成校と保育現場との連携・協働によって成り立つ。今後も地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育について検討を重ねていきたい。 (市川)

Ⅱ. T i n y（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告

子ども生活学部 准教授 土 沢 薫

1. はじめに

感染症拡大による社会的な混乱と生活変化の中で、T i n yの活動は2020年度に大きな転換点を迎えた。そして、2021年度には活動開始10年目の節目を迎える。この機会に、改めてこれまでの9年間の活動を振り返るとともに、コロナ禍の状況において今年度新たに取り組んだ活動について、報告する。



図1. シンボルキャラTinyくん

2. プロジェクトの目的と概要

T i n yの活動は、障がいがあってもなくても安心して子育てと子育てを楽しめる環境づくりや人材育成を志向し、人と人をつなげそこに教員や学生もつながり、実践的活動を行いつつ学び合うことを目的としている。

更に、障がいの有無にかかわらず、日々成長する子どもの多様な力を再発見し、障がいがあってもなくても共に育ち合える援助の在り方について、実践に根差し地域社会に役立つ活動内容の探求と、その共有を目指す。

具体的な活動としては、地域の子育て中の家族（障がいのある子どもを含む）を対象に、子どもやその家族が安心して活動でき、一緒に楽しめるあそびを通じた支援と交流を行っている。

活動では、子どもや家族の個性や持ち味を尊重しながら、主体性を引き出し、楽しさや喜びあふれる内容を工夫している。障がいのある子どもも含めた一人ひとりが自分らしくいられることを大切に、障がいのある子どもを育てる親の不安やきょうだい児の不自由さを和らげ、障がいがあってもなくても安心して育ち合えるような援助を行っている。

図1は、活動当初からシンボルキャラクターとして、案内チラシやHP、ボランティア学生着用のTシャツなどに継続的に使用する「T i n yくん」である。保護者からは「このマークを見るだけで、子どもたちがT i n yの活動を思い出して笑顔になる」「T i n yの案内チラシを見て心が温かくなった」など、嬉しい声も届く。

3. T i n yという活動グループの9年間の歩み

(1) 「あそびの集い」の活動について

T i n y活動の大きな柱の一つが、障がいがあってもなくても分け隔てなく親子で参加できる「あそびの集い」の活動である。

これまで、「あそびの集い」という活動の中で一貫して大切にしてきたのは、障がいのある子どもとそのきょうだい児や親、子どもを取り巻く大人たちを含め、皆が安心して自分らしくのびのびと過ごせる場としての提供であり、温かい雰囲気づくりに配慮して実践を積み重ねてきた。各回のメイン活動として、参加者の障がいの程度および傾向性を考慮し、季節感を取り入れつつ、担当者の専門性を活かした音あそび、感覚あそび、描画あそび、制作あそび、身体あそび等を行ってきている。

表1. Tinyあそびの集いの実施状況

回	実施日	タイトル・内容	参加数	期
1	2012年8月25日(土)	「子どもと親と一緒に楽しめる音楽&歌あそび」音楽・お絵描き	46名	I
2	10月28日(日)	「親子でストレス・マネジメント」身体、表現活動で発散・調整	28名	
3	12月2日(日)	「ミュージック・クリスマス」音楽遊び、歌遊び、生演奏鑑賞	29名	
4	2013年3月10日(日)	「お絵描き&工作あそび」のびのび自由な模様でひな人形づくり	29名	
5	4月14日(日)	「春の音楽あそび」手あそび、歌遊び、楽器演奏、ペープサート	30名	
6	6月30日(日)	「絵本で歌おう!リズムでジャンプ!」視覚教材と身体活動	24名	
7	8月25日(日)	「夏の思いっきりお絵かき大会」絵の具と種々の画材で共同制作	26名	
8	10月6日(日)	「子どもあそぼう!おとなしゃべろう!!」自由あそびと座談会	33名	
9	12月8日(日)	「ドキドキわくわくクリスマス」クリスマスの歌、ダンス、工作	40名	
10	2014年2月23日(日)	「今日は思いっきりあそび隊!」絵の具お絵かき、ひな人形作り	44名	
12	4月20日(日)	「何してあそぼう!楽しくあそぼう!!」自由あそびと座談会	32名	
13	6月1日(日)	「音♪楽♪感じよう!」楽器あそび、伸縮ボール、歌やダンス	33名	
14	7月13日(日)	「あそびのつどい」音楽あそび、歌遊び、パネルシアター	34名	
15	8月24日(日)	「夏だ!アートだ!楽しもう!!」絵の具で共同お絵かき遊び	33名	
16	10月5日(日)	「音を楽しむ♪リズムで弾む♪♪」打楽器演奏、生演奏鑑賞等	29名	
17	12月14日(日)	「うきうき☆にこにこクリスマス!!」手遊び、クリスマス工作	31名	
18	2015年2月22日(日)	「見たら触れたら感じたらったら〜♪」音階楽器演奏、大型絵本	37名	III
19	4月19日(日)	「春の音あそび♪ゆったりあそび♪♪」音楽とからだ遊び	32名	
20	5月31日(日)	「音音おととと♪むずむずリズム」音で身体動・季節感	30名	
21	7月12日(日)	「絵の具でぴっちゃん・ぱたん・ペタペタポン!」作品	23名	
22	8月9日(日)	「音あそび♪リズムあそび♪♪」リズムで身体動、演奏	23名	
23	10月11日(日)	「みんなで楽しくアートの時間!」自由に描き、大変身!	37名	
24	12月6日(日)	「Tinyのクリスマスだよ♪」遊びで雰囲気を味わう	28名	
25	2016年2月7日(日)	「子どもだ!まつりだ!ひなまつり」ひな作りと家族写真	24名	
26	4月17日(日)	「春の音♪るんるんリズムで!」視覚教材、音楽とからだ	24名	
27	6月5日(日)	「ボクじまん、ワタシじまん、うちの子自慢!」親座談会	32名	
28	7月10日(日)	「わくわくアート、あっと、おっと!」感触や多様な表現	24名	
29	8月7日(日)	「音で遊ぼう♪リズムで動こう!」体を動かす自分らしさ	29名	IV
30	10月11日(日)	「みんなで楽しく、アートの時間!」共同制作を楽しむ	33名	
31	12月4日(日)	「Tinyのるんるんクリスマス♪」音楽・踊り・手遊び	31名	
32	2017年2月5日(日)	「音を楽しむ♪リズムで弾む♪♪」視覚刺激や動きで遊ぶ	24名	
33	4月23日(日)	「五感で春を感じよう〜♪」視覚教材や音楽、からだ遊び	22名	
34	6月11日(日)	「最高!自分流アートの時間」絵の具の感触や多様な画材	20名	
35	7月9日(日)	「音であそぼう♪リズムで動こう!」親はお話し会	8名	
36	8月27日(日)	「楽しく創って、みんなアートの大天才!」自由に表現	20名	
37	10月15日(日)	「みる、きく、うごく、あそぶ♪うけとる♪自分らしく!」	9名	
38	12月3日(日)	「Tinyのるんるんクリスマス♪」音楽・ダンス・団欒	9名	
39	2018年2月4日(日)	「音を楽しむ♪リズムで弾む♪♪」視覚刺激や動き楽しく	14名	V
40	5月13日(日)	「音楽あそび〜♪」楽器演奏!音やリズムで遊びましょう	31名	
41	7月29日(日)	「思いっきりお絵かき!」画材を楽しみ、自由に表現	22名	
42	12月24日(月・新)	「Tinyのるんるんクリスマス♪」Xmasの歌やダンス	20名	
43	2019年2月3日(日)	「Tinyの福はうち〜♪」季節にちなんだあそび体験	10名	
44	4月28日(日)	「春の音楽あそび〜♪」音やリズムで遊び、楽器演奏!	20名	
45	6月2日(日)	「自由あそび&お話し会」(保護者座談会の実施)	8名	
46	8月4日(日) AM	乳幼児の部:「思いっきりアート体験!」感触や多様な画材	22名	
①②	8月4日(日) PM	青少年の部:「ミュージック&ダンスで思いっきり夏体験!」	18名	
47	12月14日(土)	「Tinyのるんるんクリスマス♪」歌やダンス、創作活動	14名	
48	2020年2月2日(日)	「春よ来い!鬼はそと〜、福はうち〜♪」音遊びや制作活動	17名	
以降		※感染症予防対策により実施せず、再開未定		

しかし、2020年度は、感染拡大の影響を受け、障がいのあるお子さんも含めた室内での対面接触型の「あそびの集い」の開催は見送らざるを得ない状況であった。「あそびの集い」を年間通して全く開催できなかったのは、T i n yの活動を開始して以来、初めてのことであった。

ここで一度、これまで48回開催してきた「あそびの集い」の活動の歴史を振り返りながら、次年度以降の活動の方向性について考えていきたい。

これまでの9年間の「あそびの集い」の実施状況について一覧にまとめたものを、表1に示す。

(2)「あそびの集い」のこれまでを振り返って

これまでの活動全体を振り返ると、活動継続に伴って、実施場所の変更、地域社会における障がい児者を取り巻く状況の変化や参加者層および参加者数の変遷、学生たちの成長などによって、活動における課題に変化が生じている。それにより、T i n yのこれまでの活動が、表1で示したとおり大きく5期に分けられた。この変遷は、T i n yという活動グループが、参加者の皆様のお力を借りて周囲のサポートを得ながら、徐々に成長してきた集団としての発達史になっている。

以下に、各時期の状況や内容について簡単にまとめた。

●あそびの集いⅠ期

第1回～6回：T i n y誕生！活動スタイルの模索期

スタートの時期は、宇都宮市子ども発達センターをお借りし、宇都宮市との共催の形で、発達センタースタッフに状況を見守られる形での実施であった。すべてが未知で手探りだったが、地域への貢献が具体的な形になる喜びや、参加者の笑顔や素晴らしい反応に力づけられ勇気を得ながら、実践を重ねていった。実施方法や活動内容を吟味し、発展させ、活動を作り上げていった時期である。



●あそびの集いⅡ期

第7回～32回：活動スタイルの定着と常連参加者の増加

7回目の「あそびの集い」から、活動の場を宇都宮共和大学長坂キャンパス内の5号館4階にある保育実習室に移し、活動スタイルが徐々に定着していった時期である。「T i n yが大好き」という子どもやご家族、ほぼ毎回来場くださる常連参加者が増え、開催の頻度を多くしてほしいなどの声も寄せられるようになった。社会的にも障害者差別解消への動きが進んでいた時期で、外部（とちぎテレビや下野新聞など）の取材を受ける等、T i n y活動の認知や期待が高まってきた時期である。学生ボランティアがサークルとして組織化され、「サークルT i n y隊」が活動を開始した。



●あそびの集いⅢ期

第33回～39回：常連者の卒業とニーズ変化、学生の成長

T i n y活動に毎回のように参加し成長を共に喜び合った子どもたちやご家族が、高学年になったり引っ越しされたりなど、次々卒業し始めた。参加者数超過の心配がなくなり、



一人ひとりの子どもやご家族にじっくりと関わる機会が多くなった時期である。地域の放課後サービス等を利用する家族が増え、Tiny活動に求められることが徐々に変化していった。そんな中、サークルTiny隊は徐々に力をつけ、学生から活動内容や援助対応への積極的アイディアが出されるようになってきた。

●あそびの集いⅣ期

第40回～48回：学生中心の活動と学生同士の育ち合い

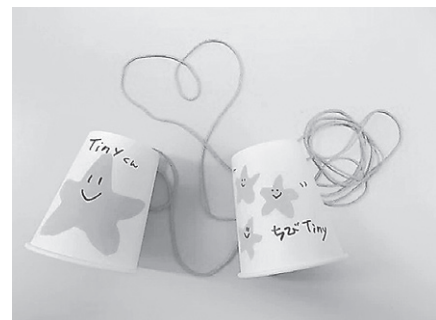
参加者ニーズの変化に対応しつつ、年間の活動回数を減らして各活動の間に計画や準備を十分に行うようにした。以前より準備に時間をかけられるので、当日の進行を学生中心のスタイルへと変え、教員スタッフは事前指導とフォローに回るようになった。サークルTiny隊の学生たちが年間を通して継続的に活動することで、定期的に打合せや準備を行い、計画的に活動にかかわり、得意分野を生かしながら育ち合い、少しずつ実践力を積み上げた。参加者からは、教員の専門性への期待が寄せられる一方で、学生たちのフレッシュな力や関わりが好意的に受け止められ、喜ばれることが増えてきた。



●あそびの集いⅤ期

2020年度4月～対面開催ゼロ期：新たな活動スタイルの模索

COVID-19の感染拡大により、様々な親子が集い参加者同士触れ合って楽しむ「あそびの集い」の実施は難しい状況が続く。2020年度は一度も開催できなかった。コロナ禍において自分たちができることは何か、新たな活動スタイルを模索し、試行し続けながらの一年となった。具体的な試みとして、ホームページ上での情報提供に加え、休止していたブログを再開し、コロナ禍でも楽しめる遊びの工夫、子育ての不安を解消するための情報発信などを行った。更に、Facebookも開始し、ブログの内容と連動して子育てに関するミニ情報を発信し、海外からの閲覧も得た。



以前のように同じ場所に集まり触れ合いながら「あそびの集い」を実施できる日がいつになるか、定かではない。しかし、活動の歩みを止めず、サークルTiny隊の学生たちと共に行えることを模索し続けながら進んでいきたい。今後、学生による遊びのミニ動画など、SNSを活用した情報発信については発展させつつ継続していく予定である。

4. 2020年度の新たな挑戦！「オンラインコンサート」の実施

(1) ファミリーコンサート「障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い」

Tiny活動の二つ目の柱として、例年開催してきた「障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い」などの参加型イベントがある。特に、ファミリーコンサートは、本格的なコンサートを障がいの有無にかかわらず乳児から高齢者まで自分らしく楽しみ、共に親しみ合えるよう、プロの演奏家らの協力を得ながら実施してきた。2019年度には、これまでの活動内容が優れた地域貢献として認められ、栃木県から「輝くとちぎづくり表彰」最優秀賞を受賞した。

これまでのスペシャルイベントの開催状況をまとめて表に示す（表2）。

表2. T i n yファミリーコンサートおよびGWスペシャルイベントの実施状況

回	開催日時	内 容	出演者
1	2013年9月22日(日)	第1回T i n yコンサート (スペシャル ジャズコンサート)	豊田チカ(ボーカル)、田中裕士(ピアノ)、 小山太郎(ドラム)、生沼邦夫(ベース)
2	2014年5月4日(日)	第1回GWスペシャルイベント (みんなで踊ろう!アフリカダンス)	西アフリカの太鼓演奏とダンス「パラ ン」の皆さん
3	2014年9月15日(月祝)	第2回T i n yファミリーコンサート (声楽、フラメンコ、朗読など)	吉武まつ子(メゾソプラノ)、吉武大地(バ リトン)、吉武萌(ソプラノ、フラメンコ)
4	2015年5月3日(日)	第2回GWスペシャルイベント (マジックと音楽と絵本パフォーマンス)	大友剛(マジック・ピアノ・鍵盤ハーモ ニカ・絵本朗読)
5	2015年9月20日(日)	第3回T i n yファミリーコンサート (オカリナとギターのアンサンブル)	ねんど:小山京子(フルート・オカリナ)、 吉塚光男(オカリナ)、斎藤浩(ギター)
6	2016年5月7日(土)	第3回GWスペシャルイベント (西アフリカの音楽とダンスと屋外交流)	西アフリカの音楽演奏楽団「コナンカマ」 の皆さん
7	2016年9月22日(木祝)	第4回T i n yファミリーコンサート (歌とピアノとお話、スティーロパン演奏)	木村真紀(シンガーソングライター)、オ カピ(スティーロパン)
8	2017年5月7日(日)	第4回GWスペシャルイベント (スティーロパンのバンド演奏と屋外交流)	スティーロパン・バンド「TRINIS TA」の皆さん
9	2017年9月16日(土)	第5回T i n yファミリーコンサート (パフォーマンス・ミュージック・ユニット)	C i e l :浅沼杏花(バイオリン)、石川 陽介(ピアノ・ボディーパーカッション)
10	2018年10月20日(土)	第6回T i n yファミリーコンサート (打楽器の愉快的演奏とドラム&サックス)	ふーちん(ドラム・打楽器・鍵盤ハーモ ニカ)、とんちゃん(サックス)
11	2019年9月16日(月祝)	第7回T i n yファミリーコンサート (ピアノ、歌、パーカッション、マリンバ)	木村真紀(歌・ピアノ)、牧野香苗(パーカッ ション・マリンバ)、べんちゃん(歌と絵)

これらのイベントは、前述の「あそびの集い」のように小人数でじっくり関わる形でなく、「障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い」として、地域のすべての方を対象に毎年開催してきたもので、日頃から障がいのある方々とつながる機会が少ない人たちも含めて、多様な皆様にご来場くださり、楽しく回を重ねてきた。

(2) 毎年行ってきたファミリーコンサートも中止に!

ところが、2020年度は、コロナ禍によりこの音楽の集いの活動も見送らざるを得なくなった。今回、初めての邦楽系のコンサートを開催しようということで、和太鼓集団に出演を依頼し、前年度から既に少しずつ準備を進めていたが、その後の感染症拡大により、参加者の安全を第一に考え、開催しないことに決めた。仕方がないと諦めつつ、コンサートの開催中止も決め、できないことばかりが続いた2020年の春だった。

(3) 今だからこそ、できることを探そう、実行しよう

しかし、感染症が拡大しても、すべての子どもたちや子育て中のご家族に、楽しみや喜びや周囲との温かな繋がりが欠かせないということは、何も変わらないことである。

ソーシャル・ディスタンスとマスク着用が求められ、身体の安全を守るために触れ合いや密な関わり合いを避けなければならない時代だからこそ、子育て家族の安心とこころの健康、子どもたちの豊かな育ちを全力でサポートしたい、そのために私たちができることはないかと考え、スタッフで何度も検討を重ねた。そして、これまでのT i n yファミリーコンサート「障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い」に代わり、2020年度は、学生が出演して3部構成の手

作りコンサートの実施および動画配信に挑戦した。以下に、3回分のプログラムを示す。

♪第8回 Tinyファミリーコンサート (オンライン配信) プログラム♪

●第1部 (2020年9月26日～配信)

♪人形パフォーマンス「ドレミの歌」

出演：子ども生活学部 1年生4名、3年生4名

♪ユーフォニュームアンサンブル「星条旗よ永遠なれ」「やさしさに包まれたなら」

演奏：音楽科1年生2名、音楽科2年生1名

♪音楽物語「食いしん坊のピーと動物たち」

パネル製作・出演：子ども生活学部1年生9名

音楽：音楽科2年生2名、1年生3名



●第2部 (2020年10月13日～配信)

♪カップダンス「右・左ブギ」

出演：子ども生活学部1年生3名、4年生3名

♪ピアノ&打楽器&管楽器アンサンブル「究極の9曲?! “尻取り”メドレー」

演奏：音楽科1年生3名、2年生2名

♪段ボールパフォーマンス&ダンス「スリー・ウンチーズの歌」

段ボールマスコット制作&ダンス考案：子ども学部3年生

出演：Tiny隊全員

●第3部 (2020年10月31日～配信)

♪鍵盤ハーモニカアンサンブル「アンダー・ザ・シー」

演奏：音楽科1年生3名、2年生1名

♪ミュージックベルと仲間たち「となりのトトロ」

演奏：子ども学部1年生6名、3年生3名、4年生1名

音楽科1年生1名、2年生1名

♪みんなと歌おう「大きな歌」「空を見上げて」

出演：Tiny隊全員

動画編集：星 順子

(4) Tinyらしいコンサートをお届けするために

動画配信は初めての試みであり、オンラインコンサートの開催は手探り状態からのチャレンジであった。

実施すると決めた後は、すぐ準備に取り掛かった。Tinyの接触型イベントが全て中止となっていたため、これまで「あそびの集い」や「障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い」に参加して下さった方々に、久しぶりにTiny活動に接してもらえる機会となる。心安らげるような、元気が出るような、Tinyらしい手作り感あふれるコンサートを目指し取り組んだ。コロナ禍でさまざまな見通しが持ちにくい中だったが、実施計画、プログラム案の検討と決定、オリジナル作品づくり、練習、撮影、編集および配信と、スタッフがそれぞれの得意分野を持ち

味を生かし、分担と協力をしながら準備を進めた。準備段階や練習および撮影時には十分な感染症対策を行い、制限のある中でも集中して取り組んだ。出演したT i n y 隊の学生たちは、酷暑の中でもマスク着用と換気のため窓を開けての練習など大変なこともあったと思うが、前向きに励んでくれた。T i n y 隊の学生以外にも宇都宮短期大学音楽科有志の協力も得て、力を合わせ、心のこもった手作りコンサートを作り上げていった。



(5) コンサート用に新たに制作したオリジナル作品

今回のオンラインコンサートに際し、私たちの思いが詰まったT i n yオリジナル作品を新たに制作した。以下、その2作品について制作意図と共に紹介する。

①スリー・ウンチーズの歌

感染症拡大と「三密」を避ける生活を長く過ごすうちに、こころの中にたまりやすい三つのもの。一つ目は、先の見えない「不安」。二つ目は、仕方なく現状を受け入れるしかない「我慢」。三つ目は、ストレス状態がずっと続くことでの「疲労」。これらについて、子どもにもわかりやすく元気が出るネーミングをし、楽しく歌って、ため込みを防ぎたいと考えた。

♪スリー・ウンチーズのうた

詞：土沢薫

1. うんち うんち うんちっち うんち うんち うんちっち
うんち うんち うんちっち こころの便秘に気をつけよう
うんち うんち うんちっち こころのうんちとお知り合い
うんちうんちっち うんちうんちっち ためこむよりもほどよくつきあう
うんち うんちっち うんち うんちっち こころさわやか～♪
2. うんち うんち うんちっち うんち うんち うんちっち
うんち うんち うんちっち、心配性の ふあウンチ
うんち うんち うんちっち 踏ん張りすぎるな がまウンチ
うんちうんちっち うんちうんちっち みんな偉いぞ ひろウンチ (イエイ！)
うんち うんちっち うんち うんちっち こころ晴れやか～♪
- うんち うんち うんちっち うんち うんち うんちっち



余分に溜め込むと心の健康を害するものの一つ目は不安、またの名を【ふあうんち】。二つ目は我慢、またの名を【がまうんち】。三つ目は疲労、またの名を【ひろうんち】。「不安」を口にするに一層不安が増すけれど、「ふあウンチ！」と言うとこころがちょっと軽くなる。「我慢」ばかりではイライラするが、「がまウンチ！」と言ってみると少し笑えるかもしれない。そして、「疲労」がたまってしまったとき、「偉いぞ、ひろウンチ！」と健気な自分の頑張りを褒め称えよう。

場合によっては、ウンチという言葉が、下品だと好ましく思われたいかもしれない。しかし、不安や我慢の最終音「ん」の発音は、体を硬くさせ（いきむときや踏ん張るときの「ん」）、ウンチの「ち」という音は笑顔を作る顔面筋が働き（写真を撮るときの「チー（ズ）」）気持ちを明るくさせる。そして、大人には臭い汚いと嫌がられる「うんち」も、小さな子どもたちにとっては、自分が日々生み出す大切なもの、分身のように親しみやすいものである。

日頃から、楽しいことばかりでなく嫌なことや辛い思いがこころに生じるのは当たり前のことだが、子どもたちは自分らしく夢中になって遊び楽しむことで、少しぐらい嫌なことがあってもこころはすっきり爽やかに整えられる。遊びは、子どものこころの整腸剤だ。今、コロナ禍で、自由に思いきり遊びにくい状況が生じ、子どものこころに（大人のこころにも…）、気づかぬう

ちに、たくさんの余分なモノが溜め込まれてしまいがちな毎日が続く。更に、子どもや障がいのある人たちは、自分のところが辛くても気づけなかったり、伝えられなかったりする。周囲の者がその不調に気づくことが遅れがちになることも少なくない。

感染症対策とはいえ、「我慢なさい」「言うことを聞いて」と叱れば互いにストレスが溜まってしまう。「【がまウンチ】がたまっちゃったね～」と一緒に笑い歌ってストレスを発散するほうが、子どもは安心して、ちょっと辛い現状をも受入れやすくなる。子どもたちがこのころの便秘で苦しまずに済むように、少しでも楽しくいられるように、そんな思いを込めて作った作品である。以下に曲の譜面を示す。

♪スリー・ウンチーズのうた C 曲：大島美知恵

②創作音楽童話「くいしん坊のピーと動物たち」

今回のオンラインコンサートでは唯一、物語形式で言葉をたくさん使い、視聴に時間（10分程）を要する作品である。その特長は、物語の進行に伴い、言語表現だけでなく、歌や各登場動物に合わせた楽曲演奏が同時に提供されることである。

Tinyでは、障がいの有無にかかわらずどんな年代でも安心して楽しめることを大切にしている。単に赤ちゃん向けに簡単にする、障害に応じて配慮するだけではなく、より多くの人に伝わりやすく皆が共に楽しめる工夫を心掛ける。本作品は、学生がパネルシアターを制作、視覚的提示によってわかりやすく楽しさを伝え、聴覚的にも、言葉だけでなく物語に連動させた音色と曲による演奏提示により、作品に趣きを与え、言葉の意味理解が難しい赤ちゃんや障がいのある方なども含め、豊かに作品を楽しめるようにと配慮したものである。



♡ 音楽童話 「くいしん坊のピーと動物たち」

作：土沢薫

登場動物：小鳥2、ウシ、ゾウ、ネコ、ヘビ、モグラ、フクロウ

ナレーション

「ここはTiny村。
ゆかいな仲間たちがたくさん住んでいるんですって。
おや、何だか楽しそうな歌が聞こえてきます。」

♪ あおいおそらに ふわあ～
くもにゆめのせ いったら
みんなのしい なかま
ころははずませ あ・そ・ぼ！

小鳥のピーは、食べるのが大好き。

今日もおいしい木の実をついばんでいると、かーさん鳥がいました。

「そんなに食べると、重くて飛べなくなりますよ」

飛べなくなったら大変！ピーは、食べたいののがまんするしかありませんでした。

「あ～あ、ウシさんはお腹いっぱい食べられて、いいなあ」

ピーは、ウシさんに言いました。

♪かーさん鳥の音楽

♪ピーの音楽

ウシさんはお乳をたくさん出すので、すぐにお腹がすいてしまいます。

いつも草をもぐもぐ食べていますが、本当はもっともっと食べたいのです。

「あ～あ、ゾウさんはお腹いっぱい食べられて、いいなあ」

ウシさんはゾウさんに言いました。

♪ウシさんの音楽

ゾウさんは身体がとっても大きいので、たくさん食べます。

たくさん食べますが、それでもすぐにお腹がすいて眠れません。

「あ～あ、ネコさんは少ししか食べないのに、ぐっすり眠れていいなあ」

ゾウさんはネコさんに言いました。

♪ゾウさんの音楽

ネコさんはしょっちゅう寝ているのですが、遊ぶことも大好きです。

寝ぼけてキラキラ光る系玉にじゃれついたら、コロコロコロ・・・。

玉は転がって、穴の中に落ちていきました。

「あ～あ、ヘビさんは、小さな穴に入れていいなあ」

ネコさんは、ヘビさんに言いました。

♪ネコさんの音楽

ヘビさんは、玉を追いかけて穴の中へ。

玉を取ろうとしますが、真っ暗な穴の中で玉がすっぽりとはまって取れません。

「あ～あ、モグラさんは地面が掘れていいなあ」

ヘビさんは、モグラさんに言いました。

♪ヘビさんの音楽

モグラさんは、地面の下から穴を掘り、玉を穴の外に押し出します。

玉は取り出されましたが、穴の外はまぶしくて、モグラさんは出られません。

「あ～あ、みんなは明るい世界で楽しそうでいいなあ」

モグラさんは、思わずつぶやきました。

♪モグラさんの音楽

この様子を木陰から見ているフクロウさん。

「キラキラ光る宝物、すてきだなあ」

フクロウさんが玉をくわえて飛び立ちます。

すると、キラキラキラ・・・

系玉がほぐれて、一筋の輝く光が空にかかります。

♪フクロウたちの鳴声

「まあ、きれい！」「うわあ、すてき！」

「フクロウさん、ありがとう」

ヘビさんも、ネコさんも、ゾウさんも、ウシさんも、小鳥のピーも、ピーのかあさんも、

みんながフクロウさんにお礼を言いました。

フクロウさんはうれしくなりました。

「モグラさんが掘って見つけてくれたんだ。モグラさん、ありがとう」

♪フクロウさんの音楽

空に光り輝く糸を見ることができないモグラさんに、感謝を伝えます。

モグラさんはうれしくなりました。

「へびさんが穴に入って見つけてくれたんだ。へびさん、ありがとう」

へびさんはうれしくなりました。

♪モグラさんの音楽

「ネコさんが糸玉で遊んでくれたんだ。ネコさん、ありがとう」

ネコさんはうれしくなりました。

♪へびさんの音楽

「ゾウさんが私の目を覚ましてくれたの。ゾウさん、ありがとう」

ゾウさんはうれしくなりました。

♪ネコさんの音楽

「ウシさんが声をかけてくれたんだよ。ウシさん、ありがとう」

ウシさんはうれしくなりました。

♪ゾウさんの音楽

「小鳥さんが話しかけてくれたんだ。小鳥さん、ありがとう」

♪ウシさんの音楽

小鳥のピーも、なんだかとってもうれしくて、幸せな気持ちになりました。

「みんなみんな、ありがとう。木の実をたくさん食べなくても、こんなに心が満たされるってわかったよ。」

♪ピーの音楽

幸せを感じて、思いっきり歌いたくなってきたピーは、今までで一番きれいな声で歌い始めます。

「ピーピー、ピロロ、ピピピピピ〜」

♪小鳥たちの鳴声

ピーの歌声に合わせて、みんなも歌います。

地面の下から、もぐらさんの声も聞こえます。

ピーの住む野原から、幸せの大合唱が聞こえています。

♪ あおいおそらに ふわあ〜
かぜにこころに ときめき
みんなえがお あふれ〜
こころはずませ あ・そ・ぼ!

ナレーション

自然の中で、じっと耳を澄ませてごらん。

動物たちの楽しい歌声が聞こえてくることでしょう。

あなたも「ルルルル〜、ラララ〜」、ぜひ一緒に歌ってくださいね♪



♪くいしん坊のピーと動物たち：動物曲

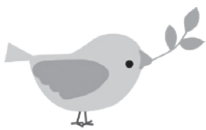
曲：大島美知恵

Handwritten musical score for various instruments:

- ゾウ** (Elephant): Horn (ホルン)
- ネコ** (Cat): Saxophone (サクソフォーン)
- ウシ** (Cow): Arpa (アールパ)
- ヘビ** (Snake): Clarinet (クラリネット)
- モグラ** (Mole): Fagotto (ファゴット)
- フクロウ** (Owl): Flute (フルート)
- 母鳥** (Mother Bird): Flute (フルート)
- ピー** (Pee): Flute (フルート)



小鳥のピー：
クラリネット



母さん鳥：
フルート

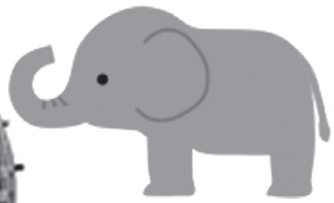


音楽物語「くいしん坊のピーと動物たち」では、物語の進行に従い、さまざまな動物たちが登場し会話を交わしていく。その際に、各動物たちのイメージに合わせた楽器（フルート、クラリネット、ホルン、ファゴット、オカリナ等）を用いてその動物専用の曲が演奏されるようになっている。

各動物のために準備した曲と、演奏に用いたそれぞれの楽器を紹介する。



うし・ぞう：
ホルン



ねこ・もぐら：
ファゴット



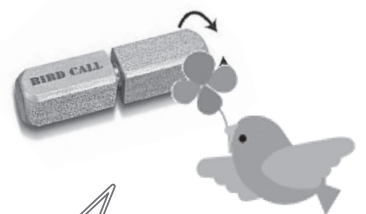
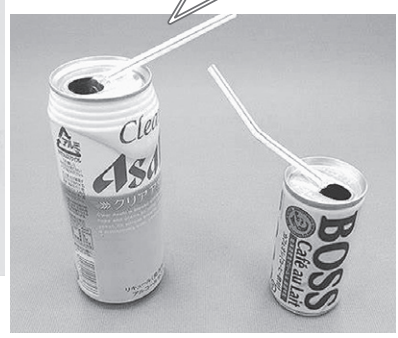
へび：
クラリネット



ふくろう：
オカリナ



ふくろうたち：
空き缶ふくろう



小鳥たち：
バードコール

(6) オンラインコンサート実施による成果と振り返り

①新たな繋がりや活動の広がり、学生の成長

2020年3月上旬時点で、コンサート動画の視聴回数はのべ934回再生となり、1,000回に迫ろうとしている。これまでのホール上演形式には来場されなかった方も、オンラインであれば好きな時に好きな場所で気軽に視聴できるメリットがあり、新たに多くの方にT i n yの活動に触れていただきやすくなったことは嬉しいことである。会場で多くの方々と感動を共にする喜びも素晴らしいことだが、障がいのある方や乳幼児連れのご家族にとっては、来場することのハードルがかなり高い方々もいることから、来場の負担がなくなることが助けになった方も少なくなかったと考えられる。これまでの活動が継続できない状況が生じて、「できること」を続けるために、これからICT活用は必要と考えられる。

そして、オンライン配信であれば、何度でも再生でき、好きな箇所だけを繰り返し視聴することも可能である。実際に、強いこだわりや感覚過敏など重い障がいのある方で、これまではT i n yファミリーコンサートに来場されてもホール内に入れずドア越しに鑑賞されていた方が、今回は、自宅で落ち着いてマイペースに鑑賞できることから、「何度も繰り返し見えています」というお話を伺った。オンライン配信というスタイルによる、想定以上のうれしい副産物であった。

また、学生たちは、例年のように障がいのある子どもやご家族と直接触れ合う機会はなかったものの、オンラインコンサートの活動を通して成長する姿をみせてくれた。コロナ禍で自粛生活を余儀なくされる中、感染症対策を徹底しながら、自分たちで主体的に取り組む学び合いの機会となった。4年生は、これまでの集大成として具体的活動イメージを膨らませていたにも関わらず活動できない苦しさを抱えていたが、オンラインコンサートの実施が決まると小道具づくりや出演、後輩の指導等に力を発揮してくれた。サークル長をはじめ中堅学年の学生たちは、責任感をもって中心となって活動をまとめ、以前にも増して自覚的・対話的活動する姿をみせていた。そして、特に1年生にとって、入学当初から不自由な大学生活を強いられる中、新入生同士や先輩たちと交流を深めながら創作活動へ意欲的に取り組むことができ、今回の活動の意義は大きかったと思われる。この活動で得た充実感や達成感を、次年度以降の活動や後輩たちへとつないでくれることを期待したい。

②オンラインではできないことや足りないこと、今後への課題

T i n yの活動に限らず、コロナ禍で全般的に減ってしまった反応への応答性、「共に感じること」「触れ合うこと」「やり取りすること」「響き合うこと」「五感を十分活動させること」「主体的に関わること」「喜びや感動を周囲と分かち合うこと」というような体験が、オンライン配信では困難になりがちである。そういう体験こそが、子どもたちが健全に成長する上で欠かせないものであり、T i n yの活動で大変重要と考えている点の一つである。今後しばらくは感染症対策が必要な生活が続くことなどを見越して、ICT活用のメリットは上手に活かしながら、それだけでは補うことが困難なかけがえないものを見失わず、その場の温もりや身体感覚、間主観的応答性を大切に活動を進めていきたい。

また、直接触れ合う活動ができなくなり、これまでT i n yファミリーコンサートを共催してきた認定NPO法人うりずんの皆様、出張T i n y隊等でかかわらせていただいている各種団体の皆様とのかかわりが、メール等でのやり取りや一方的な告知になってしまった。外部との交流活動が途切れがちになっていることも改善したい点である。

更に、現状におけるネット環境やICTの利用しやすさには大きな差や隔たりがあるため、ICT偏重がTinyの活動参加への新たな障壁を生じることのないように、ICTのみに偏った活動にせず、柔軟な発想で「障がいがあってもなくても皆が楽しい」活動を実施するための工夫や努力を重ねていきたい。

次に、今回のオンラインコンサートのお知らせチラシを示す。スマートホン等からも気軽に視聴していただけるよう、QRコードを付けるなど新たな工夫を加えた。しかし、気軽に視聴できるということは、反面、しっかりとつながることが難しいということである。今後は、一方的に配信し受け身的に視聴し楽しんでもらうだけでなく、双方向のつながりを大切にした活動も実施していきたい。

第8回Tinyファミリーコンサート2020

障がいがあってもなくても 子どもでもおとなでもみんなが楽しい音楽の集い

今年度は感染防止対策により、大幅に予定を変更して、オンライン配信の形で実施します。みなさんと体は離れていても、ここはつながりたい！そんなTinyの思いを込めて、3部形式で、皆さんに楽しんでもらえる工夫をいっぱい詰め込んでお届けします。楽しんでくださいね。みんなも歌って踊って、一緒に盛り上がりましょう♪

では、オンライン上で会いましょう！

※視聴用URL等は、下記および順次HPやFB等でお知らせしていきます。

障がいがあっても
なくても
みんなで楽しもう

Tinyのホームページも
どうぞご覧ください。
<https://www.tinytiny.info/>

3部形式に分けてお届けします！

第1部配信 9月26日(土)16:00~
⇒ <https://youtu.be/1GpRSYs1NIM>

第2部配信 10月13日(火)17:00~
⇒ <https://youtu.be/lGETKm9o3Us>

第3部配信 10月31日(土)12:00~
⇒ <https://youtu.be/fHm9qE7tvfo>

第1部は
こちらから

第2部は
こちらから

第3部は
こちらから

Music!

Dance!

Talk!

Ant!

Wai Wai

Tiny

主催: 宇都宮共和大学子育て支援研究センター Tiny
協力: 宇都宮短期大学音楽科

※YouTubeで
動画配信中で
す。
学生たちの手
作りコンサ
ートの実際を、
どうぞご覧
ください。

5. 彩音祭（大学祭）での展示活動

大学祭は、規模を縮小しての単日開催だった。毎年開催してきた音楽ワークショップの実施はできなかったが、音楽活動の紹介ビデオを作成し、オンラインコンサート動画と共に放映した。また、展示を充実させるとともに、手作り楽器体験コーナーや「Tinyくんにお願い」コーナーなどを設けて、来場者を楽しんでいた。

体験コーナーやお願いを実際に書き込んでいただくコーナーは、感染症対策に準備や手間が必要だったが、来場されるお子さんやご家族にとっては、実際に体験できる楽しい試みになったようである。学生たちは、準備から本番、そして後片付けまで、コンサート活動の実践で育まれた主体性や積極性を発揮して対応するとともに、例年より準備や当日の負担が少なかった分、自分たちも気軽に楽しんで参加できていた。

次回の彩音祭は、学生たちもゆとりをもって楽しめるように、実践充実と負担軽減、双方のバランスを取りつつ、ご来場の皆様と共にぜひ音楽ワークショップで楽しみ合うことができるようにと願っている。



6. 2020年全体の振り返りと今後のT i n y活動の展望

2020年は、新型コロナウイルス感染拡大で人類史に残る大変な年となった。身近な人と気軽に話し込んだり、安心して触れ合ったりすることができない現状を、2019年には全く想像しなかった。身体的距離を保ち接触に気を付けながら、私たちは周囲の人たちとどのように心をつなぎ、感じ、受け取り、癒し、育み、援助していくことができるだろう。2020年の年明け早々に新型コロナウイルスのニュースが流れ、春には新型コロナウイルス感染症対策のための休校や休業、リモートワークなどの急激な社会変化に振り回され、夏は新しい生活様式下でも拡大するウイルス感染への不安と共に過ごす日々だった。そして、秋、冬と感染は拡大し続け、この春にはワクチン接種が始まった。今後の社会状況がどうなっていくか、半年先の見通しも未だ定かではない。

一年を振り返って、不安や混乱、見通しの持てない中でも、T i n yとして今できることを真剣に模索しながら、新たなスタイルで活動を継続できたことは、大変ではあったけれど、実践して本当によかったし、新たな学びも多かった。

一人一人との実感あるやり取りと体験の共有を大切にしてきたこれまでの私たちの「当たり前」が、「当たり前」でなくなった今、柔軟な発想と豊かな工夫で時代に即した新しい援助や育ち合いの形を模索する必要性と、だからこそ変わらない人の育ちの本質を大切に続ける重要性が高まっていると感じる。

そして、これからの時代に活躍する力ある保育者や音楽療法士を育成するために、共に成長し合うための学びの場、育ち合いの場の在り方についても、時代の要請に応じて変わる必要がある。学生に対して、自ら柔軟に変えていける能力の育成も重要になるだろう。社会の変化に伴い、環境や形が変わるだけでなく、私たち自身の価値観やものの考え方も変化する。大きなパラダイム変化には、必ずと言ってよいほど表裏や功罪があることを肝に銘じつつ、注意深く見極めながら、一教員としても真摯に学びの道を探求していきたい。この一年を通して成長してきた学生たちと共に、これからも、若者のエネルギーや柔軟さや新たな発想を生かしつつ、各自の援助技術や専門性と、必要に応じてテクノロジーも含めたりソースをつなぎ合わせ、地域の現状や皆様のニーズに開かれた「最適な」「心地よい」環境や援助を求めて成長し合いたいと考えている。



この1年、コロナ禍にあっても活動を続けられたことの有難さを感じ、日頃からT i n y活動を理解し支えてくださるすべての方々に感謝いたします。最後に、いつも信頼し共に成長し合うことのできるT i n yの活動メンバーを記して、本稿の結びと致します。

☆T i n yの活動メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部

准教授 土沢 薫

准教授 星 順子

講 師 大島美知恵

& T i n y 隊の学生たち

Ⅲ. 親子遊びの会 ー子育てネットワークづくりプロジェクトー 実践報告

子ども生活学部 准教授 今村麻子

1. はじめに

「親子遊びの会」は下記のようなプロジェクトの目的を持ち活動をしてきたが、2020年はコロナ感染症流行のため、地域においても幼稚園や保育園の一時休園や登園自粛の期間もあり、年度の当初は親子を招いてのイベントを中止し、状況を見ながら開催することとなった。その結果、今年度は1回のみの実施となったが、感染症予防をしながら子どもたちが楽しく参加できる遊びや子育て支援イベントの形を検討する機会となった。また、当日の親子の様子や事後のアンケートを通して、幼い子を育てている家庭にとって、閉塞状況にこそ、このような親子を支える会の意義があると感じられた機会となった。

2. プロジェクトの目的

地域に暮らす未就学児をもつ家庭を対象として、父親を含めた親子同士、家族同士、異世代間の交流を目的とし、学生・教員ともに地域における役割について検討する。

活動に際しては、対象者が主体的に参加できることを目指し、親子で遊び、円滑な親子関係、親子同士の繋がりを促せるような援助のあり方について学生と教員ともに学ぶ。

3. 親子遊びの会2020年度の活動の計画

(1) 年間の活動テーマの設定

今年度の活動テーマは昨年度に続き、「親子で楽しむ絵本の世界」とした。子ども、保護者、教員、学生も一人ひとりが主体的に楽しめる遊びの場を創り出すことを目指すことはこれまでと同様に、テーマに沿った活動内容、環境構成、教材、活動の展開について工夫することで、内容に一貫性をもち、より楽しく充実した活動が展開できるのではないかと考えた。

(2) 参加対象者

近隣に在住の未就学児をもつ家庭。

(3) スタッフ

教員と学生が活動内容について企画、準備を行い、当日の運営、援助等にあたる。

(4) 実施期間・場所

本学施設

4. 実施した活動の概要

地域の親子同士のネットワークづくり「親子遊びの会」の実施計画に基づき、参加者を募集した。「親子で楽しむ絵本の世界」をテーマに持ちながら、withコロナの時代に応じた親子支援の

方法を学生とともに探る機会とした。

(1) 活動の概略

日 時：10月31日（土）9時30分～11時30分

テ ー マ：「ぐりとぐらのえんそく」～親子でテントをつくろう～

当日参加者：未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）9家族 28人

募 集 方 法：本学HPに情報公開、昨年の参加者へ連絡（メール・電話）、チラシ

場 所：本学グラウンド芝生広場（雨天の場合は中止とした）

(2) 活動の進め方とタイムスケジュール

プロジェクト参加：子ども生活学部1年～4年生（3年生は施設実習前期間のため当日は参加自粛し事前準備に関わった）

当 日 参 加：学生11人、教員4人（今村、田所、牧野、丸橋）

(3) 事前準備

学生の取り組み

第1回	10月2日（金）放課後	活動内容の検討
第2回	10月9日（金）放課後	活動内容、活動の流れ決定
第3回	10月16日（金）放課後	係分担、教材研究 → 分担して進める
第4回	10月23日（金）放課後	担当ごとに準備を進める
第5回	10月30日（金）放課後	最終打ち合わせ・環境設定

(4) コロナ感染症対策

本学のコロナ感染症対策を基本として以下のような対策を行った

- ・事前に「親子遊びの会コロナウイルス感染予防対策」を参加者に周知した
- ・密を避け屋外での実施とした、受付も屋外で行った。
- ・昨年までより時間を短縮した
- ・各家庭単位で行える遊びを企画した
- ・消毒の徹底
- ・学生は2週間前からの検温し当日「健康管理表」を提出した

(5) 当日10月31日（土）の流れ

9時00分：スタッフ集合受付準備・環境設定・安全確認

9時30分～：受付開始（グラウンド入り口・バス停前）

10時00分～：はじめのあいさつ（アリーナ前）

10時05分～：みんなで体操

ぐりとぐらからの手紙（会場案内図・今日の予定のぬりえ）を渡す

10時15分～：「親子でテントを作ろう」「シートに寝転んで空を見上げよう」

3本の支柱とカラービニールを使ってテントをた遊ぶ

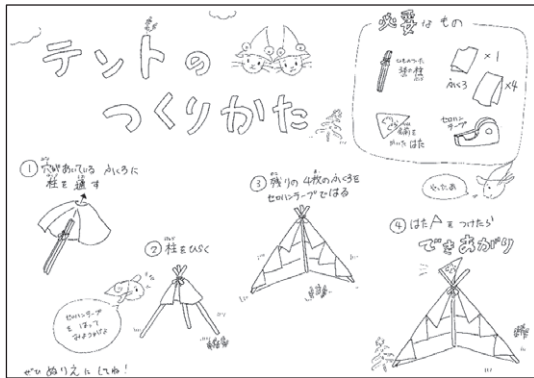
保護者と教員の懇談

学生はテント製作を補助しながら親子の触れ合いを援助する、遊びのコーナー（ケンケンパコーナー・落書きコーナー等）を見守る。

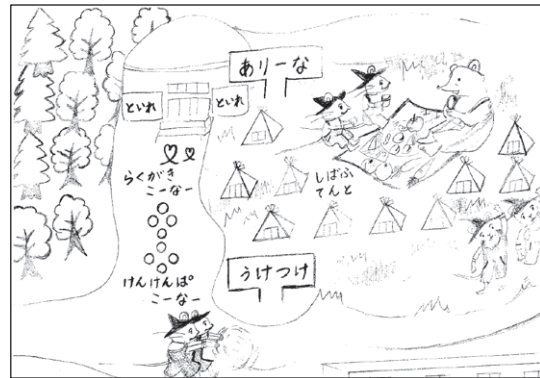
11時15分～：片付け、アンケート記入

11時30分：閉会

終了後：活動のふりかえり（学生と教員のミーティング・学生ホール）



学生手書きの「テントのつくり方」



「ひろばのちず」各コーナーやトイレの場所を示す会場図になっている。



司会の1年生。ぐりとぐらからの呼びかけをしているところ。親子の前で話すのは初めてのことに。



学生がデモンストレーションを行ったあと、親子で好きな場所に思い思いのカラフルテントを建てた。学生もお手伝い。



芝生広場は十分な三密対策



らくがきコーナー・けんけんぱコーナー

5. アンケート結果

(1) 保護者アンケートの結果 (9名)

○今回の活動はいかがでしたか

楽しかった9名 (100%)

○印象に残ったこと、気づいたことなどありましたらお書きください。

- ・外で活動できたことが良かったと思います。
- ・テント作りで子どもが自由にやれたこと！発想が素敵！！
- ・テント作りも、お絵かきも楽しそうでした
- ・久しぶりに参加させてもらって、広いお庭でのびのびできて楽しかったです。
- ・カラフルテント、可愛くてよかったです!
- ・テント作り
- ・外でテントを作って、遊んで楽しかった
- ・外で思いっきり遊べた
- ・自由に子どもに任せ活動させてくれて子どもたちは生き生きしていました。学生のみなさんが子どもたちと遊んでくれたり見守ってくれるので安心して過ごすことができました。

○親子遊びに保育者を目指す学生が参加していますが、学生に何を望まれますか。

- ・熱心さ
- ・慣れや経験よりも「本当に子どもが好きなんだなあ」というのが見えるような先生だとこれから園に預けた時に親は安心です。
- ・たくさん子どもたちと関わってもらいたいです。
- ・笑顔と優しさ
- ・外で自然と触れ触れ合える会を増やしてほしい。
- ・見守る、子どもたちの意見や思いを聞いてくださる保育者になっていただけると安心します。
- ・子どもが安心してあそぶ姿を見てこんなすてきな先生にみてもらいたいと思いました。
- ・子どもに寄り添ってくださること、感謝しています。安心してお姉さんたちに任せていられることを見守ってくれることで少しほっとする時間が過ごせました。
- ・子どもと一緒に遊んでくれて助かります。

○親子遊びの会に期待することはどのようなことですか

- ・このような状況の中、会を開いてくださったことに感謝しています。楽しい時間をありがとうございました。
- ・コロナがあり大変かと思いますが回数をふやしてほしい。
- ・外での活動だと安心します。
- ・外でのびのび遊べる会、今日もとてもよかったです。回数が増えてほしい。

(2) 学生アンケートの結果 (11名)

○今回参加してどうでしたか

楽しかった 10人 (91%)

まあ楽しかった1人 (9%)

○その理由

(1年生)

- ・子どもが楽しんでいるのを見られたから。
- ・子どもたちが私たちが考えたもので遊んでくれたり、笑顔で走り回っていたりして嬉しかったから。
- ・子どもたちと楽しくふれあうことができたから。
- ・子どもとたくさんふれあうことができたし、反応してくれたから。
- ・子どもとのふれあいがなかなかできない中、会うことができたから。
- ・幼い子どもたちとたくさん遊んで楽しかった。あまり子どもと遊ぶ機会がなかったので、いい経験になった。
- ・初めてで緊張したけど、触れ合えて楽しかった。
- ・初めて保育学生になってから子どもと触れ合ったから。

(4年生)

- ・待ちに待った親子遊び。久しぶりに外で親子と活動ができて楽しかった。天気も良くて、みんな大きくなって、たくさん走って笑ってすてきな時間でした。
- ・久しぶりに会えて、お子様の成長に驚いたのと、子どもたちとたくさん遊べて本当に楽しかった。久しぶりに子どもたちにあえた！

○親子遊びに来ていた親子の遊びや触れ合いの様子を知ることができましたか。

よく知ることができた10人 (91%)

まあ知ることができた1人 (9%)

6. 活動の振り返りと今後の課題

開催当日は晴天に恵まれ、子どもたちがのびのびと遊ぶ姿が見られ、保護者からも多く「再開を待っていました」「一歩外へ出る勇気が出るこんな機会が嬉しい」と声をかけていただいた。アンケートにも次回以降の開催を望む声が多く、会の意義に手応えを感じることができた。

保護者のアンケートの自由回答には外遊びを望む声も多くあった。今回は、コロナ対策をきっかけとして外遊びの計画にした面があるが、感染予防という点以外にも、子どもが広い場所で体を自由に動かすことができる点に賛成の意見が多かったようだ。

また、「安心してお姉さんたちに任せていられる。」「学生のみなさんが子どもたちと遊んでくれたり見守ってくれるので安心して過ごすことができました。」とのコメントもあった。未曾有の感染症の禍の中で、子どもたちを外に連れ出すこともままならず家の中で子どもと過ごしていた親にとっては「一緒にお子さんを見ていますよ」という学生が近くにいる間は少しほっとできる嬉しい時間だったのではないだろうかと考えた。今回のイベントはそれぞれの親子の遊びの時間となるように準備したが、信頼される学生達がいって親子を見守り支える役ができたことはこの活動の貴重な面だったと思う。親が子どもから離れてほっとすることは、単に休むだけでなく、子どもを違う角度から見るができる良さがある。わが子の違う部分を客観的に見たり、子どももまた学生達と一緒に親とは違う体験ができるということで発達が刺激されたりする。コロナ禍が過ぎ、再び親子遊びの会の活動の「親とは違う学生と遊ぶことで親子が経験する新しい体験の意義」も活発に実践できるようになることを望みたい。

学生のアンケートからは、子どもとの触れ合いを純粋に楽しんだ様子が伺えた。今回はソーシャルディスタンスをとりながらの関りとなったこともあり、1年生は子や親への関わり方には難しさも感じた様子だったが、初めて見る親子の遊びの様子にたくさんの気づきがあったと振り返っていた。4年生は再会した子ども達の成長に驚き、保護者と喜び合っていた。会が定期的に連続性をもって開催されてきたことの意義であると感じた。

年度のテーマである「親子で楽しむ絵本の世界」も外遊びと両立して実施することができた。1年生が中心となって、「ぐりとぐら」をモチーフにして当日の内容を決めていった。まだ会ったことのない子ども達の反応や過ごし方を想像しながらのプログラム作成やひとり一人へのお手紙と封筒作成などは保育の力を育むものになったと思われる。

今回、3年生は施設での実習を目前にした期間にあたり、コロナ感染症予防のために当日の参加を自粛したが、事前の計画や名札の製作などに関わっていた。当日に参加しなくてもプロセスを楽しみ、保育に関わるやりがいやチームワークを学ぶことができるようなボランティア精神旺盛な学生のグループの形成を支援していきたい。

親子の遊びの方法や子育て支援について、またコロナ禍における取り組みについて引き続き検討し、今後の開催について考えていきたい。

(親子遊びの会 子育てネットワークづくり事業メンバー)

代 表	准 教 授	今村 麻子
子育て支援研究センター長	特 任 教 授	牧野カツコ
子ども生活学部 学部長	教 授	河田 隆
	教 授	杉本 太平
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	田所 順子
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	丸橋 亮子

IV. 自然遊びの会・行事实践報告 ～親子ふれあいネイチャー事業～

子ども生活学部 教授 桂 木 奈 巳
子ども生活学部 助教 田野邊 涼

1. はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2014年より、宇都宮市の「みやの環境創造提案実践事業^{注1)}」において提案した事業の一環として、年に3～4回の頻度で大学内の子どもの森において、「自然遊びの会」を実施してきた。各回ともに何らかの形で生物多様性を取り上げ、その季節に合う形でプログラムを検討し、親子を対象に実践を行ってきた。プログラムは学生との相談で作るが、同時に活動場所である子どもの森の整備を行い、行事と整備をつなげる形態で進めてきた。すなわち、整備で出会う自然物を活かせる形で活動内容を考えたり、活動しやすいように場所の手入れを行う等である。したがって、1回の行事でも、数ヶ月の準備期間を要する時もある。

2020年度は、NPOうつのみや環境行動フォーラム・生物多様性部会^{注2)}（以下、環境行動フォーラムと略す）からの呼びかけにより、「親子ふれあいネイチャー事業」として行事の合同開催を行なった。この団体の目的と、我々の活動テーマが一致することに加え、外部団体との協働が我々の活動に良い刺激となることを期待した。2020年度は2つの行事を開催した。以下に内容を紹介する。

2. 「親子ふれあいネイチャー事業8月」の実施

2-1 実施の概要

今年は通常時の準備に加え、新型コロナウイルス感染症対策を講じる必要があった。そこで、「自然学校等を実施している事業体における新型コロナウイルス対応ガイドライン」^{注3)}を元に、本学における基本方針を加えた独自のガイドラインを作成した。学生には、通常時の指導に加え、感染対策に関する指導を行った。さらに感染対策のガイドラインの一部を参加者へ提示し、協力を求めた。実施の概要を表1に示す。環境行動フォーラム側は集客と参加者への連絡及び当日の受付や救急関係、バーベナ側はプログラムの検討を含めた行事の実施を担当した。

表1 行事实施の概要

実施日時	令和2年8月15日（土）10：00～12：15
実施場所	宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ
学生スタッフ	4年：中島ありさ、大場 健作、若杉 知也 3年：檜山 幹弥、佐藤 優輝（統括） 2年：建 優寧
プログラムの内容	①ノーズ ②昆虫採集 ③生き物美術館 ④竹の水鉄砲づくり
参加者数	34名（大人17名、子ども17名）／10家族、体験参加学生1名

2-2 活動の様子

行事の実施にあたり、感染リスクの低い屋外での実施であったが、当日は猛暑の予報が出されたため、特に動きの激しい学生側の熱中症が懸念された。そこで、感染対策を講じつつ『新しい生活様式』における熱中症予防行動のポイント(厚労省)¹⁾に準じて活動を行った。2mの距離を置くことを条件に、学生はマスクを着用しないこととし、参加者にも了解を得た。資料1に活動の概要を示す。今年度は密を避けることを課題とし、家族単位で実施できる内容を工夫した。使用する物品類も家族単位でまとめ、消毒を徹底した。

プログラムは主に日陰を中心に展開した。毎年人気のある「昆虫採集」においては、日照が強い場所を避けて虫探しを行うことになり、日陰で見つかる生物が多く採集された。採集した生物は、ネイチャーゲームである「森の美術館」をアレンジし、「虫の美術館」を作り上げ、各人で鑑賞する形をとった。自然の中での「展示」ということもあり、プログラムを提供した我々の方においては、いつもと違う森の表情を感じることができた。

後半部分は、熱中症対策を兼ねて、竹を使った水鉄砲づくりを行った。学生も子どもと共に存分に遊ぶ姿が印象的であった。

資料1 活動の概要 (バーベナのサイトより抜粋)

「親子自然ふれあいネイチャー事業 (夏の自然遊び)」を実施しました

2020年8月15日 (土)

大学内で、定例イベントを実施しました。今回はNPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。朝の準備中は「蚊」につきまとわれましたが、気温の上昇と共に姿を消しました。

最初にネイチャーゲームの「ノーズ」。学内の森にも住んでいるヘビ、ここ数年私たちが注目しているカマキリとチョウのクイズをだしました。ヘビは難しかったみたいです。

次に虫採り。暑さのせいか、虫も避暑中?。よくいる種類も姿をあまり見せませんでした。今年はトンボの種類が豊富でした。スジグロシロチョウや、恒例のカマドウマもいました。例年は「生きものピラミッド」で捕まえた虫たちの「つながり」をみますが、密回避のため、「虫の美術館」で捕まえた生き物たちの見せあいっこをしました。森の中ということもあり、本当の美術館のような雰囲気でした。

終了後は、恒例となってしまう竹水鉄砲での遊び。熱中症対策もかねています。

猛暑でしたが、無事終了、ご参加いただいた皆様、暑いところ、ありがとうございました。



○はじまり

木陰で開始です。暑さレベルは「日向よりは少しマシ」。



○ノーズ

ヘビも最近姿を見ていません。涼しいところに隠れているみたいです。



○虫取り開始

捕虫網を手にした途端、すぐに虫採りに。例年、森の奥の方まで行く方はいらっしゃらなかったのですが、今年は違いました。狙っている虫（カブトムシたち？）は、このエリアにはあまりいないです。



○穴が気になる

虫よりも、地面に空いている穴が気になる。棒を突っ込んでみたり。ぐるぐるしたり。



○虫の美術館

捕まえた生きもののうち、お気に入りを展示します。題名を付けますが、このときに生きものを良く観察できます。「ギザギザマン」は、カマドウマの足のトゲトゲに注目したそうです。



○水鉄砲作り

アリーナに移動して、竹の水鉄砲作り。



○水をとばしてみよう

市販の水鉄砲とは違い、押し出し部分の調整が必要です。



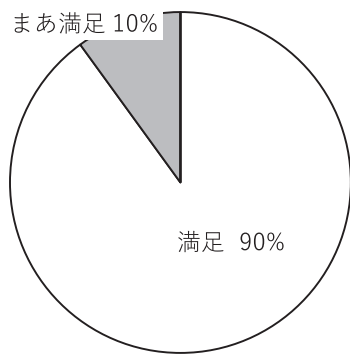
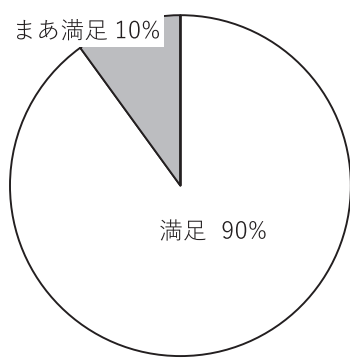
○学生さんをねらう

的にされている学生さん。傘で防戦しているのに背後から。「水鉄砲=着替え持参」が定着しているので、積極的に的になっています。

2-3 参加者の反応

資料2に環境行動フォーラムによる総括・評価、および参加者（保護者）に依頼したアンケート結果の一部を示す。概ね良好である評価をいただき、さらに参加者の満足度も高いといえる。スタッフ対応においては、保護者においては、子どもとよく遊んだり丁寧な対応は印象的であった様子であり、保育を学ぶ学生ならではの利点が現れているといえよう。

資料2 アンケート分析および評価^{注4)}

<p>総括・評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は新たな取組みとして、主に未就学児とその保護者を対象に、宇都宮共和大学長坂キャンパス内こどもの森とアリーナを活動場所にして、親子が五感を使って楽しく遊びながら、自然とふれあうことを目的とした事業を開催しました。 ・今回は親子10組を対象として募集しましたが、わずか30分程度で定員となるなど、関心やニーズは高いことがわかりました。当日は猛暑となりましたが、最終的には10組34名の親子が参加しました。 ・当日は屋外（樹林地内）での活動を約1時間、屋内（アリーナ内）での工作と水遊びを約1時間行いましたが、参加者のほとんどが「満足」と回答していました。これは、猛暑の中でも、樹林地内は比較的涼しく、木漏れ日の中、親子が安心して活動が行えたこと、内容が未就学児も親子と一緒に楽しめるものであったこと、また、学生の皆さんが一人ひとりに寄り添って、丁寧に声かけや説明、安全管理等を行ったことが、この結果につながったものと考えられます。 ・今回は、共和大学の学生の皆さんが普段、サークル活動をされているこどもの森とアリーナを活動場所として利活用させていただいた上に、事業実施に必要な機材や物品等についても、全面的な協力をいただいていたこと、桂木先生のご支援のもと、事前の現地確認やリハーサル、的確な役割分担、メンバー相互の連携等により、円滑に事業運営がなされました。 ・今回は新型コロナウイルス感染症対策を適切に講じながら当該事業を実施しましたが、このような状況下においては、3密を避けながら、今回のような屋内・屋外での活動の組み合わせや内容、時間配分がベストと思われます。
<p>参加者の反応・アンケート結果より</p>	<p>Q1) 講座内容はいかがでしたか？</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>□ 満足 ■ まあ満足 ■ やや不満 ■ 不満</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・森の中でいろいろ見れてよかった。 ・日頃、経験できないことをたくさん行えた ・虫とりも工作も楽しめました。工作は簡単でちょうど良かった ・虫さがして、涼しい自然の中でできて楽しかった。 ・虫探し、水鉄砲、ともに楽しめました。 ・楽しく活動に参加させていただきました。 ・森の中での活動がおもしろかった。 <hr/> <p>Q2) スタッフ対応はいかがでしたか？</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>□ 満足 ■ まあ満足 ■ やや不満 ■ 不満</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・カエルを見つけてくれたり親切だった。 ・みなさん親切でした。気さくに遊んでもらえました。 ・子供に優しく対応していただきました。 ・元気よく声をかけていただきました

2-4 学生の感想

表2には、行事にスタッフとして参加した学生の感想を示す。活動をしながらか自分自身が楽しんでいる様子がみられる。自然に対する興味関心や感じ方は多様であり、このような行事を通して、いつもの仲間とは異なる人々と触れ合うことで、新しい発見を得ることができる。この点への気づきも出された。感染対策に関しては、どこまで学生に受け入れてもらえるか不安を感じていた。しかし、行事の前に4年生が教育実習を行っており、この時の指導の効果により、特に4年生が最初に積極的に対策を行う姿を見せてくれた。後輩の学生はこれに倣う形で実施していたが、その過程で感染対策の重要性が伝わった様子であった。

表2 参加学生の感想

○活動して良かった点・感想
・生き物に対する興味関心を親子で育むことができる活動になった。
・子どもたちはネイチャーゲームや虫を捕まえることによって自然に興味を持ってくれた。「楽しい！」の一言で活動を行ってよかったと感じた。
・水鉄砲を使って開放的に遊べたことがよかった。コロナの状況で外出が困難だからこそ、バーベナの活動を実施できたことは意味があることだと思った。
・子どもたちの視点を子どもたちから教わり、新しい視点で自然に触れることができた。
○自分自身の成長を感じた点
・活動を実施するにあたって、生き物の知識を学ぶことや、知り得た情報をわかりやすく伝えることの大切さを実感できた。
・活動の事前準備から実践にあたって、時間と内容、参加者の様子など様々な視点から考慮して調整し、実施できたこと。「見通す力」「その場に臨機応変に対応する力」が身についた。この経験は今後の社会生活で役に立つスキルだと思うので、自ら実践することの大切さを学べた。
・ソーシャルディスタンスを意識しての活動にはなったが、感染対策をしっかりと行うことで子どもたち、保護者も楽しめるプログラムになったと思う。事前準備の大切さを改めて感じる事ができた。

3. 「親子ふれあいネイチャー事業11月」の実施

3-1 実施の概要

夏と同様の体制で、11月の行事を実施した。表3に実施の概要を示す。この時期はコロナウイルス感染者が徐々に増加する傾向であった。ウイルスの特性上、夏よりも対策を強化する必要があった。また、アイスブレイクにおいても活発な内容は避けるようにした。

表3 行事实施の概要

実施日時	令和2年11月28日（土）10：00～12：15
実施場所	宇都宮共和大学内子どもの森
学生スタッフ	4年：大場 健作、中島ありさ、柳田 麻佑、若杉 知也、福田 祐太 3年：佐藤 優輝、市丸 玲菜 2年：大槻 友里（統括）、建 優寧
プログラムの内容	①どんぐり入れ競争 ②森の福笑い ③杉板アート
参加者数	19名（大人11名、子ども8名）／8家族、体験学生6名、卒業生2名

3-2 活動の様子

資料3に当日の活動の様子を示す。キャンセルが多く、予定より縮小した形で実施した。例年であれば、受付を早く済ませた家族の子どもたちと学生と一緒に遊び、賑やかな雰囲気があるが、

今年は静かな開始となった。

来年度以降の行事運営を視野にいれ、2年生に統括を体験させ、4年生はその補助に回ることにした。後半で実施したクラフトでは、家族単位でブルーシートを広げ、材料や道具も家族毎とし、他家族と混ざることがないように配慮した。スタッフとなった学生各々も行事を楽しんでおり、コロナ禍であることを忘れるようになりラックスした一面もあった。

行事中に偶然、ある学生がハラビロカマキリを採取し、水につけてカマキリの体内からハリガネムシを出した。これを虫に詳しい学生が「食物連鎖の一例」という視点で紹介した。予定外の出来事であったが、参加者は興味津々の様子であった。このような偶然の発見も、自然の中ならではの醍醐味であろう。

我々人間がコロナウイルスに翻弄されている時でも、自然の営みは変わらずに粛々と行われていることを目の当たりにした出来事であった。

資料3 活動の概要（バーベナのサイトより抜粋）

「親子ふれあいネイチャー事業（秋の自然遊び）」を実施しました

2020年11月28日（土）

大学内で、定例イベントを実施しました。今回もNPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。

最初に「どんぐり入れ競争」。ただ、どんぐりをバケツに投げ入れるだけですが、意外と入りません。

次は「森の福笑い」。森の中に普通に立っている木ですが、よく見ると何かを言いたげな顔をしているような。。？そんな木や葉っぱに「目」を貼ったり、「口」を貼ったりして、「森の妖精さがし」をしました。笑っている切り株や、ちょっと悲しんでいる木など、静かな森がにぎやかになりました。様々な形や種類の木があることで、自然の景色も豊富になります。そんな多様性を感じられると嬉しいです。

最後に杉皮を使って製作をしました。森の材料等を使い、のんびりと製作しました。ステキな作品が森の中にあふれました。本当は製作者の解説つきでの観賞会が良かったのですが、コロナ対策で適いませんでした。ぜひ、ご自宅に飾り、自然を感じてください。

番外編で、ハリガネムシの登場。活動中に見つけたので、急きょ紹介させていただきました。ちょっとギョッとする生きものですが、自然界では大切な役割を担っていることもご紹介できました。

お天気もよく、無事終了しました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



○はじめり

快適なお天気です！



○どんぐり入れ競争

手元のどんぐりを投げ入れます！



○森の福笑い

「この木、上から手を広げて、ちょっと怒っているみたいに見える!？」



○目をペタリ

妖精? 探しの始まり!



○泣いてる!

その他、「かばお」(カバのような顔)、クリスマス風、何かを企んでいる? ような顔など、いろいろ登場しました!



○作品のわかちあい

森の各場所に出現した「誰か」を探しに行きます。



○杉板アート

森にあるものを使い、杉板で自由に製作をしました。
 家族単位にセットをお渡しし、好きなどころにシートを広げて製作しました。素敵な作品が次々と生まれます。



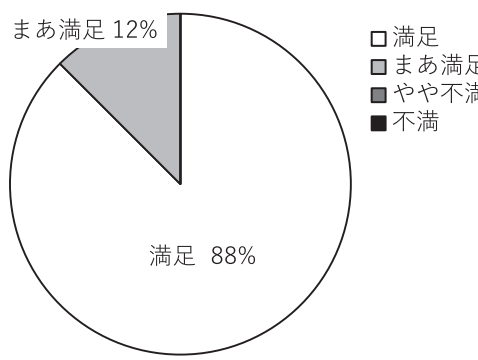
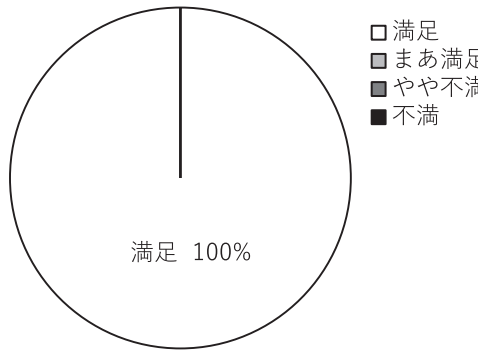
○製作中に...

偶然見つけたハラビロカマキリからハリガネムシが出てきました! ハリガネムシはこの時期の定番ですが、行事で紹介したのは初です。初参加の1年生が紹介してくれました。

3-3 参加者の反応

資料4に環境行動フォーラムによる総括・評価、およびアンケート結果の一部を示す。8月と同様、良い評価をいただき、参加者の満足度も高い。

資料4 アンケート分析および評価^{注4)}

総括・評価	<p>今回は11月末の開催ということで、宇都宮共和大学長坂キャンパス内こどもの森を活動場所にして、約2時間、森の中で、親子で自然とふれあう体験活動やゲームを行いました。</p> <p>澄んだ青空の下、8組の親子、総勢19名が森の中で「ドングリ競争」や「森の福笑い」を楽しんだあとに、最後は思い思いに「杉板アート」を作り上げました。「杉板アート」では、それぞれの家族が力を合わせて、木の葉や木の実をたくさん使って、見事なアート作品を作り上げました。</p> <p>活動中、学生の皆さんは参加者一人ひとりに声かけをしたり、丁寧に説明を行ったり、子ども目線で寄り添いながら一緒に活動をされていました。その結果、参加者全員がスタッフの対応について「満足」と回答され、内容についてもほとんどの参加者が「満足」と回答されていました。</p> <p>今回も事業実施に必要な機材や物品等について、全面的な協力をいただいで活動となりました。桂木先生のご支援のもと、事前準備、現地確認やリハーサル、的確な役割分担、メンバー相互の連携等により、円滑に事業運営がなされました。</p> <p>今回もスタッフの健康管理や参加者の検温等、新型コロナウイルス感染症対策を適切に講じながら当該事業を実施しました。引き続き対策をしっかりと行いながら事業を推進してまいります。</p>	
参加者の反応（アンケート結果より）	<p>Q1) 講座内容はいかがでしたか？</p>  <p>Legend: □ 満足, ■ まあ満足, ■ やや不満, ■ 不満</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・森の葉や木の実をたくさん使って工作できて楽しかった。 ・楽しかった。目をつけたり、工作したり、活動が充実していた。 ・自然を楽しめた。 ・普段出来ないことが出来た。
参加者の反応（アンケート結果より）	<p>Q2) スタッフ対応はいかがでしたか？</p>  <p>Legend: □ 満足, ■ まあ満足, ■ やや不満, ■ 不満</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・とてもやさしくてよかったです。 ・子供に優しく対応していただきました。 ・ひんぱんに声をかけてくれました。 ・子供が楽しめる雰囲気をつくっていただきました。 ・優しくかった。準備を色々ありがとうございました。

3-4 学生の感想

表4に学生の感想を示す。今回は自然と向き合い、じっくり取り組む内容であったため、学生も親子の様子をよく観察できた様子であった。アイスブレイクに位置付けたゲームは単純な内容であったが、かえって自然物に対する子どもの反応やそれを見つめる保護者の様子などがわかり

やすかったようである。マスク着用のため、表情が読み取りにくいだが、学生は周囲の状況も加味してよく捉えている。例年では、例えばある父親が、別の家族の子どもと関わる等、家族を超えた好ましい交流場面が見られた。今年はこの期待できないと予想していたが、直接の交流がなくても自然物等を介して行われていた。学生の感想にもこの事が記載されている。

この行事では、生物多様性が主題であるため、あえて学生が保育内容等を意識するような配慮はしていない。しかし、学生の中では、これまでの学びの蓄積を応用して行事を運営しているようである。さらに、先輩をモデルとして今後を考えるコメントもあった。行事毎に先輩は自分の体験を元に後輩に様々なアドバイスをしており、逆に得意分野を持つ後輩は先輩に教える場面も見られる。今後もこのスタイルを維持したい。

表4 参加学生の感想

○活動して良かった点・感想
<ul style="list-style-type: none"> ・季節によって変化する森の中で、秋を感じながら体を動かしたり、製作に秋を取り入れたりする様子を見ることができた。 <どんぐり入れ競争> ・どんぐり入れで使用したどんぐりを2歳の女の子が無意識に手で触りながら感触を味わっていた。新しい発見にたのしみを見出して、いろいろと感じたり味わったりしていたと思った。 ・子どもたちの中には“ドングリ”という身近なきのみの大きさや匂い形に注目し保護者の分も溢れるほど手に乗せて「いっぱいだよ。みて、みて。」と喜びを表現する子もおり、普段は触れることの少ないきのみを通して、感触を楽しんでいる様子が印象的だった。 ・ドングリを投げてバケツに入ることが嬉しい・楽しいと感じる子どもがほとんどで、他の子の様子を見て“楽しそうだな、僕もやろう”と活動に参加して、喜びを共有する子もいた。その様子を見た周りの保護者たちも「すごいね。やった!」と子どもの気持ちに共感し、温かい環境づくりも十分に行われていたと感じた。 <森の福笑い> ・森の福笑いの中で、子どもの視点と大人の視点がそれぞれありいろいろな発見があった。 ・森の福笑いではいろいろな見立てが面白かった。親子のかかわりがたくさん見られた。 ・自然物を使った活動の展開方法に驚いた。参加者の子どもの様子も、生き生きとしていた。 ・森の福笑いで「自分が作ったものを見てほしい!」という声があった。子どもって見てほしいものがあると表情や体の動きで表現するんだなと思った。 ・同じ素材を用意していても、子どもの感性は異なり、自分なりの表現を一人ひとりがしている様子が非常に印象的だった。それに対して保護者も、子どもたちの自由な発想を受け入れ、どうすれば子どもの考えを表現できるのか、大人なりに材料を工夫して、親子が協力している様子も見ていて微笑ましいと感じた。また、他の参加者が作った作品を見て心を躍らせ、「すごいね。かわいいね。」と自分とは異なる感性を持つ子もいるということを理解して受け止めている子どもがいたことも、とても印象に残っている。 <杉皮製作> ・杉皮を使っの製作が初めてだったが、それぞれの使い方が見ることができていろいろな発見があった。 ・製作では、材料をそれぞれ個別にパッキングしたことで参加者の方も安心して取り組んでいたと思う。安心して楽しく行うための準備や環境構成についても学ぶことができた。 ・森の福笑いの続きの活動として、自由に表現あそびを楽しむ子どもの姿が印象に残っている。福笑いで顔を作った為、その後も杉皮を使って自分や家族の顔を表現する子どもも多いた。保護者も子どもの思いに共感し、自然の中の植物からヒントを得て子どもの考えを形にする手助けをしている様子も、この活動ならではの良さだと感じた。
○自分自身の成長を感じた点
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい活動の中に、様々な体験が含まれているからこそ子どもたちにどんな体験をしてほしいのかを考えながら援助をする大切さを学べた。 ・コロナの状況の中でも、しっかりとした対策を行ったうえで実施をすれば、安全で楽しい活動が行える。安心してもらえるような内容や対策を実施する側でしっかり共有しておくことが大切なことだと知れた。 ・先輩たちが堂々と進行をしていたり、子どもたちに援助をしたりする姿など柔軟な対応を見ることができた。自分も状況に応じて動けるようになりたいと思えた。 ・自分自身、森での活動をこれまでの体験から“親と子が一つになって自然に親しむ”ことを大切にしてきた。その為、今回も家族の様子を見守りながらの活動にしていたが、その後、保護者の方から「お姉さんも、見ているより一緒にやった方が楽しいよ!」と声をかけていただき、一緒になって楽しむことにした。このことから、活動を見守るだけでなく一緒に楽しむことも楽しさを伝える手段なのだと思えた。

・初めて、杉皮クラフトを経験し、子どもたちは自分なりの表現を自然の中の植物や素材から考え発想を形にすることを楽しんでた。福笑い同様親子で会話を楽しみながら活動に参加している様子から、素材を集めやすいよう、一緒に自然の中を子どもと探すことで自分自身も活動を楽しんだ。その中で、子どもがどう感じ何を表現したいのかを理解できるようコミュニケーションをとったが、まだまだ子ども理解が十分でないと感じた。今回の体験から、子どもの視線や表情をしっかりと観察し子どもが今何を感じているのか、どう遊びに取り組んでいるのかを理解する“子ども理解”の大切さを学べた。

4. おわりに

今年度は、2回の行事開催により、新しい生活様式における活動の方法を模索することができた。感染対策を講じるにあたり、複雑な工程を除くことで、動線を単純にすることを試みた。これにより、プログラムの内容の吟味や精査が必要になったが、当日の負担は減った印象である。今年度の活動においては、力を入れて実施した感染症対策の効果で感染者は出なかった。対策により安心して楽しく活動できることが確認され、学生側においても対策の重要性を理解してもらえたと感じている。

新型コロナウイルスにより子どもたちが屋外で遊ぶ機会が減少傾向にあるという。現に屋外でのイベント類の中止が相次ぎ、本グループにおいても5月の行事は中止せざるを得なかった。自然体験は言うまでもなく、子どもの健全な心身の発達に必須であるが、このような状況に危機感をもった文科省は、今年度の補正予算事業として「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」を打ち出した。子どもたちの元気を取り戻し、健やかな成長を図ることをねらいとし、同時に環境の変化による不安感や閉塞感の打破を期待している²⁾。

この先、数年は行動制限が予想され、遠方への旅行等がしにくい状況が続くだろう。このような状況であるからこそ、あらためて身近な自然をじっくりと味わう良い機会になるのではないだろうか。その一助となるよう、工夫を凝らして本事業を継続したい。

注1 みやの環境創造提案実践事業は、宇都宮市の環境課題の解決を図ることを目的とした学生提案事業である。課題解決の方策を提案し、実際に実践する活動に費用を支援する仕組みである。解決策の創出と同時に若者の人材育成も目的としている。

注2 NPOうつのみや環境行動フォーラムは、良好な地域環境の確保や地球環境保善に関する意識の高揚・改善活動に関わる事業を行い、「環境都市うつのみや」の実現に寄与することを目的として平成16年に設置された団体である。宇都宮市環境学習センターの指定管理者であり、目的の実現に向け、市民企業行政の協働により様々な環境イベント等を実施している。

注3 新型コロナウイルス感染症対策として、日本環境教育フォーラム、自然体験活動推進協議会、日本アウトドアネットワークの3団体が作成したガイドラインである。<https://cone.jp/wp-content/uploads/2020/06/e6e6bf8af7e10ad52ba49c4bf82e5b19.pdf> (2020/5/27 閲覧)

注4 この資料は、うつのみや環境行動フォーラム・生物多様性部会の事業報告書より許可を得て一部を抜粋した。総括評価は部会長により記載され、アンケートは行事実施後に参加者（保護者）に依頼した内容の集計結果である。本実践に関わる部分のみを引用した。

5. 引用文献

- 1) 厚生労働省、「新しい生活様式」における熱中症予防行動のポイント」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_coronanettyuu.html (2020/7/30閲覧)
- 2) 文部科学省、「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/mext_00687.htmlhttps://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/mext_00687.html (2021/2/25閲覧)

V. 地域産学官連携活動報告

1. 大学地域連携活動支援事業「地域の就学前施設との交流活動」

子ども生活学部 准教授 市川 舞

1. 活動の趣旨

「地域の就学前施設との交流」が栃木県の「令和元年度 大学地域連携活動支援事業¹」に採択され、2年目を迎えた。「地域の就学前施設との交流」は保育者養成教育の充実を図り、子ども生活学部設置当初から授業に位置付け実践している。本事業は、さらに視点を広げ、交流保育の実践を通して、地域における大学・就学前施設・家庭とが連携・協働して地域全体で学び合い、育ちあう教育環境づくりのいちモデルのありようを探求することを目的としている。活動主体は、学生有志で組織した「きょうわ×こどもプロジェクト」である。

ところで今年度は、本活動においても新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた。

乳幼児期の保育・教育は、生活や遊びが中心であり、基本的に「密」な状況が生じやすい。令和2年5月22日付で作成された「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～²」では、幼児期の教育は「遊びを通じた総合的な指導を行っており、他の幼児との接触や遊具などの共有が生じやすいことから」、「幼児が遊びたくなる拠点の分散、幼児同士が向かい合わないような遊具等の配置の工夫や教師の援助」、「幼児が遊びを楽しみつつも、接触等を減らすことができるよう、遊び方を工夫すること」などを求めている。そこで今年度は、コロナ禍における感染症対策を踏まえた保育の工夫および地域連携の方法を探っていくことを課題とした。

2. 活動の概要

今年度の交流保育の実績を表1に、学内・地域報告会および県主催の報告会の参加実績を表2に示す。以下、活動の概要について報告する。（「森の交流保育」については「Ⅱ 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育 実践報告」を参照）。

表1 今年度の交流保育実績

活 動	内 容	備 考
1) 教材研究動画の作成	教材研究および教材研究動画の作成 Youtubeチャンネルにて広く一般に配信	
2) 交流保育の実施	「子どもの森」における交流保育の実施 連携園 認定しらゆりこども園年少児90名	詳細はⅡを参照
3) 教材の提案	「ぬくもり素材で遊ぼう」 教材研究、お手紙の交流、訪問型交流保育 連携園 認定みどりこども園、宇都宮大学共同教育 学部附属幼稚園、さくら認定こども園	感染症および 園の実情に応じて 交流

表2 報告会の実施および参加実績

	日 時	場 所	参加者
第1回 学内・地域報告会	2020年11月15日（日） 10：50～12：20	宇都宮共和大学 長坂キャンパス 5-501教室	川俣美香、関根亜莉沙、沼尾有咲、 福田舞、武藤美生、矢古宇沙季、 吉澤玲奈（4年）
第2回 学内・地域報告会	2021年3月20日（土） 11：45～12：30	宇都宮共和大学 長坂キャンパス 3-204教室	笹島朱音、佐藤美沙希、田島愛（3年）
栃木県主催 中間報告会	2020年10月12日（月） 13：00～16：00	栃木県庁 6階大会議室1	川俣美香、関根亜莉沙、沼尾有咲、 武藤美生、矢古宇沙季（4年）
栃木県主催 年度末成果報告会	2021年2月10日（水） 13：15～16：00	オンライン会議 CiscoWebexMeetings	沼尾有咲、川俣美香、福田舞、 関根亜莉沙、武藤美生、矢古宇沙季、 吉澤玲奈（4年）、網野有紗、 小松友香、佐藤美沙希、笹島朱音、 田島愛（3年）

1) 教材研究動画の作成・配信

4月に発出された緊急事態宣言や学校休校等により、子どもを取り巻く生活状況は大きく変化した。「新しい生活様式」や「ステイ・ホーム」が提唱され、子どもが心も体も解放して思い切り遊ぶ機会が制限された。そこで、「学校の新しい生活様式³」に示される「幼児が遊びを楽しみつつも、接触等を減らすことができる」遊びを可能にするための教材研究を行うこととした。具体的には、図1に示す項目を踏まえ、牛乳パックや段ボールなど子どもの生活に身近な廃材を用いた製作やからだをつかった遊びを中心に、教材研究を進めた。教材研究の成果は動画にまとめ、「きょうわ×こどもプロジェクト」のYoutubeチャンネルを立ち上げ、一般に広く配信した（図2）。

このように今年度の前半は、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、動画配信による非接触型の交流を模索した。動画の再生回数は、4,200回を超えた（2021年2月28日現在）が、本実践について11月に実施した「第1回学内・地域報告会」において、意見聴取を行った。

教材研究

子どもの主体性×「新しい生活様式」

- ・一人でも、みんなでも楽しい
- ・3密対策
- ・発散できる
- ・集中できる
- ・身近なモノを活用して
- ・子どもの創意工夫

図1 教材研究の方向性

YouTubeチャンネルの作成

◎製作

ブーメラン
ロケット
フリスビー

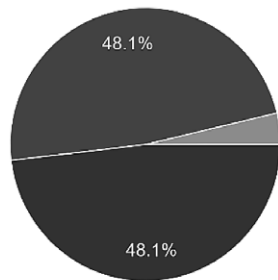
◎体を使った遊び

忍者修行
しっぽとり

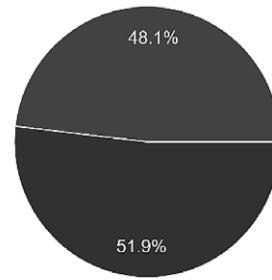
図2 YouTubeチャンネル作成

報告会参加者に、教材研究動画を視聴いただいた後、Googleフォームにてアンケート調査を実施、27名から回答を得た。その結果、「動画を楽しむことができた」が「とてもそう思う」「そう思う」をあわせて96.2%、「動画に出てきた遊びをやってみたいと思った」および「子どもにとって、遊びは大切な経験だと感じる事ができた」が「とてもそう思う」「そう思う」をあわせて100%と、高評価であった。さらに「今後期待する地域の就学前施設に向けた活動」について尋ねると、動画配信などの非接触型の交流よりも出張型・訪問型の接触型の交流保育を求める割合が高く（図3）、今後の活動の方向性の見直すこととした。

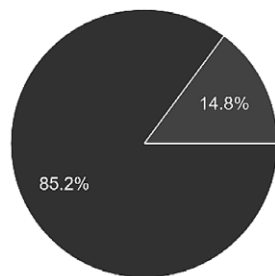
動画を楽しむことができた
27件の回答



動画に出てきた遊びをやってみたいと思った
27件の回答



子どもにとって、遊びは大切な経験だと感じる事ができた
27件の回答



- とてもそう思う
- そう思う
- 思わない
- まったく思わない

地域の就学前施設や子どもに向けた活動として今後取り組んでほしい活動を下記から選んでください（複数回答可）
27件の回答

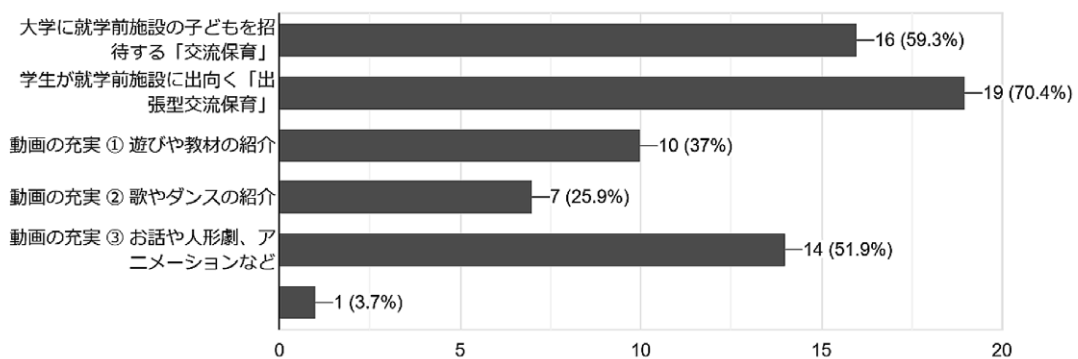


図3 第1回学内・地域報告会 アンケート結果

2) 交流保育の実施

感染症の発生状況が落ち着いた11月、今年度初の子どもと学生が直接出会う交流保育を行った。3密を避けた活動を探り、戸外での活動として本学の「子どもの森」において実践、今回は子どもとの関わりは「見守り」を主とした（具体的な実践の報告は前掲Ⅱを参照）。

前述の「第1回学内地域報告会」のアンケート結果から、交流方法の見直しを図ったが、本実践を通して、実際の子どもの姿から学ぶことは他に代えがたいことを改めて確認したことから、今後の活動の方向性として、コロナ禍においても状況に応じて園児と学生が直接出会うことができる交流の方法を探ることとした。

3) 教材の提案

11月の交流に続き、例年1月に行っている交流保育も実施の方向で準備をはじめたものの、今年度2回目の「緊急事態宣言」発出により中止となった。そこで、学生の行った教材研究を保育に活かしていただくことを意図し、地域の就学前施設に「教材の提案」を行うこととした。

「ぬくもり素材で遊ぼう」をテーマに、毛糸やフェルト、スポンジ、綿など、冬から春にかけて親しみたい、生活に身近なぬくもりを感じる素材を中心に、教材研究を進めた（図4）。

さらに、新型コロナウイルス感染症の状況や連携園の保育の状況に応じて交流できるよう、交流のあり方を段階的に想定した（図5）。

学生による「教材の提案」の例を図6～図7に示す。提案する教材は、手仕事の主となるため、遊びの拠点を分散させたり、ソーシャルディスタンスが取りやすい利点がある。

本実践の連携園と交流の実績を表3に示す。各園におけるその時期の子どもの興味や関心の方向性など学級の実態と保育のねらい、感染症対策や外部の受け入れ方針等に応じて連携、学生による「教材の提案」を活かしていただいた。

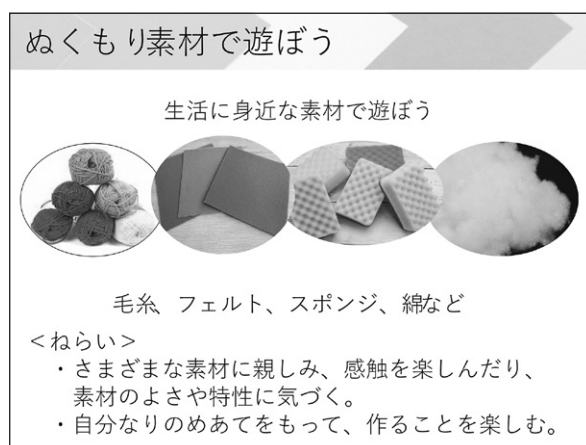


図4 教材研究のテーマとねらい

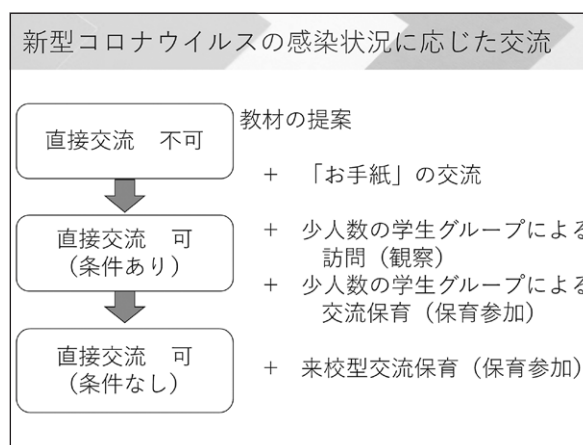


図5 感染症の状況に応じた交流方法

表3 連携園と交流の方法

園名	交流の方法	期間
認定みどりこども園 (宇都宮市西原)	教材の提案 お手紙のやりとり 少人数の学生グループによる訪問型交流	2021年2月10日(水) ～17日(水)
宇都宮大学共同教育学部 附属幼稚園 (宇都宮市松原)	教材の提案	2021年2月
さくら認定こども園 (宇都宮市戸祭台)	教材の提案 少人数の学生グループによる訪問型交流	2021年3月15日(月) ～16日(火)



図6 毛糸の教材研究の例

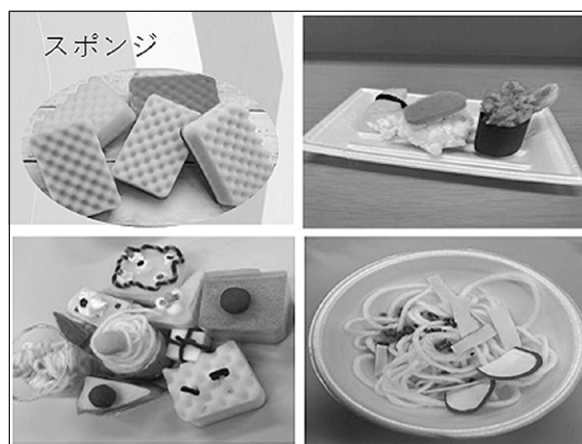


図7 スポンジの教材研究の例

認定みどりこども園における実践

当初、「教材の提案」と「お手紙」による交流を計画していたが、2月8日に県内の緊急事態宣言が解除されたことを受け、急遽、少人数の学生グループによる訪問型の交流を試みる事ができた。

2月10日(水)、1回目の訪問をした。教材の提案について「お手紙」を持参し、子どもたちに紹介した。その後、園児と共に活動する時間をいただき、年長児を中心に「ダンボール編み機」を用いた編み物に取り組んだ。はじめての平編みも、学生と一緒に行うことで落ち着いて取り組んでいた。時間に限りがあり完成には至らなかったが、子どもから「明日も来て！一緒に続きしよう！」という声が聞かれるなど、夢中になって取り組む姿があった。

翌週、2月17日(水)、2回目の訪問をした。学生が新しい「お手紙」を届けると、前週の「お手紙」の「お返事」を子どもからもらい、年長児と共に前週の「つづき」を楽しんだ。前週は、編む仕組みを理解することに精一杯の様子だったが、1週間の間に編み方のコツを発見したり、途中で毛糸の色を変えて模様をつけたりと、子どもたちなりに工夫している様子が見られた。また、前回学生に教えてもらったことを友達同士で伝えあったり、分からないことを子どもたち同士で考え、解決するなど、協力したり相談したりしながら取り組む姿も見られた。また、年中児にはペットボトルなどの廃材を用いた「リリアン編み機」を提案した。すでにストロー編みを実践していただいたこともあり、毛糸に親しみを持ち、意欲的に挑戦する姿があった。

1回目、2回目の訪問時ともに、毛糸でつくった「ごちそう」や綿に色付けをした「わたあめ」、スポンジの「ケーキ」など、こども園の先生方が日頃の保育に学生の教材提案を取り入れて下さっている様子も観察することができた。この学生による教材の提案は、のちに園行事として「おみせやさんごっこ」に活かしていただいた。

第1回訪問 2月10日（水）



写真1 「お手紙」を渡す



写真2 お手紙をさわって確かめる

学生からのお手紙

実物を貼り、子どもが直接ふれて材料や作り方を考えるきっかけに



みんなさんへ
こんにちは
うつのみやきゅうわだいがくのおねえさんです。
みんながおみせやさんをするときいて、ケーキ
つくってました!!





みんなはどんなものをつくる?
つくったものをおねえさんたちにおしえてね!

「どんなものをつくらう？」
「つくったら知らせたい！」
という子どもの思いを引き出せるように

うつのみやきゅうわだいがくのおねえさんたちより

図8 学生からの「お手紙」例



写真3 学生と糸をかける (年長)



写真4 編み方を伝える (年長)

第2回訪問 2月17日 (水)



写真5 「お返事」をもらう (年長)



写真6 「あみとちゅう」置き場 (年長)



写真7 リリアンに挑戦 (年中)



写真8 ストロー編み (年中)



写真9 台所スポンジでケーキ (年少)



写真10 手芸綿でわたあめ (年少)

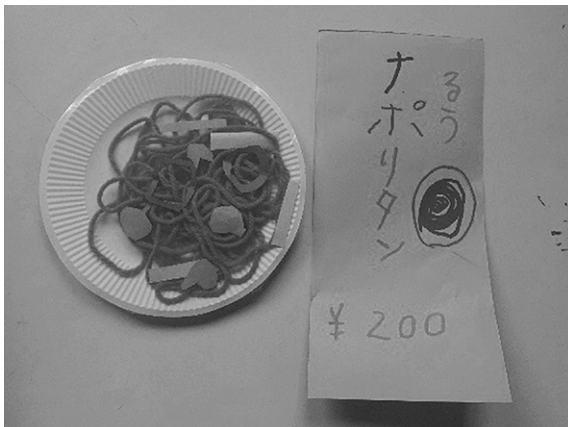


写真11 毛糸でパスタ



写真12 毛糸でカップケーキ



写真13 子どもからいただいた「おてがみ」の「おへんじ」

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園における実践

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園では、その時期の子どもの興味や関心、クラスの実態と教師のねがいなどから、フェルト布・毛糸を中心に、学生の教材提案を日常の保育に取り入れてくださった。年中児および年長児クラスで活用していただき、学生が直接子どもと出会う交流は実施しなかったものの、子どもが教材に親しみ自分なりに遊びを展開する姿や環境構成を画像でフィードバックいただいた。

教師の環境構成から「すてきだな」「やってみたい」と憧れをもつ、素材に親しむ、素材に関心をもちイメージをわかせて遊ぶ、自分なりのめあてをもって取り組むなど、さまざまな子どもの姿を報告いただいた。さらに、1つの素材だけでなく、毛糸+ダンボール、毛糸+フェルト、フェルト+ダンボールなど素材同士を組み合わせることで、表現の幅が広がり、子どものイメージが広がり遊びが豊かになっていく様子が見えてきた。

また、環境構成のヒントもいただいた。子どもが手に取りやすく扱いやすい教材の準備、子どものイメージを誘発する環境構成、子どもがじっくり遊びこむ場づくりの工夫などである。そうした環境構成の工夫によって、子どもの興味や関心がひらかれ、自分（たち）の遊びになっていくことや、子どもの創意工夫が可能となることなどの示唆を得た。



写真14 環境構成の例



写真15 扱いやすい教材準備の配慮



写真16 プラスαの教材



写真17 まねしたくなるような環境



写真18 毛糸を巻いて

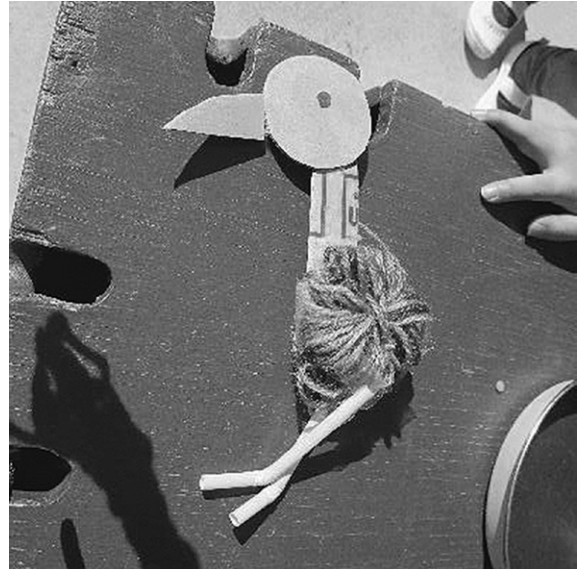


写真19 毛糸とダンボールとストローで



写真20 毛糸でスパゲッティ



写真21 毛糸と石で



写真22 リリアン編み



写真23 指編み



写真24 布フェルト+ダンボール片でアイス



写真25 お気に入りを入れたバッグ



写真26 手芸綿を着色してスイーツ



写真27 フェルトバッグ



写真28 布でぬいぐるみづくり



写真29 二階建てドールハウス

(写真提供 宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園)

さくら認定こども園における実践

さくら認定こども園では、少人数の学生グループによる訪問型の交流を行った。3月15日（月）～16日（火）の二日間にわたり、修了式を終えた年長児（2号認定および春休みの預かり保育利用）とともに、毛糸とフェルトに親しんだ。

1日目。学生がテーブルに教材を広げると、子どもたちは興味津々でテーブルを囲み「これやりたい！」と、早速教材を手に取りはじめた。学生がやってみせると、子どもは真剣な眼差しで

1日目 3月15日（月）



写真30 学生に編み方を教わって



写真31 糸を引く力加減を調整する



写真32 毛糸で縫ってフェルトバッグ



写真33 上下の布がずれないように縫う



写真34 このバッグ、すてきでしょう？



写真35 明日、つづきをしよう

みつめ、すぐに自分で試みる姿があった。毛糸やフェルトの色選びも自分のお気に入りの色合いを選んだり、毛糸をひく力加減を調整したり、途中でずれていないか確かめながら編み進めるなど、これまでの生活経験を活かして教材を使いこなしている様子だった。

2日目。子どもたちは学生の来園を待ちわびていた様子。学生が教材を広げると、待ってましたばかりにテーブルを囲み、早速自分のやりたい活動に取り組んでいた。前日の経験があるため、学生はやり方を「教える」より子どもを「見守る」かかわりが中心となった。2日目となると、

2日目 3月16日(月)



写真36 自分のめあてをもって取り組む



写真37 マスクカバーができあがり



写真38 昨日のバッグを身に付けて



写真39 縫い方を伝えあう



写真40 つくりたいデザイン図をかいて



写真41 ポケットやポンポンをつけて

子どもにゆとりが生じたようで、フェルトバッグにポケットを付けたり、ポンポンやリボンを付けたりするなど、自分なりのつくりたいイメージを実現しようとさまざまなアレンジを楽しむ姿が印象的だった。

3. 成果と課題

今年度は本事業の課題に、コロナ禍における感染症対策を踏まえた保育の工夫および地域連携の方法を探っていくことを加えた。

前半は、コロナ禍においても子どもの遊びを豊かにすることを目指し、教材研究動画の配信など非接触型の交流を試みた。教材研究動画の配信は、学生のICT活用能力の育成の機会ともなった。保育の現場でも、在園児家庭にむけて動画の配信やSNSの活用が飛躍的に拡大したことから、本取り組みは、時代に応じた保育者の新しい能力の育成に与するものとなったと考えられる。

後半は、原点回帰し、出張型・訪問型の接触型の交流保育の可能性を探った。3園にご協力いただき「教材の提案」を行ったが、感染症の状況や各園の実情に応じて連携のあり方を調整することの有効性を見出すことができた。感染症の状況は刻一刻と変化する。その都度の状況に応じて段階的かつ柔軟に交流の仕方を調整することは、今後も続くと言想されるコロナ禍において必要な工夫であることを確認できた。また、同じ教材でも3園それぞれの幼児の実態や保育者のねがい、環境構成の工夫、保育の展開等によって、教材の活用可能性や子どもの経験内容が多様に広がることを理解する機会となり、学生の保育の学びが深まる機会となった。

今年度は、交流保育の実施自体に困難が伴う一年であったが、連携園のご協力により教材の提案や少人数の学生グループによる訪問など、新たな連携の方法を試みることができた。

今後も続くと言想されるコロナ禍であるが、健康安全を十分に確保しながら、大学・就学前施設・家庭とが連携・協働して地域全体で学び合い、育ちあう教育環境づくりの工夫を模索していきたい。

謝 辞

本活動にあたり連携・協力いただいた、認定みどりこども園、宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園、さくら認定こども園、認定しらゆりこども園のみなさま、ご指導、ご助言いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

きょうわ×こどもプロジェクト参加学生

子ども生活学部4年

沼尾有咲
福田舞
矢古宇沙季
関根亜莉沙
川俣美香
武藤美生
吉澤玲奈

子ども生活学部3年

網野有紗
小松友香
笹鳥朱音
佐藤実紗希
柴田菜々子
田島愛
福田有里
建優寧

子ども生活学部2年

¹ 栃木県「大学地域連携活動支援事業」とは、「学生の新しい発想や活力と大学等が有する専門性を生かし、地域団体と連携しながら栃木県内の地域課題を解決する活動を支援することにより、大学等が有する知の拠点機能（教育・研究・社会貢献）を充実させ、地域に貢献する実践的な人材育成や世代間交流を促進するとともに、地域への愛着や誇りを醸成し、地元定着を図ることを目的とする」ものである。

² 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2020.5.22 Ver.1）、文部科学省、p44、https://www.mext.go.jp/content/20200522_mxt_kouhou02_mext_00029_01.pdf

³ 前掲2

2-1. 大学コンソーシアムとちぎ第17回学生&企業研究発表報告

障がいを持つ作家さんと鑑賞者の交流

—地域の資源を繋ぐ実践を通して—

宇都宮共和大学 子ども生活学部 田淵光与 研究室 4年

麦倉千暖 (むぎくら ちはる)

【概要】 地域の障がいをもつ作家さんの作品を通して、私たち学生やその家族が交流し、双方にもたらされる影響について調査を行った。私たちは障がいをもつ作家さんの自由な表現や何にも縛られていない生き様に驚かされたり感動したりしている。それらは、私たちが生きる力のヒントを得ることに繋がっている。双方に与える影響を明らかにする中で、栃木県に暮らす一人一人の持つ個性や能力を十分に発揮して生きることが出来るような地域づくりに参加し、元気なとちぎを応援したい。

1. 障がい者アートの現状

障がい者アートという言葉聞いたことがある人もいるだろう。しかし、日本においてその概念・名称・定義について厳密な定義はされていない。鑑賞の機会は一般的な美術作品と同じように美術館や画廊、ギャラリー等での展覧会も増えてきている。その背景には「障害のある人の美術制作を長期にわたって地道に支援してきた関係者の努力と歩みがあった」（障害保健研究情報システムより）と考えられている。

特別支援学校における美術の実態調査に関する全国調査では、子どもの中に、将来作品を制作しながら生活をしていってほしい（プロの作家になってほしい）と思える子どもがいるかどうか問うた池田ら（2017¹⁾）の研究結果では、「いる」が27%であった。これは、図工・美術教育の目標の一つである豊かな情操を培うという範囲を超えて、プロの作家になってほしいと思うような作品を創り出す子がいるという事実であり、特別支援学校の教員は、彼らにとって美術の存在の大きさを感じているのである。

平成20年には「障がい者アート推進のため

の懇談会」が、平成25年には「障がい者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」が開催され、今後、障がい者の芸術活動の視野を広げることや、優れた才能を伸ばすという視点が加わった。具体的な支援では「支援者の人材育成や展示機会の確保」「評価・発掘、発信等を行う人材育成」「鑑賞のための環境づくり」等があげられる。平成30年には障がい者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ることを目的として「障がい者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行された。日本財団が運営するTrue Colors ACADEMYでは公開講座と対話と実践を繰り返すプログラムがあり、そのコンセプトは、様々な人生背景を持つ人や物語と出会うことを通じて、日常の中で置き去りにされがちな社会課題や違和感に接近していくことである。アートを通して出会い、交流することで生まれる感覚のズレこそ、社会が抱えている課題の発露であると捉えている。このように、障がいを持つ方と芸術文化活動の繋がりは深く、そして広がりを見せている。

2. 栃木における支援

とちぎ障がい者プラン21（2015～2020）では、基本目標に「障がい者の自立と社会参加」をあげている。基本的施策体系の方向のⅢとちぎで自分らしく輝くためには、文化活動の推進として「活動機会の拡充」「指導者の発掘活用」「障がい者優先調達の推進」「鑑賞機会の促進」が掲げられている。地町の取組として、宇都宮市が主催している「わく・わくアートコンクール」は、障がい者の社会参加を推進し、宇都宮市民が障がい福祉への理解を深めることを目的としている。また、2009年に始まった「つながるひろがるアート展NASU」は那須地域に住むアーティストたちの作品を紹介するイベントであり、福祉施設、企業、観光施設、病院、町役場等地域が作品発表の場となり、地域住民が作品の鑑賞の機会を促進している。栃木県は地域において障がいを持つ作家さんと私たちが相互に交流する機会を創出していると言える。

3. 地域における障がいをもつ方の芸術文化活動

障がいをもつ方の芸術文化活動は、本人にとって生きがいとなり生きる力にも繋がっている。施策や支援の状況から、その発表の機会は仲介者が大きな役割を担っていることが読み取れた。また、昨今は、新型コロナの流行により作品の発表の機会を得ることが難しくなっている。本研究では、障がいを持つ作家さんの作品の鑑賞の機会を創出し、障がいをもつ方の芸術活動が鑑賞者や社会に与える影響と本人が受ける影響を明らかにしていく。今回ご協力をいただいた作家さんは、「SOMPOパラリンアート サッカーアートコンテスト」で応募された作品1862作品の中で、サッカーアートコンテストグランプリ賞を受賞した栃木県益子町に在住する飯山太陽さんである。なお、太陽さんは、パラリンアートのアーティストとして登録もしている。

4. 飯山太陽さんの作品展の企画による調査

(1) 調査の方法

①作家の飯山太陽さんとお母様へのインタビュー

太陽さんの自宅で太陽さんと太陽さんのお母さんでいらっしゃるゆかりさんに調査における倫理的配慮について書面にて説明の上、インタビューをさせていただいた。結果を逐語録として書き起こし、制作への構えや背景を探った。

②鑑賞者が作品から受ける影響

学校祭で太陽さんの作品を展示し、感想アンケートを収集した。名前を公表することや、鑑賞者が写真を撮ることを事前に了承いただいた。

アンケートの内容は1)アートに興味があるかないか2)作品から思い浮かんだ言葉を出来るだけ多く記述する3)感想やメッセージの自由記述の3項目とした。鑑賞者が受けた影響を明らかにする為に、得られた感想を、内容や文意で切片化し、コーディングの手法を用いて分類した。

③飯山太陽さんが鑑賞者の感想から受けた影響

鑑賞者から寄せられた感想をそのまま太陽さんに渡し、そこから受けた影響を寄稿してもらい、コーディングの手法で概念を導き出す。

写真 太陽さんの作品を鑑賞する様子



5. 結果

インタビューから、太陽さんは作品が評価されたことで、多くの人に観てもらいたいと感じるようになったことがわかった。評価されたことは、自分自身が認められたと感じることでもあり、自信に繋がる。自分の作品や制作時の話をしてしている時の愉しげで生き生きとしている様子からは、芸術活動が生きる力の一部となっていると感じた。また、芸術活動を通して、学校の教師や友人、地域の方々、鑑賞者と、多くの人と繋がってきた。芸術活動が作家さんの人脈を広げ、社会の範囲を広げていったようである。太陽さんが自分の作品を観てもらいたいと強く感じているのには2つの理由がある。1つは芸術活動を通して多くの人と繋がる楽しさである。鑑賞者は作家さんや太陽さんの作品について興味を持ち知りたいと思うから対話が生まれる。そのやり取りが作家さんと鑑賞者の繋がりを深めていき、太陽さんはその過程に喜びや嬉しさを感じていると考えられる。2つめは、人によって絵から感じる印象や受ける影響が異なることへの面白さを感じている点であり、価値観の多様さに驚きや喜びを感じているのである。筆者は、太陽さんが、鑑賞者が作品に対して疑問をもったり、意図しない見方をしたり感じたりすることに対して寛大であることを感じた。

感想用紙に回答した鑑賞者数は48名で、女性が34名、男性が11名、無回答が1名であった。また、字が読み取れないものなど2つの回答は省いた。20代が25名（55.6%）で一番多かった。続いて50代が8名（17.8%）、10代が7名（15.6%）、40代が3名（6.7%）、一番少なかったのは60代で2名（4.4%）である。芸術活動に興味があると答えたのは34名（75.6%）ないと答えたのは11名（24.4%）である。また、両方に丸をつけ、自分の興味にあうかどうかと答えた回答には、アートに興

味がある方で計算している。作品から思い浮かんだ言葉では、全体で202個であり一人平均あたり約4.4個であった。自由記述欄では、3名を除いては作者の太陽さんに向けてのメッセージを書いた。

6. 考察

太陽さんは、価値観の違いや多様さを拒絶することなく受け入れ、喜びや楽しさを感じている。現代人は自分と価値観が違う・合わないと感じた人とは深い関わりを持つことに躊躇しがちである。太陽さんの人との向き合い方や受け入れ方には、忘れかけていたものを気づかされる。

文化祭という機会を活用した為、学生以外の幅広い年代の人に鑑賞の機会を与えることが出来た。また、アートに興味があるかどうかの質問では、作品から圧倒された後だった為に「ない」に回答するのが失礼になってしまうのではないかと心配するような言葉が記されているものもあった。実際に得られた回答より、アートに興味がある人は少ない可能性がある。しかしながら、作品から思い浮かぶ言葉を書いてももらった項目では、一人あたり約4.4個の言葉が浮かんでいる。アートに興味がない人でも絵から感性が刺激されたことを意味している。また、ほとんどの回答が単語であったが文章で回答しているのもあった。一つの文章を1とカウントしているため、浮かんだ言葉で考えると鑑賞者は得られた回答より多い言葉が浮かび刺激されたことになる。鑑賞者が思い浮かべた言葉の一部を図1に示す。

図1

世界観・想像力・深層心理・おとぎの国・神秘的・立体的・生活の美・リアル・可愛い・細かい・こだわり・感情が溢れている・不思議・つながり・カラフル・鮮やか・自由・難しい・ファンタジー・独特

鑑賞者の回答から抽出した概念では①作品を通して作者自身の取り組みや能力に感銘を受け、特別な思いを抱く②作者と絵を重ね合わせて捉えたり、志向したりする③これからも作者との繋がりを持つことへの期待と、制作を後押しし、励ます④作者の表現から世界観を感じ、引き込まれるの4つの概念を抽出した。また、鑑賞者の感想の一部を図2に示す。

図2

① 太陽さんの作品には人を惹きつける力がある、才能のある方だと感じました。
② たくさんの時間がかかったことと思いますが、きっと嬉しく充実した時間だったと伝わりました。
③ また太陽さんの作品に出会いたいです。お話も聞いてみたいです。
④ 書きこみが細かくて、独特の世界観にすごく引き込まれる。

得られた感想からは「生活の美」や「(世界)には美しさが隠れている」など太陽さんの描く、物事の見方や捉え方に美しさを感じている表現が多数見られた。筆者は物事の多様な捉え方は、新たな地域や社会の捉え方へと広がっていく予感を感じた。

作家さんから、鑑賞者の感想を読んで受けた印象や影響について文章でフィードバックして頂いた。その文章から抽出した概念では1)鑑賞者とイメージのやり取りをし、喜びや嬉しさを感じる2)作品が鑑賞されることへの喜びを感じる3)鑑賞者の感想や励ましの言葉から創作意欲が湧くの3つの概念を抽出した。太陽さんは、鑑賞者とやり取りをすることを楽しんだり、やり取りの中から喜びを感じたりしている。それは、鑑賞者が、太陽さんが思い描いた世界と異なる印象を感じていても同様である。感想用紙の中には、障がい乗り越えて描いているからすごいとい

う言葉も見られたが、太陽さんは「全て素敵な感想だと感じました」と記していた。障がい者アートの見方や捉え方は様々であり、福祉面、芸術面と言われるようなカテゴリー分けがあるが、太陽さんは鑑賞者の率直な感想全てを受け止めていた。

7. 結論

障がいをもつ方の芸術活動から生み出された作品は、鑑賞者と当事者の双方に影響をもたらしたのは明らかである。それは、作家さんが何にも縛られずに自由に表現した作品を鑑賞者が素直に受け入れ、感想用紙を用いて表現したからである。現代人は表現することを躊躇し、受け入れられるかについて不安や恐怖を感じている。障がい者アートの表現からは何にも縛られず作品そのものが生き生きと生きているように感じる。この表現を鑑賞し、受け入れることで私たちは常識やルールから解き放たれて、新たな生きる力を得る。双方が得た影響を図3に示す。

地域の作家さんが自らまたは仲介者を通して作品を発信し、鑑賞者の生き方にまで影響を与えることは、双方に良い影響をもたらす、多様性を認め合う元気な栃木づくりに貢献するのではないかと思われる。地域の障がいを持つ作家さんの表現は、私たちの心を豊かにし、ひとりひとりが持つ個性や能力を十分に発揮することの大切さを教えてくれる。それは、双方向のつながりが生まれるということである。

地域で生活されている作家さんと、鑑賞者を繋ぐという機会を得て、元気な栃木づくりの実践に一步踏み出せた感がある。障がいをもつ作家さんと私たち社会を繋ぐことが一人一人の生活の質の向上に加えて地域の活性化や文化の継承・発展に繋がっていくだろう。

この研究をきっかけとして、自分が地域の資源を見出し、社会に発信する方法をさらに深めていきたい。また、地域において、一人

一人がそういう機会をつくり出せるような連携した取り組みについてもさらに取り組んでいきたいと思う。

図3

鑑賞者が得た影響	当事者が得た影響
<ul style="list-style-type: none"> ・心を震わせる体験 ・生きる力を培う ・個性や能力の発揮 ・常識やルールからの解放 ・障がいの理解と関心 ・生活の質 ・地域の活性化 ・文化の継承・発展 	<ul style="list-style-type: none"> ・人との繋がり ・イメージのやりとり ・作品が多様な受けとめで鑑賞される喜び ・創作意欲が湧く ・セルフエスティームの高まり

参考引用文献

1) 池田史志・児玉真樹子・高橋智子 (2017) 「特別支援学校における美術の実施の実態に関する全国調査」 美術教育学 (美術科教育学会誌)、第38号

※発表会中止のため代替事業「2020年度大学コンソーシアムとちぎ 研究発表要旨集」にて発表

2-2. 大学コンソーシアムとちぎ第17回学生&企業研究発表報告

保育のユニバーサルデザイン

宇都宮共和大学子ども生活学部土沢研究室 4年

沼子 萌 (ぬまこ めぐみ)

【概要】 保育の現場で、子どもや子どもに関わるすべての人が使いやすく、子どもを豊かに育む環境とは、どのような環境だろうか。ユニバーサルデザイン（以下UDと略記）の7原則を踏まえ、発達援助の視点を考慮し、保育上大切な要因を加味して「保育のユニバーサルデザイン」の要素をまとめた。そこから、今回研究対象として抽出した4園の保育環境・保育内容を捉え直し、単なるUDでない「保育のUD」の機能と今後の可能性について考察した。保育の現場にUDの視点を取り入れることは、保育環境・内容を考える際、子どもや子どもに関わるすべての人にとって、よりよい保育を構成するわかりやすい枠組みを与えると共に、UD的な保育の場は、地域の人々との繋がりを生み広げる力を持ち、保育の現場から子どもたちと周囲の大人たち、栃木全体を元気にできる可能性を秘めていると考える。

1. 研究の背景

1.1 子どもにとっての環境の大切さとUD

幼稚園教育要領（2017）では「環境を通して行う」教育が基本であり、保育所保育指針（2017）では「保育所における環境を通して」保育を行うとされる。子どもの育ちにとって環境の果たす役割は計り知れない。しかし、環境を考える上で重要なUDの概念が、保育現場において浸透しているとは言えない状況がある。

1.2 UDについて

ノースカロライナ州立大学UDセンター元所長で建築家のメイス（Ronald Mace）は、UDとは「すべての年齢や能力の人々に対し、可能なかぎり最大限に使いやすい製品や環境のデザイン」とし、UDに必要な7つの原則が提唱される。

1. Equitable Use（誰でも公平に使えること）
2. Flexibility in Use（使う上での自由度が高いこと）
3. Simple and Intuitive（使い方が簡単で、直観的に理解できること）
4. Perceptible Information（必要な情報がすぐ見つかること）
5. Tolerance for Error（うっかりミスや危険につながらないこと）
6. Low Physical Effort（身体への負担が軽く楽に使えること）
7. Size and Space for Approach and Use（接近したり利用したりするために十分な大きさと広さが確保されていること）

(Center for Universal Design NCSU より)

2. 研究の意義と目的

この研究では、UDという考え方が保育の中で浸透し、子ども達にとってより良い環境、心地良い環境をたくさんの人が考えたり、再検討したりするきっかけになることを期待する。その実現に向けて、現状の保育の場における保育のUDの状況を具体的に検証しつつ、保育の中でどのようなUDが求められるのか、保育のUDにおける大切な要素を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

保育環境やUDに関する文献調査を行った上で、栃木県内でのフィールド調査（8月7日実施）、県外の園への質問調査（感染症対策の観点からオンライン・郵便による調査、10月27日～30日実施）を行った。

4. 結果と考察

4.1 保育のユニバーサルデザインとは

上述したように、UDには基本的に必要な7つの原則がある。それらを踏まえ、保育における主たる利用者である「子ども」「保育者」の利用しやすさを更に考慮し、保育にとって欠かすことのできない要素である「発達援助の視点」を大切にして、保育のユニバーサルデザインに大切な7つの視点としてまとめたものを、以下に示す。

1. 子どもに関わるすべての人が使いやすい
2. 子どもの遊び・経験が広がるようなデザイン
3. 子どもにもわかりやすい
4. 子どもが主体的に関わりやすい
5. 子どもに関わるすべての人が安全に使える
6. 子どもの個性と能力が発揮できる環境
7. 子どもが伸び伸びと遊ぶことができ、生

活しやすい

4.2 わが国における保育のUDの現状

まず、実際の保育現場で、現在、保育のUDという考え方がどの程度取り入れられているかについて、インターネットによる情報収集を行った。2020年5～6月現在で「保育」および「ユニバーサルデザイン」で検索したところ、建築設計事務所や自治体が紹介する取り組み事例にとどまり、各園のHP等で積極的に保育のUDとして紹介する例は見当たらなかった。

そこで、各園における保育環境の観点から幅広く特徴ある園を洗い出すことを目的に、「自然」「宗教」「食育」「健康」「表現」「多文化保育」「交流」「保護者支援」で検索し、20園が抽出された。

それらのうち、保育環境を重視し、保育のUDの視点から検討することに意味があると考えられる関東と関西の保育園4園を、今回の詳細な分析対象とし、調査研究を行った。

4.3 研究対象4園における保育のUDの視点

4園それぞれについて、保育UDの視点からまとめたものが、下の表である（表1）。

表1. 研究対象の4園の保育のユニバーサルデザイン

園	特色	該当すると考えられた保育のUDの視点	抽出回数	備考			
K園 (栃木県)	自然の環境	1. 子どもに関わるすべての人が使いやすい	2	K園の保育のUD視点は「4. 子どもが主体的に関わりやすい」「6. 子どもの個性と能力が発揮できる環境」の視点がより多く抽出された			
		2. 子どもの遊び・経験が広がるデザイン	2				
		4. 子どもが主体的に関わりやすい	4				
		6. 子どもの個性と能力が発揮できる環境	4				
		7. 子どもが伸び伸びと遊べ、生活しやすい	1				
		H園 (埼玉県)	保育室の環境		1. 子どもに関わるすべての人が使いやすい	2	H園保育のUD視点は「4. 子どもが主体的に関わりやすい」の視点がより多く抽出された
		2. 子どもの遊び・経験が広がるデザイン			2		
3. 子どもにもわかりやすい	1						
4. 子どもが主体的に関わりやすい	3						
5. 子どもに関わるすべての人が安全に使える	1						
6. 子どもが個性と能力が発揮できる環境	2						
7. 子どもが伸び伸びと遊べ、生活しやすい	2						
A園 (大阪府)	多文化共生	1. 子どもに関わるすべての人が使いやすい	1				
		3. 子どもにもわかりやすい	1				
		6. 子どもの個性と能力が発揮できる環境	1				
		7. 子どもが伸び伸び遊べ、生活しやすさがある	1				
M園 (大阪府)	多文化共生	1. 子どもに関わるすべての人が使いやすい	1				
		2. 子どもの遊び・経験が広がるデザイン	1				
		4. 子どもが主体的に関わりやすい	1				
		6. 子どもの個性と能力が発揮できる環境	1				

これによると、共通点として、「6. 子どもの能力と個性が発揮できる環境」の視点はどの園でも当てはまることから、保育のUDの重要な視点、あるいは取り入れやすい視点と考えられる。ただし、今回調査対象とした4園にたまたま共通する視点であった可能性は否定できない。

また、各園の理念や保育内容によって、保育のUD的要素の特徴に違いがみられた。

4.4 自然を大切にしたK園の保育のUD実践例

K園では、子どもの成長する力を信じ、子どもの遊びや行動を認め、環境を整えることで、主体的な活動を促し、子どもの遊びを深め広げていくことを大切にしている。子どもの遊びや行動を認めつつ、安全に配慮する実践例として、例えば、保育者は、年上の子を真似して大型アスレチックに登ろうとする0歳児を、止めるのではなく、いつでも受け止める姿勢で見守りをする。また、主体的な活動を促す環境例として、「デン」という空間がある。保育室と保育室の間の壁下部一面に、子どもが絵本を自由に取り出し、狭いところに隠れこめることで絵本集中できる空間、また、壁一面にホワイトボードがあり、子どもが自由に思いっきり絵を描ける空間となっている。

子どもの発達を促す環境は、子どもや保育者等の使いやすさや安全性への配慮にとどまらず、同時に、子どもが自ら挑戦でき、全力を出せる環境を整えることが重要であることが見いだされる。そして、保育のUDは、子どもが安心して遊べる安全配慮と、子どもが主体的に自分の能力を発揮する環境の絶妙なバランスの上で成り立っていくと考えられる。



写真1. 見守りやすい園舎と大型アスレチック



写真2. 「デン」のお絵描きコーナー

4.5 環境づくりを重視するH園の保育のUD実践例

H園では、保育者と発達心理学の専門家、家具作家などのプロたちがそれぞれの専門性を発揮しつつ協力して作りあげた環境がある。環境を作る上で、ねらいを共有し、保育者がワクワク感や納得感を徐々に作り上げていく過程を大切にしている。それは、H園の理念である、結果にこだわり過ぎず楽しみながら努力していくプロセスを重視することに基づいている。実践例として、子どもの主体性を大切にした水回りの設計は、事前に段ボールで実物大を用意し、高さや幅、蛇口の出しやすさなどを考慮しながら作っている。また、トイレは扉がなくオープンスペースにあるため、保育者の見守りを感じ、安心して長いときは10～20分トイレに座っている子どもの姿がある。

画一的な子どもの使いやすさの追求だけではなく、その園の理念を大切にしつつ、保育の現場で醸成されるその場に見合った環境を整えていくことが重要であると考えられる。

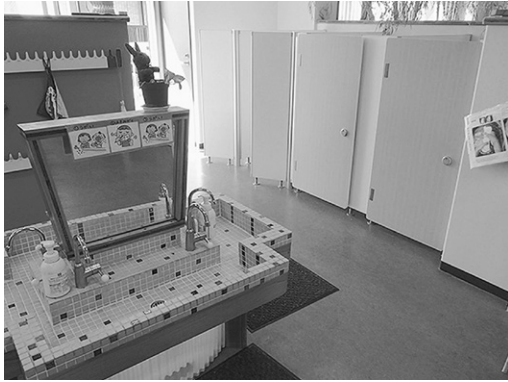


写真3. 水回りの環境



写真4.
0～1歳児のトイレ



写真5.
2歳児のトイレ

4.6 多文化保育を行う園の保育のUD実践例

以下の関西地区の2園（A園、M園）は、コロナ禍の影響により実際の訪問調査が実施できなかった。そこで、環境の類似する同地区内において、独自の多文化保育を実践する2園を取り上げ、HPによる情報や当該園の保育に関する文献などを参考にして、比較対照することにより、検討を行った。

（1）A園

A園では、日本の文化を大切にしながら多国籍の文化を取り入れて保育をしている。また、園内研修では、保育者同士（多国籍のルーツを持つ職員もいる）が密に話し合うことを通して、多国籍のルーツや文化、心情を深く理解し合う機会を毎年設けている。

この話し合いの特徴として、各国間の歴史経緯に基づく辛さや不快感、多文化保育への葛藤や悩みなども含め、多国籍のルーツをもつ保育職員も共に思いを共有しながら受容し合う機能をもっている。結果として、保育者が、多国籍のルーツをもつ子ども達や保護者の思いに気づきやすくなり、それを参考に保育を計画することができる。多様な背景でも、

ありのままを受け入れ、子どものうちから自尊心をもてるような保育を可能としている。

多国籍ルーツの子ども達の心情理解により、一人ひとりの子どもに寄り添い、その子らしさを大切に育むことができる保育の実践の工夫や仕組みを整えていくことが、表面的・形式的なレベルにとどまらない保育のUDにつながっていくと考えられる。

（2）M園

M園では、保護者・地域との連携に関する取り組みを積極的に行い、家庭訪問、地域の小学校などの交流や、M園における表現活動に地域の人に参加、多文化に触れるきっかけになっている。

日本語以外の言語環境で育っている子どもも含まれる中で、日本語でのやり取りを重視しない体力作りや表現活動などを積極的に取り入れ、体も心も元気な子どもが育つように環境づくりをしている。例えば、ハイキングやドッチボール・バスケットボールなどの体力作り、望ましい食生活のためのクッキング、子ども劇団などの取り組みがある。

言語や文化の背景が異なっても共に楽しみ、分かりやすい活動をする工夫に力を入れていることが、保育のUD的な視点と合致すると考えられる。

（3）A園とM園における保育のUDからの比較と検討

2園は同じ地区内にあり、どちらも多文化保育を行っている。しかし、保育理念・基本方針の違いや保育内容も異なり、抽出された保育のUDの視点も異なっている。また、7つの視点すべてが抽出されたわけではない。

そのことから、地域性を考慮し、園の理念や基本方針を大切にしながら、すべての人が利用しやすく保育を充実させる環境を整えるためには、保育のUDの7つの視点をすべて

満たすことが重要ということではないかもしれない。しかし、園の独自性を強調するだけでなく、UD的視点をもった保育デザインを意識することにより、幅広い視野をもった偏りのない豊かな保育が展開しやすくなると考えられる。

5. まとめ

今回の研究により、保育のUDの浸透度が低いことに加え、すべての園に画一的な保育のUD的視点は見いだされにくい現状が明らかになった。

しかし、各園での取り組みの工夫例は、結果として保育のUD的視点を多く含むものであり、保育のUDは、よりよい保育環境を構成し、保育システムを向上させる重要な視点の一つになり得るといえる。一般的なUDは、すべての人の使いやすさを追求してデザインされているが、保育のUDは、単なる使いやすさの追求にとどまらない、すべての人を子どもの発達援助へと、より良く方向付け助け

導くデザインといえるのではないだろうか。そして、保育のUDは、園の理念や特色、地域性を生かしつつも、子どもの発達を援助するバランスのとれたデザインとして、各園の保育をより充実させる力を発揮し、豊かな保育へと貢献する力を秘めていると考えられる。

更に、現在インクルーシブ保育やSDGsの進展が図られる時代において、保育のUDが、園の理念や地域性を超え、より普遍的ですべての子どもたちの成長に効果的なものとなるように、その仕組みや設計、生活デザインを整理追求し、広めていくことが課題である。

【引用文献】

- ・文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』
- ・厚生労働省（2017）『保育所保育指針』
- ・ユニバーサルデザインの原則， ノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンターHP https://projects.ncsu.edu/ncsUDesign/cUD/about_UD/about_UD.htm（参照2020-08-31）

※発表会中止のため代替事業「2020年度大学コンソーシアムとちぎ 研究発表要旨集」にて発表

2-3. 大学コンソーシアムとちぎ第17回学生&企業研究発表報告

多文化共生保育における保育者の配慮 —多文化な子どもを担当する保育者のインタビューを通して—

宇都宮共和大学 子ども生活学部 星順子研究室 4年
川 俣 美 香 (かわまた みか)

【概要】 多国籍化・多文化化が進む社会のなかで、保育施設においても多様な背景を持つ子どもが増えている。本研究では、在留外国人が最も多い東京都の保育者を対象に、多文化な子どもの保育における配慮や工夫について調査を行った。

【栃木を元気にするには】 栃木県の在留外国人も年々増加している。これからは、県内の保育施設においても「多文化共生」に配慮した保育実践を進めていく必要があるだろう。東京都の例を参考に栃木の文化に合わせた現場実践につなげたい。

1. 研究の背景

1.1 栃木県の多国籍化・多文化化の現状

栃木県の在留外国人数は42,835人で、7年連続で増加し過去最高の人数となっている(2019年末)。県人口に占める在留外国人の割合は2.21%である。出身国の上位5位は、ベトナム、中国、フィリピン、ブラジル、ペルーの順で、その数は118ヶ国にもおよぶ。外国人住民数が多い市町村は、宇都宮市、小山市、足利市、栃木市、真岡市で、この5市で全体の約69%を占めている。また、栃木県の外国人児童数は、2015年は901人だったが、2019年は1114人で、この5年間で213人も増加している¹。栃木県の保育施設においても子どもの多国籍化・多文化化が少しずつ進行していることが予想できる。

1.2 保育における「多文化共生」の位置づけ

平成30年に改定された『保育所保育指針』や『幼稚園教育要領』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、多文化な子どもの保育を行う上での留意事項が示されている。例えば、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、第1章に「海外から帰国し

た園児や生活に必要な日本語の習得に困難のある園児については、安心して自己を発揮できるように配慮するなど個々の園児の実態に応じ、指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うこと」と記載されている。

また、第2章には、「園児の国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」、第4章には、「外国籍家庭など、特別な配慮を必要とする家庭の場合には、状況等に応じて個別の支援を行うように努めること」と明記されている²。これからの時代は、多様な背景をもつ人たちと共に生きる「多文化共生」の視点を持って保育を行うことが求められているといえる。

1.3 多文化な子どもの呼称について

本研究の対象となる子どもたちの呼称については、「外国籍の子ども」、「外国にルーツを持つ子ども」、「外国につながる子ども」、「第三文化の子ども」等様々な呼称がある。この子どもたちの背景は、両親共に外国籍で子どもも外国籍、親が外国籍と日本籍の子ども、帰化をしている子ども、外国で生まれ育った親の元に生まれた子どもが日本で育つ場合

等、多様なケースがある。このような多様な背景を持つ子どもを、本研究では「多文化な子ども」と呼ぶ。

2. 研究の目的

「多文化共生」とは、「国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら共に生きていくこと（総務省）」と定義されている。保育施設においては、どのようにこの「多文化共生」を実現していくのが良いのだろうか。本研究では、多文化な子どもの保育を担当する保育者が、日々の園生活のなかでどのように子どもたちと関わり、どのような援助をしているのか、「多文化共生保育」における保育者の具体的な配慮について考えてみたい。

3. 研究方法と対象

2020年8月上旬に、多文化な子どもを担当する東京都の保育者4人を対象に、zoomを使い、オンラインで半構造化インタビューを行った。研究対象者の年齢は30代～50代で、経験年数は10年～36年と経験豊富な保育者を対象とした。勤務園は、公立保育所が1名、公立認定こども園が1名、私立認定こども園が2名である。

4. 倫理的配慮

メールで「研究倫理遵守に関する誓約書」と「研究協力依頼書」を送付し、インタビュー開始前に口頭で内容を説明し、本研究の同意を得た。

5. 分析方法

インタビュー内容はすべて逐語録を作成し、KJ法を参考に分析した³。保育者の子どもへの配慮に関する語りを抜き出し、ラベル化、グループ編成し、カテゴリーを抽出、その後、図解化した。

6. 結果と考察

KJ法を参考に語りをラベル化したところ、計38枚のラベルが抽出できた。分類できないラベルや意図から外れているラベルは省いた。さらにラベルをグループ編成した結果、最終的に6つの大グループと2つのカテゴリーにまとめられた。(図1) 図の棒線は関係の有無、矢印は因果関係、線の太さは関係性の度合いを示している。次にカテゴリー別にその詳細を述べる。

6.1 多文化な子どもたちの文化的調整

多文化な子どもを担当する保育者は、日々の保育のなかで多文化な子どもに対して、次の配慮を行っていた。①母文化に合わせた対応、②母語での対応、③日本文化の説明、④日本語のサポート、⑤心地よい園生活を過ごすための働きかけ、⑥多文化を意識した保育の環境の6つである。これら6つの配慮は、「多文化な子どもたちの文化的調整」への配慮であると考えられる。萩原(2008)は、「文化的調整」をファーナムとボクナーの定義を基に次のように説明している。「文化的調整」とは、「自分を失って相手文化に適応したり順応したりするのではなく、相手とのやりとりを調整しながら適応していくこと」を意味し、保育者による「調整」とは、「他者の心理的要求を受容し、他者が自己の意思で自立できるように、他者の求めに応じて援助すること」と述べている⁴。それは、保育者が子どもの気持ちに寄り添いながら、子どもが自分なりに自分と他者の文化を調整または統合しながら生活できるようにしていくための配慮や援助であり、本研究で対象とした保育者の配慮はこれに一致すると考えた。次に具体的な6つの配慮を説明する。

①**母文化に合わせた対応**とは、園生活における「生活面」と「行事」への配慮である。「生

活面」では、「衣服」、「午睡」、「食」の3つの配慮に分類できた。「衣服」への配慮では、多文化な子どもは、母国の気候や習慣の違いから、厚着の傾向があったり、肌着を着ける習慣が無かったりする場合がある。保育者は、子どもの母国の習慣を受け入れ、日本の薄着や肌着を着ける習慣を押し付けないようにしていた。同時に、子どもが活動をしやすいように、こまめに着替えを行い、衣服の調整ができる環境作りを心掛けていた。

「午睡」への配慮では、多文化な子どもの母国には、午睡の習慣がない国もある。保育者は、無理して寝かせようとせずに、心が落ち着ける時間を作るように配慮していた。

「食」への配慮では、多文化な子どもが宗教的に食べられないものは事前に把握し、食物アレルギーと同様に除去食や代替食を提供していた。食事前の挨拶は、両手を合わせる「いただきます」の挨拶はしていない。宗教を連想して嫌がる保護者もいるためである。日本食に慣れていない子どもには、何が食べ

られるのか、何が食べられないのかを把握し、量を調整する等して、安心して食事ができるようにしていた。

「行事」への配慮では、多文化な子どもたちが「民族衣装で参加」できる園行事を設けたり、子どもの母国の挨拶を使った遊びや国旗づくり等を取り入れたりして、多文化な子どもの「母国に触れる」取り組みが行われていた。

②**母語での対応**とは、保育者は多文化な子どもに対して、「母語」での対応を心掛けていることである。保育者は、多文化な子どもの母語の挨拶を保育室に掲示する等して対応していた。その背景には、家庭で聞き慣れた言葉を聞くことで、園でも安心して過ごすことができるようにという保育者の願いがある。また、保育者は、日本語が理解できない多文化な子どもたちと意思疎通を図るために、行政の「言語サポート」(母語通訳)や同じ言語の子どもに通訳を依頼し、母語を

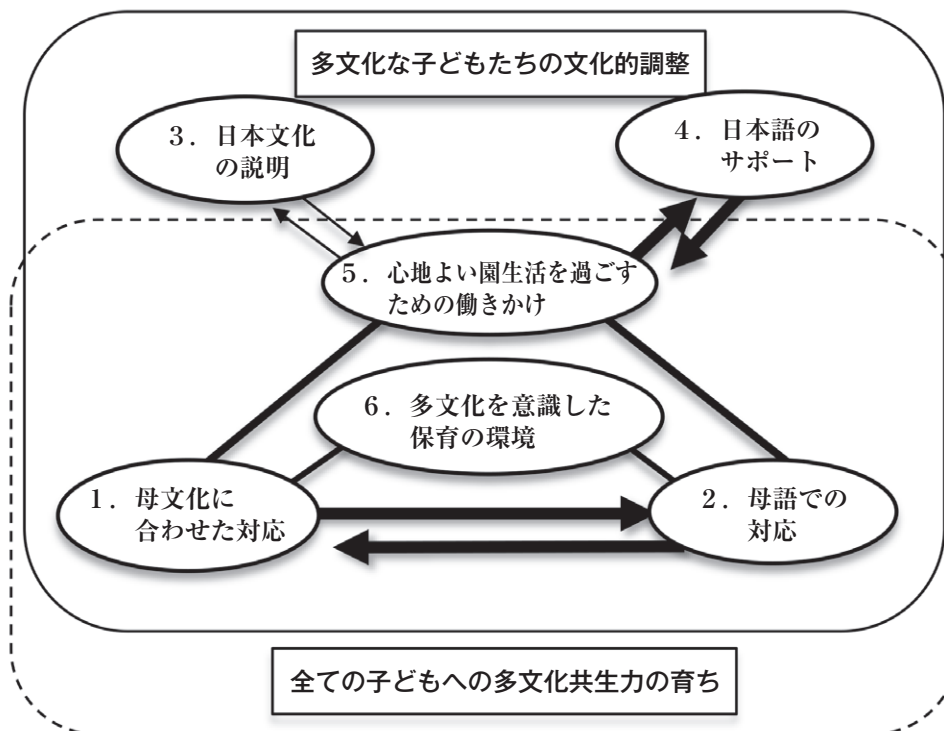


図1 多文化共生保育における保育者の子どもへの配慮

使った対応を行うように心掛けていた。

③**日本文化の説明**とは、主に「食事のマナー」への配慮である。保育者は、他国には、日本とは異なる食べ方やマナーがあることを理解した上で、日本の「箸の文化」、「食べ方の文化」、「椅子の座り方」等のマナーについても丁寧に説明をしていた。日本文化やマナーの強制や強要にならないようにも気を付けていた。

④**日本語のサポート**とは、保育者は多文化な子どもへ、日本語での理解を促すために、「バーバルコミュニケーション」だけでなく「ノンバーバルコミュニケーション」も大切にしていることである。「バーバルコミュニケーション」では、「やさしい日本語」を使用し、単語や短文でわかりやすくゆっくり伝え、子どもの日本語の使い方が間違っていた時は、正しい日本語で返すことを意識していた。「ノンバーバルコミュニケーション」では、何かを説明する際には、物の実物や写真を見せ、保育者がモデルとなり行動の見本を示していた。また、ジェスチャーでは○や×で示し、保育者が伝えた言葉がわかるような身振り、手振りを工夫する等していた。

⑤**心地よい園生活を過ごすための働きかけ**とは、多文化な子どもが園生活に慣れるまでは、できる限り一対一の対応を心掛け、少しずつ他児との関わりも持てるように、他児が遊んでいるところに自然に入れるような環境を整えていること等である。節分の行事の際は、宗教的な理由から鬼に対する抵抗感を持つ子どもや保護者がいることから、その行事の意味を丁寧に説明していた。

⑥**多文化を意識した保育の環境**とは、保育者は、「多文化共生」の願いを込めて保育室

の環境を構成していることである。保育室に、子どもの母国の童謡の歌詞を掲示したり、おままごとのコーナーには、子どもの出身国の料理の手作りメニューを置いたりして、遊びの中で自然に子どもの母国や多文化に触れられる環境を構成していた。また、地球儀や世界地図のパズル、国旗の絵本等を配置し、日常的に母国や他国を感じられるような環境を整えていた。

6.2 全ての子どもの多文化共生力の育ち

保育者は、「多文化な子どもたちの文化的調整」を行うと同時に、「全ての子どもの多文化共生力の育ち」に向けた配慮も行っていた。例えば、「文化的調整」への配慮では、①**母文化に合わせた対応**や②**母語での対応**を行っていたが、この対応について保育者は、「他の子どもたちが生活や遊びのなかで違う文化を学べる機会になる」等とも語っている。このことから、保育者は、全ての子どもが、園生活を通して自然に様々な文化に触れられることに配慮していると理解できる。

また、⑤**心地よい園生活を過ごすための働きかけ**に関する語りには、全ての子どもたちに向けた偏見を持たせないような働きかけが含まれていた。例えば、夏のプール時に、肌の色の違いに気づいた子どもがその違いを指摘し、多文化な子どもがとても傷つき、プールに入りたくないということが起きてしまった事例がある。その際、保育者は世界地図を持ちながら、世界には様々な目の色や肌の色の人たちがいることを話したと言う。

保育者は、全ての子どもに対して、自分と他者との違いを「当たり前」として認識できるような配慮を行っていた。

さらに保育者は、⑥**多文化を意識した保育の環境**を構成していたが、全ての子どもたちがその保育環境に関わり、日々生活をしていることを考えると、この環境に込められた保

育者の願いは、全ての子どもたちにも影響しているといえる。普段から多文化に触れられる環境で育つことで他国への興味、様々な文化があること、肌や目の色が違う人たちもいること等を感じることができ、多様な背景を持つ人達と共に生きていこうとする気持ちの芽生えにつながっていくと思われる。

7. まとめ

本研究で対象とした保育者は、母国と日本のどちらも大切にできるような「文化的調整」を行うと同時に、園の全ての子どもの「多文化共生力」への配慮も行っていった。これらの配慮の背景には、保育者の全ての子どもを受容し、一人ひとりの内面を丁寧に理解しながら可能性を引き出そうとする「子ども理解」があった。対象とした4人の保育者は、これまでに多くの子どもたちを保育してきた方々である。海外経験がある方もいた。多様な保育経験や異文化体験が「子ども理解」に大きく影響を与えているのではないかと思われた。

今後は、保育年数による実践の違いの検討や、多文化な子どもの参与観察、保護者への聞き取り等を通して、保育者の視点との違いの有無も確認してみたい。そして、栃木県の保育施設において「多文化共生保育」の実践につなげていきたい。

8. 引用文献

- 1 栃木県庁「とちぎの国際化の概要2020 V. 関係資料 2 在住外国人関係」, 2020.11.30 (<http://www.pref.tochigi.lg.jp/f04/documents/kokusaikanogaiyou2020-5-2.pdf>.2020.12.14情報取得)
- 2 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園・保育要領解説』, 2018, フレーベル館, pp.123.309.361
- 3 中坪史典『子ども理解のメソドロジー 実践者のための「質的実践研究」アイデアブック』, 2012, ナカニシヤ出版
- 4 萩原元昭『多文化保育論』2008, 学文社, pp.14~15

※発表会中止のため代替事業「2020年度大学コンソーシアムとちぎ 研究発表要旨集」にて発表

2-4. 大学コンソーシアムとちぎ第17回学生&企業研究発表報告

保育だよりの機能と役割

宇都宮共和大学 子ども生活学部 市川舞研究室 4年
武藤美生(むとう みう)

【概要】 保育だよりの機能・役割を明らかにすることを目的として、保育だよりについて検討した。その結果、保育だよりは園と家庭、保護者と子どもをつなぐ、いわば「子ども・子育て支援」の機能・役割を担っていることが明らかとなった。さらに、地域全体で子どもを育てる意識の醸成に繋がる可能性が示唆された。また、園において保育だよりを作成することは、園内研修の機能を果たし、保育の質を高める役割を担っていると考えられた。

【栃木を元気にするには】 保育だよりは、保護者が子育ての情報を得つつ、園・保護者・地域が楽しみや喜びを共有し、支え合いながら子育てと向き合うことを可能にすること。また、充実した保育だよりを発行することは園の保育の質の向上につながる事が明らかとなったことから、保育だよりの充実を図ることで、園・保護者・地域がともに子どもの育ちを支え合う、元気な栃木づくりに貢献していきたい。

はじめに

保育だよりは、保護者とのコミュニケーションツールとして重要な役割を果たすもの¹であり、園の保育方針、保育内容を伝え、協力や理解を求めめるために、発行される²。つまり、おたよりは園と家庭を結び、連携して子育てするための媒体の一つと考えられる。

子ども・子育て支援は栃木県においても重要な課題である³。そこで本研究では、園と家庭とが連携して子育てを支えるための保育だよりについて検討する。

研究の目的

保育だよりの機能・役割を明らかにし、子どもの育ちを共有するおたよりの在り方について検討する。

研究の方法

A認定こども園（以下、A園）が2019年度に発行した「Aだより」13冊の分析および、A園の保育者へのアンケート調査を行った。さらに、実際におたよりを作成することから、子どもの育ちを共有するおたよりの在り方を

検討した。

結果・考察

(1) A園の保育だよりの概要

毎月1回月末に「Aだより」を発行している。また、園のホームページにリンクされたface bookを活用して適時、園生活の様子を発信している。

(2) 「Aだより」の分析

2019年度に発行された「Aだより」全13冊から、特色を整理した(表1)。注目したいのは、一般的には子どもが所属するクラスのおたよりのみ配布されるどころ、「Aだより」は、全クラス分のおたよりを一冊の冊子とし

表1 「Aだより」の特色

全体構成	<ul style="list-style-type: none"> ・全学年/クラスのおたよりを一冊にまとめて配布 ・前半に共通事項として、「月間予定表・必要な持ち物・行事連絡等」を掲載 ・後半に全学年の「クラスだより」および子育て支援施設だより
クラスだよりの構成	<ul style="list-style-type: none"> 形式 <ul style="list-style-type: none"> ・見開き一ページに一クラス ・手書き(イラストも含む) 内容 <ul style="list-style-type: none"> ・統一性が見られる <今月の子どもの姿—育ち—来月の保育のねらい> および、来月親しむ主な歌・絵本 ・エピソードの記録を中心とする(写真・言葉の吹き出し) ・今月の主な子どもの活動のトピックをいくつかピックアップ ・季節・その時期のイベント等に適した手書きのイラストを活用

て配布していることである。保護者は、自分の子どもが所属する学年だけでなく他学年の子どもたちの姿や保育の様子を目にすることができ、①その時期の0歳児から年長児までの子どもの育ちを知る、②①を重ねることにより子どもの発達過程に見通しを持つことができるようになる、と考えられる。つまり、全クラス分のおたよりを一冊の「Aだより」として配布することで、保護者が子育て情報を得る手段としての機能を有していると考えられる。

(3) 保育者へのアンケート調査

A園の保育者4名（副園長・主幹保育教諭・保育教諭2名）を対象にアンケート調査を行った（図1）。

「Aだより」について

園ではおたよりを「園での子どもの様子の“いま”を伝える」ことで「子どもの育ちの共有」をし、「家庭と共に子育てを楽しむきっかけ」となることを意図し、おたよりに「園と家庭、保護者と子どもをつなぐ」、いわば「子ども・子育て支援」の機能・役割を期待している、と考えられる。

また、全学年のおたよりを一冊にして配布していることについては「子どもたちみんな

の姿を見守ってほしい」という保育者の思いから、おたよりを通して自分の子どものみならず同じクラスの子ども、他学年の子どもの育ちを温かく見守ると同時に、0歳から年長児までの子どもの成長の見通しを持つことを期待している。つまり、園全体、保護者全体で一人ひとりの子どもの育ちを支えるまなざしをもつための媒体として、おたよりをとらえていると考えられる。

さらに、「配布後に保護者の方から受ける感想などを耳にすることで、園での保育も深まり嬉しく思う」との回答から、おたより自体は園から一方的に発行されるものだが、保護者から日頃の保育のフィードバックを得るきっかけとなることから、双方向の関係性を築くためのツールとして機能していると考えられる。

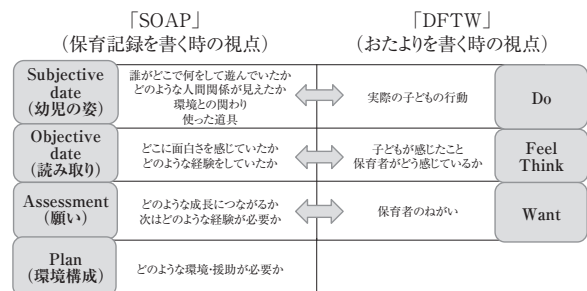


図2 「SOAP」と「DFTW」の視点

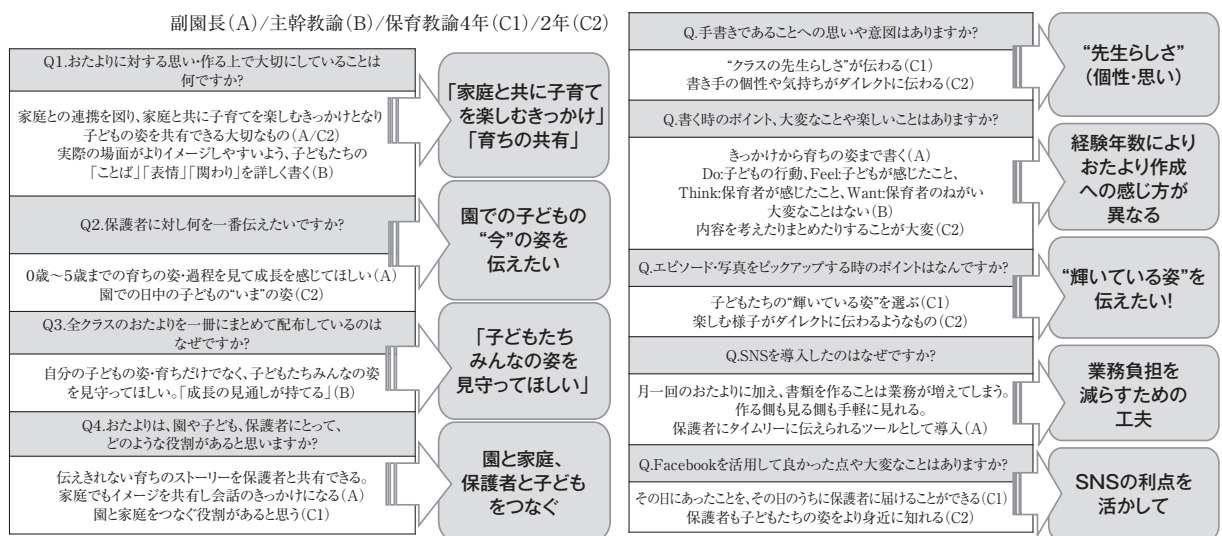


図1 アンケート結果

また、「出来事だけでなく、その時子どもたちがどう思ったのか、何を感じたのかを必ず入れるようにしている」「きっかけから子どもの育ちまで書く。D：Do（実際の子どもの行動）、F：Feel（子どもが何を感じているのか）、T：Think（保育者が感じたこと）、W：Want（保育者の願い）」との回答から、上記の機能を果たすために、おたよりの内容の充実を図っていると推察される。

SNSの活用について

「Aだより」の公開は、在園児家庭に限定される一方、SNSでは保育の様子や子どもの姿が広く一般に公開されている。SNSの活用により、その特性であるタイムリーな情報発信を可能としている。写真を活用したドキュメンテーションを中心に、園の保護者に加え広く地域に日々の子どもの姿を発信・共有することで、園を身近に感じたり、地域全体で子どもを見守る、子育て・子育て環境づくりに繋がることと期待される。

(4) クラスだよりの分析

「Aだより」の内容の充実がどのように図られているのか、「クラスだより」を分析した。

具体的には、河邊（2018）が提唱する「SOAP」の視点および（3）で挙げられた「DFTW」の視点から分析した。図2に「SOAP」「DFTW」の関連を整理する。両者には共通項がみられるが、「DFTW」の視点には「P：Plan（環境構成）」が見られないという相違点が認められた。しかし、図3に示すように、クラスだよりに掲載される「子どもの姿」の写真に、人・モノ・場など保育環境の視点が認められた。

以上のことから、クラスだよりでは「子どもの行動→子どもが感じたこと→保育者の読み取り→次の保育へ向けたねがい・環境構成」の一連の保育のプロセスを示しながら、保護者と子どもの経験内容や育ちを具体的に共有できるよう、その内容の充実を図っていると考えられる。

「S：幼児の姿」「D：実際の子どもの行動」

- ・どんぐりを見つける
- ・「緑のどんぐりあった！」などの会話を楽しむ
- ・友だちと見せ合う
- ・穴が開いたどんぐりの中を恐る恐る確認する

「O：保育者の読み取り」「F：子どもが感じたこと」

- ・どんぐりの違い、不思議さに気付く
- ・穴が開いたどんぐりの中に虫がいるかもしれない（自分なりに予測-検証）

「O：保育者の読み取り」「T：保育者が感じたこと」
「A・W：保育者の願い」

- ・身近な自然の中で見つけた面白さを友だちと共有しながら関わっていく経験を重ねて欲しい

写真

意図：子どもの姿「Do:子どもの行動」を伝える

情報：誰と(人)・どこで(場所)・どんな道具(モノ)を使って

“写真”に「P:Plan(環境構成)」の視点が含まれている



図3 おたより分析—「SOAP」「DFTW」の視点から—

(5) おたよりづくりの実践

A園の保育に参加させていただき、おたよりづくりを試みた。概要は図4の通りである。また、作成したおたよりは、改善点などの助言をいただき、それを基に再び作成した。

図5に作成したおたよりを示す。改善後は、イラストを中心に示すことで、活動の状況や環境構成が視覚的にイメージしやすくなり、友だちと同じ空間でそれぞれのしたい遊びを楽しんでいる雰囲気が伝わりやすくなった。さらに、イラストとエピソードのつながりも見えやすくなり、子どもの経験内容が分かりやすくなったと考えられる。本実践では写真は活用しなかったが、イラストが環境構成を表しており、それを補完したと考えられる。以上のことから「DFTW」および「SOAP」の視点を踏まえて記述することが、おたよりの伝わりやすさに影響することが示唆された。

1) 日時

令和2年10月8日(木)・9日(金)
16時～18時(預かり保育時間)

2) 対象児

3歳児クラスの子ども約30名

3) おたより作成の手順

- ①参与観察において、子どもの姿・言葉に着目し、エピソードを記録する。
- ②エピソードの記録を基にその日の象徴的な場面をピックアップする。
- ③レイアウト構成を行い、下書きをする。
- ④清書をする。

図4 おたより作成の概要

おわりに

本研究の結果から、「保育だより」は園と家庭とが双方向の関係性を築くツールとして機能していること。さらに、園と家庭、保護者と子どもをつなぐ「子ども・子育て支援」の機能・役割を担っていることが明らかとなった。

さらに、「Aだより」の特色として全学年のおたよりが一冊となっていることで、保護者が自分の子どもだけでなく全園児の生活の様子を知り、乳幼児期の子どもの発達過程をとらえる機会となっていること。さらに、園と保護者とが一体となってすべての子どもの育ちを支えようとするまなざしをもつこと、すなわち、地域全体で子どもを育てる意識の醸成や地域づくりにも繋がることが示唆された。

これらが十分に機能するためには、おたよりの充実が欠かせない。「クラスだより」の分析および「おたよりづくりの実践」から、「きっかけから子どもの育ち」まで、子どもの学びのプロセスを、写真等を活用しながら具体的に示すことで、保護者と子どもの育ちを共有できるよう内容の充実を図っていることが明らかとなった。

このように「保育だより」をつくることは、園にとっては保育者同士で保育を省察し、子ども理解を深め、次の保育の手立てを探る機会となっていると考えられる。つまり、おたよりづくりは園内研修の機能を果たしており、園の保育の質を高める役割をも担っていると考えられる。

保育はプロセスを重視する営みである。「きっかけから子どもの育ち」を園・保護者・地域と共有し、ともに支え合うことができる「保育だより」の工夫を、今後も探求していきたい。

3. 宇都宮市環境学習センター事業報告

子ども生活学部 教授 桂 木 奈 巳
子ども生活学部 助教 田野邊 涼

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2017年度より宇都宮市環境出前講座^{注1)}に登録し、年に2～4回程度、企業等の委託を受け、親子で自然に親しむことを目的とした行事を実施してきた。その中でNPOうつのみや環境行動フォーラム^{注2)}からの依頼は、合計6回受託し開催した実績がある。会場は宇都宮市環境学習センターである。行事では、宇都宮市の環境課題の一つである「生物多様性の周知」を主題とし、生物多様性を身近に感じながら楽しく活動できる内容を検討した。当日は学生が講師役としてプログラムの提供を行うスタイルとしている。

この行事の運営方法が確立され、参加希望者数も安定していることから、2020年度より「環境学習センター事業」として実施することになった。2020年度は8月と1月の2回実施を計画したが、実施可能であった8月分を以下に紹介する。

2 「親子で楽しく自然体験 in 環境学習センター8月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。学外での実施にあたり、事前に1回は現地の下見を実施している。この際に前稿^{注3)}で取り上げた対策の他、参加者の動線等の確認を行い、感染防止対策を強化した。さらに、危険生物を確認し、これに伴う立ち入り禁止区域の確認、採取可能な昆虫類を簡単に調査し、下草刈りの延期等について調整を行なった。

表1 行事实施の概要

実施日時	令和2年8月1日(土) 10:00～12:15
実施場所	クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年: 中島ありさ、大場健作、若杉知也、福田祐太 3年: 檜山幹弥(統括)、佐藤優輝 2年: 建優寧、大槻友里
プログラムの内容	①ノーズ ②昆虫採集 ③生き物美術館 ④コウゾ和紙の風鈴づくり
下見	令和2年7月25日(土) 10:00～11:30、学生5名参加
参加者数	51名(大人22名、子ども29名) / 16家族

2-2 活動の様子

活動の様子を資料1に示す。学生の発案で、準備の時間帯に偶然見つけたザリガニをアイスブレイクに取り入れた。ザリガニを発見した学生の生き生きとした様子が参加者に伝わった様子であった。学生が慣れない学外での環境で、このような機転の利く対応ができるのは、何年もこの行事に関わってきた成果といえよう。また、偶然セミの幼虫が現れ、二人の子どもが気づき、興味を示した。一人の子どもは幼虫が「セミの抜け殻」に見えたようで、なぜ「抜け殻」が動くのかと問いかけてきた。もう一人の子どもは高い所に移動した幼虫を低い所に置きたい様子であっ

た。幼虫が地面に落ちた時に、強い力で幼虫を掴み、低い位置にある枝に置くことを数回繰り返していた。この様子を見て、学生は何度か「幼虫がつぶれてしまう」という内容の声かけをした。やがて幼虫は動かなくなった。数年かけてようやく大人になるセミを守れなかったと悔やむ学生もあり、学生間で命の扱いについて意見交換する場面もあった。

後半の和紙の風鈴づくりでは、材料はすべて消毒してキット化して各家族に配布した。家族毎に作成する方式とし、主要な部分のみ現地で作成し、自宅で完成させる方式とした。

資料1 活動の概要（バーベナのサイトより）

「親子でたのしく自然体験 in 環境学習センター」を実施しました

2020年8月1日（土）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。

梅雨明けで久しぶりの青空の元、快適に実施できました。

最初は「ノーズ」で、カブトムシ・セミ・モグラのクイズを予定していましたが、当日の準備・現地確認中に学生が、敷地内の川に目視でザリガニを発見。川に入り、ザリガニを捕獲。急きょ、クイズに加える事になりました。

次は昆虫採集でした。捕まった虫たちは、バッタやコオロギが中心でしたが、中には大きなコガネグモ、ツマグロヒョウモン、シオカラトンボもいました。

例年はこの虫たちで「いきものピラミッド」でしたが、今年は「虫の美術館」（ネイチャーゲーム・森の美術館）とし、家族単位で採取した生きものを展示し、それを皆で見て回るスタイルとしました。

後半は休憩もかねて、「和紙とカピス貝の風鈴」作り。大学の森に自生している「コウゾ」から作った和紙を材料としました。

今回、申し込みが殺到とのこと、大盛況で有り難い限りですが、内心はビクビク・ハラハラでした。3密を避ける・家族同士の接触を避けるなどで、実施できるプログラムが限られました。新型コロナウイルス対策が最大の課題でしたが、環境学習センターさまのご協力のもと、行事自体は無事終了したと思います。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。



○準備中・ザリガニをつかまえる

最近、ザリガニに夢中の学生さんが、川に飛び込む！開始まであと10分！



○ご挨拶

今回は9名で実施しました。外でのご挨拶も初です！



○ノーズ

最初の問題はみんな大好き？カブトムシ！最後は、さっき捕獲したザリガニ！



○昆虫採集開始

参加者の方の多くは、捕虫網と虫かご持参でした。気迫を感じました。大人も子どもも夢中です。



○アブラゼミの幼虫

幼虫が木を登っていました。出てくる時間を間違えたようです。「ぬけがらなのに、どうして動くの？」なるほど！抜け殻に見えたんだ！



○虫の美術館

捕まえた虫を皆で鑑賞。「バッタ3兄弟」「はねっこ」など、虫の特徴を表したステキな題名。気に入った作品には「いいねシール」をぺたり。



○和紙の風鈴

昨日採取した「コウゾ」を手に、和紙の作り方を簡単にご紹介しています。



○和紙の風鈴

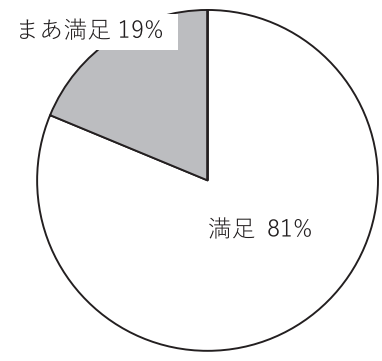
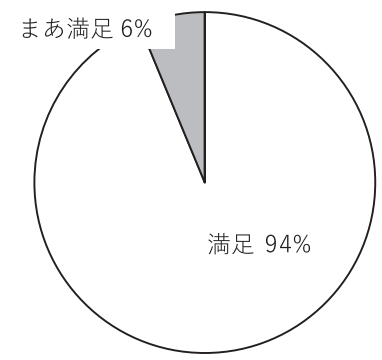
舌（重り）の部分は、皆で検討の結果、カピス貝になりました。涼しげな音です。

3 活動を終えて

3-1 参加者の反応

資料2に環境学習センターによる総括・評価、および参加者（保護者）に依頼したアンケート結果の一部を示す。概ね良い評価をいただき、アンケートにおいてはプログラムの内容よりもスタッフ対応の方が評判が良い結果であった。

資料2 親子で楽しく自然体験 in 環境学習センター アンケート分析および評価^{注4)}

総括・評価	<p>環境学習センター東側の林地を活用して、親子が楽しく遊びながら身近な自然と触れ合う体験活動や工作などを通して、自然のすばらしさや命のつながり、親子のつながりなどを感じ、学ぶということを目的として開催しました。</p> <p>今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、運営スタッフ全員が開催前から毎日検温し、健康観察・行動記録表を記入する等の対応を取るとともに、3密回避・手指の消毒、参加者への事前周知（マスク着用、体調不良時の参加自粛）などの対策を適切に講じた上で実施しました。当日は16家族51名の参加者となりました。</p> <p>今回は屋外での活動を約2時間、熱中症に十分注意しながら行いました。前半は「ノーズ」と虫とりを中心とした「生き物・美術館」、後半は涼しい木陰で「コウゾ和紙の風鈴づくり」を行いました。参加者の皆さんは、講座の内容とスタッフの対応につきましてもほとんどが「満足」と回答していました。</p> <p>今回は、新型コロナウイルス感染症対策として、「行事開催における新型コロナウイルス感染防止のための対応（案・マニュアル）」を共和大学及び自然遊びの会バーベナの皆さんに作成いただき、それに基づき、参加者の皆さんにもご理解・ご協力をいただき、事業を実施することができました。今回も桂木先生のご支援のもと、事前の現地確認や入念なりハースル、そしてメンバー相互の連携・チームワークにより、楽しい雰囲気の中でスムーズな運営がなされました。</p>									
参加者の反応・アンケート結果より	<p>Q1) 講座内容はいかがでしたか？</p>  <table border="1" data-bbox="678 1108 813 1232"> <tr><td>□</td><td>満足</td></tr> <tr><td>■</td><td>まあ満足</td></tr> <tr><td>■</td><td>やや不満</td></tr> <tr><td>■</td><td>不満</td></tr> </table>	□	満足	■	まあ満足	■	やや不満	■	不満	<ul style="list-style-type: none"> ・日常では見過ごしてしまう虫たちだけよく観察する機会が得られて楽しかった。 ・なかなか親子で虫とりをすることもなかったのでよい機会でした。 ・虫やきのこなど沢山ふれあえました。 ・遊び、学び、楽しめました。 ・親子ともに楽しめました。 ・子どもと一緒にクイズも良かったし楽しめました。 ・クワガタがとりたかったです。 ・場所が少しせまく感じました。
□	満足									
■	まあ満足									
■	やや不満									
■	不満									
<p>Q2) スタッフ対応はいかがでしたか？</p>  <table border="1" data-bbox="678 1579 813 1702"> <tr><td>□</td><td>満足</td></tr> <tr><td>■</td><td>まあ満足</td></tr> <tr><td>■</td><td>やや不満</td></tr> <tr><td>■</td><td>不満</td></tr> </table>	□	満足	■	まあ満足	■	やや不満	■	不満	<ul style="list-style-type: none"> ・優しく声かけて下さいました。 ・物知りなお兄さんお姉さんが親切に教えてくれました。 ・分かりやすく子供達とも話をしてくれました。 ・大変良くしていただきました。 ・いろいろ教えていただきありがとうございます。 ・子どもたちにもとても優しく声かけをしてくださいました。 ・とても親切だったと思います。 	
□	満足									
■	まあ満足									
■	やや不満									
■	不満									

3-2 学生の感想

表2に参加した学生の感想等を示す。学外で実施するため、特に持参物の確認や準備に漏れがないようにする必要があり、学内における実践とは緊張感が違うようであった。行事では、各プログラムを担当することで、時間配分や伝え方等に試行錯誤をしている。まだ慣れない学生は、先輩の真似をしたり、補助を受ける等して乗り切っている様子があるが、貴重な実践の場になっていることがわかる。環境学習センターにおける行事については、生物多様性を前面に出すことが求められているため、夏の行事においては「生き物のつながり」という視点が欠かせない。今回の行事ではコロナ対策のため、採取した昆虫類は展示のみとしたため、生き物同士のつながりを意識することが難しくなると懸念した。しかし数回行事に参加している学生は、このことを踏まえた声かけをしている様子であった。

表2 参加学生の感想

<p>○活動して良かった点・感想</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもだけでなく、保護者も一緒に楽しく活動していた様子が見られたこと。・子どもたちは自然物を用いてもづくりを楽しんでいた。風鈴づくりは初めてだった子どもたちが多く、一人一人の工夫が見られ、作っている姿から学びがあったように感じる。・自然に生息する生き物同士のつながりを感じながら、実際に見つけて、捕まえて、その体験が子どもたちにとっての学びだと思えた。・紙を使って風鈴を作る活動では、初めて紙の性質に触れた子どもたちの反応が面白かった。紙の性質に触れ、子どもたちなりに理解したうえで制作したので、それぞれが風鈴に対して愛着をもっていたように見えた。・コウゾという植物から、紙ができる仕組みを子どもたちが興味をもってくれたことがよかった。・トンボを捕まえる子どもたちが多くいたが、一人の子どもが「土の中に何かいるかな？」と土を掘ってミミズを捕まえていた。「ミミズは土をきれいにしてくれる」ことを伝えると驚いた表情を見せた事が印象的だった。
<p>○自分自身の成長を感じた点</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもたちへの接し方や、教え方の工夫など。自然に対する見方や考え方が変わった。・この行事で実践してきた事（生き物ピラミッドや紙で作る風鈴づくりなど）は、実際の保育の現場でも実践できる内容だと思うので、今後実践してみたい。こう思えるのも、事前の準備や当日に実際に制作する子どもたちの姿を見ることができたからだと思う。自ら体験することに意味があり、この経験を今後活かしたい。・実践をする場合に目的や内容の伝達の工夫の仕方に悩んだ。話し方、時間の使い方など子どもの前で実践する中で、徐々に慣れ自信がついた。

3-3 おわりに

環境学習センターで開催する行事のプログラムのパターンを繰り返して実施している。同じ場所を使用して4年目になるため、内容のマンネリ化が課題であるが、出会う生き物は毎年変化があり、学生により視点が異なるため、予想外の興味深い現象に出会うことが多々ある。現状では自然に助けられ、充実した内容が提供できている。

行事においては、家族によりプログラムに対する取り組みの進度は様々である。早く終わる家族のその後の様子も様々であり、自ら何か興味の対象を見つけている家族もあれば、なにもせずにいる家族もある。「もっと内容が欲しい」「多すぎる」など、様々な意見をいただく。その兼ね合いが難しいが、負担減と継続が大切と判断し、ここ数年はあえて内容を少なくしている。学生は余裕がある方が自らが楽しめる様子であり、この点も重要と考えている。今後も講座開催の依頼に対しては可能な範囲で受託し、学生の経験を積む場としたい。

注1 宇都宮市環境出前講座は、宇都宮市環境部が主体となり実施している講座である。講座の目的は、環境問題や持続可能な社会の実現であり、講座内容には地球温暖化、もったいない運動、電気自動車、生物多様性等、環境問題等がある。

注2 前掲 p44 注2参照

注3 前掲 p35 2-1に記載の感染対策

注4 前掲 p44 注4参照

VI. 宇都宮共和大学子ども生活学部 卒業研究

1. 2020年度卒業研究題目一覧

保育現場における体操やダンスの特徴と効果	大塚 彩穂
自然理解のためのプログラムの検討	大場 健作
多胎育児に関する現状と課題	塚原 奈々
教育を受けられない子どもの現状と課題	川中子 千華
多文化共生保育における保育者の配慮	川俣 美香
沖縄県の保育と歴史	久保田 晴菜
幼児期の色彩環境について	小瀧 美南
病棟保育の必要性とその効果	斎藤 愛佳
子どもと音楽	齋藤 由生菜
食物アレルギー対応のレシピについての一考察	佐藤 菜摘
保育文化財と音楽	関根 亜莉沙
音楽療法における楽器の役割について	中島 ありさ
障がいのある子どものきょうだい	中山 佳
保育における児童文化財の展開	沼尾 有咲
保育のユニバーサルデザイン	沼子 萌
子どものやりたいを引き出す「編む」	速水 麻衣
子どもの遊びを発展させる教材研究	福田 舞
身近な水辺の外来生物を保育現場で活用する方法	福田 祐太
障害を持つ作家さんが与える影響に関する研究	麦倉 千暖
保育だよりの機能と役割	武藤 美生
オーストラリアの保育	八木澤 絢未
乳児の1年間の成長について	矢古宇 沙季
乳幼児期における非認知的能力を育てる保育の在り方について	柳田 麻佑
幼児期におけるボール遊びの必要性	山形 真都
障害者支援施設職員の長期勤続を可能にする条件	山本 紗羅
放課後児童クラブ職員の魅力と専門性	吉澤 玲奈
食から自然を理解する	若杉 知也

2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第34回学生研究発表報告

主催：全国保育士養成協議会関東ブロック協議会

日程：2021年2月19日（金）

会場：ZOOMによるオンライン形式

1 「障がいのある子どものきょうだい

～周囲との繋がりをめぐって～

宇都宮共和大学子ども生活学部4年 中山 佳

指導教員：土沢 薫

2 「食から自然を理解する

～五感を研ぎ澄ます食体験活動～

宇都宮共和大学子ども生活学部4年 若杉 知也

指導教員：桂木 奈巳

2-1. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第34回学生研究発表報告

障がいのある子どものきょうだい ～周囲との繋がりをめぐって～

中山 佳

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 研究の意義と目的

本研究では、障がいや病気のある子どもの兄弟姉妹(以下、「きょうだい児」と呼ぶ)同士の繋がりと周囲の人の理解向上を見据えて、「きょうだい児」の現状を明らかにし、今後のきょうだい児支援の在り方について考察を深めることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) アンケート調査

295名の大学生及び短期大学生に対し、集団対面式の形で実施した(2020.7.21～8.7)。

(2) インタビュー調査

協力申し出のあった18～21歳の6名(男1、女5)に対し、半構造化面接で経験や思いを語ってもらった(2020.9.24～10.9、時間は各30～60分)。分析方法は、逐語録を作成した上で、KJ法を用いて構成図にまとめた。

(3) フィールド調査

「きょうだい会 SHAMS」の2020年度の活動に参加・協力し、参与観察を行った。

3. 結果

(1) アンケート調査

「きょうだい児」という言葉の認知度は21%であった。きょうだい児に対する76項目のイメージのうち、上位20項目中3分の2以上がポジティブなイメージであった(図1)。きょうだい児と出会ったことのある人は36%、きょうだい児が悩みや問題を抱えていると思っている人は65%であり、自由記述では周囲からの偏見に関する内容が多く挙げられた。

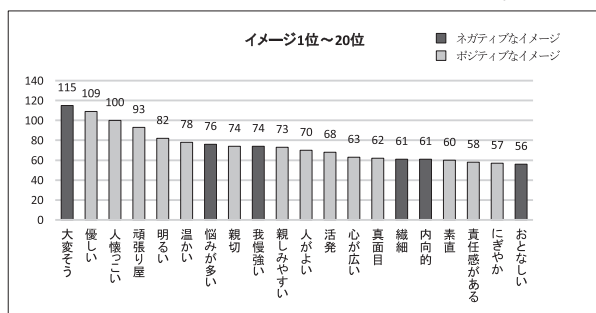


図1:きょうだい児についてのイメージ1位～20位

(2) インタビュー調査

きょうだい児と障がいのある兄弟姉妹の年齢差や出世順位により、悩みの内容や抱える問題の傾向が異なることが分かった。きょうだい児が年下の場合、兄弟姉妹に対して混乱や葛藤が多く、年上の場合、ネガティブな気持ちの抑圧や心理的防衛が働きやすいことが明らかになった。また、きょうだい児が語った思いをKJ法を用いてまとめた結果(図2)から、「家族」と「周囲・社会」に関する大きく2つの内容に分類され、家族に関しては、親と兄弟姉妹への複雑な思いが浮かび上がった。また、それぞれが影響し合いながら変化することが見えてきた。

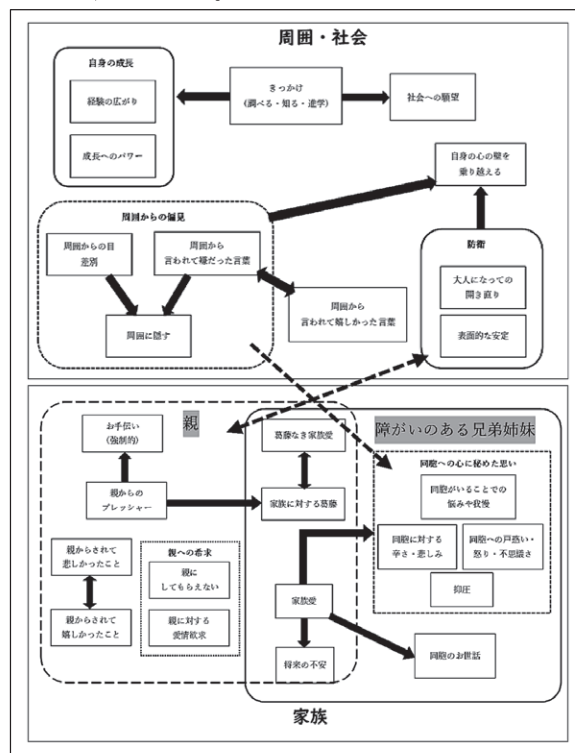


図2:KJ法によるきょうだい児の思いの図式化

(3) フィールド調査

きょうだい会の活動では、参加者が人目を気にせず素直な気持ちで語れる雰囲気作りや、保護者は別室待機などの配慮をしていた。

小学生の部(7～11歳の参加者)では、ファシリテーターに温かく受け止めてもらい、「障がいのある兄弟

姉妹と生活する中で困っていること・大変だったこと」を共有した。緊張が解け、素直に話すきょうだい児が多かった。内容は、トーク・グラフィックを用いて視覚的に分かりやすくまとめられた。中高生の部(15～17歳の参加者)では、コロナ禍での自粛期間中のきょうだい児特有の悩みが多く、それらを仕方のないこととして受け入れている者が多かった。ファシリテーターは、きょうだい児に「ひとりじゃないよ」「我慢しすぎないでね」などのメッセージを伝えていた。

4. 考察

(1) アンケート調査

きょうだい児に対するイメージは、ポジティブなものが多かったが、反面、悩みや問題を抱えているのではないかと考える人が多かった。それは、きょうだい児への認識がほとんどない人たちにとっては、漠然としたきょうだい児イメージで表面的に答えているためと推察される。また、自由記述には多くの回答があり、日頃きょうだい児について知ったり考えたりする機会がなかった人であっても、機会さえあればきょうだい児の困難さに思い至る傾向性が示された。

(2) インタビュー調査

きょうだい児が年下の場合、兄弟姉妹の障がいについて途中で気付き、混乱や葛藤が生じやすい。年上の場合、障がいのことや親の気持ちの理解ができるため、表面的に受け入れたかのように振舞い、気持ちを抑圧しがちであった。そのことが、きょうだい児自身の心理的成長や障がいについての理解、受容に影響を与えることが推察される。また、周囲の人の障害のある兄弟姉妹についての理解度や受け取り方も、きょうだい児に間接的に影響を与えることが分かった。きょうだい児が語った思いから、自身の家族に対する認識の変化が浮かび上がってきた。兄弟姉妹の障がいを理解しておらず、その存在を当たり前と感じている「当たり前な家族」から、周囲と関わるうちに気付く「ふつうではない家族」へと認識の変化が生じる。さらに、成長や経験に応じ、周囲の偏見や自身の心の防衛などから解放され、兄弟姉妹を素直に認め自分らしさを発揮できるようになったとき、かけがえのない「特別な家族」へと、家族の捉え方が変化していく。これらは単線的に進むのではなく、行きつ戻りつ進んでいくと思われる。

(3) フィールド調査

きょうだい児にとって、きょうだい会への参加は、現在と未来の自分、その両方に力を与えてくれる二重

の効果があることが分かった。また、参加者の年齢や境遇の同質性をもたらす共通性や共感が、活動への参加しやすさを生じさせると考えられる。

話し合いの場では、学齢期は障がいのある兄弟姉妹を素直に認めやすく、年齢が上がると、日頃から障がいのある兄弟姉妹に合わせて生活し、自分の置かれている現実を仕方のないこととして処理したり、諦めたりする傾向が見られた。きょうだい児の成長や経験に伴い、自身や周囲の捉え方に変化が生じる。

5. 総合考察

(1) 周囲や社会との関わりについて

周囲の人の鈍感さ、障害に対する偏見や忌避的言動を、きょうだい児は過敏に察知し、傷つくことが多い。それにより、自身の現実的認識と周囲の人のイメージとの間には、ズレや矛盾が生じやすい。繊細なきょうだい児が不用意に傷つくことがないように、周囲や社会のさらなる理解が期待される。また、学校教諭の理解が乏しく、悩むきょうだい児がいる現状から、学校現場における理解と、サポートが得られる環境作りが必要である。

(2) 家族との関わりについて

きょうだい児は、十分に親に甘えにくいことや、対等なきょうだい関係が成立しにくいことが明らかになった。そのような家族との関係について、周囲に相談できにくい生活を送る中、きょうだい児自身のおかれる現実や兄弟姉妹に対して、“自分なりの納得”をする。さらに、親が気遣って兄弟姉妹に関することを説明せずはぐらかすことは、意図せずきょうだい児の不安や混乱、家族間に不可侵的領域を作り上げる結果になる。温かく正直な家族間コミュニケーションが大切である。

(3) きょうだい児本人の自己理解について

きょうだい児は、自身の現状を不自然なほどに肯定的に受け入れているように語ることがあるが、この矛盾する複雑な心性は、きょうだい児自身の自己理解を停止させたり、周囲へのきょうだい児理解の妨げにも繋がったりする可能性が否定できない。

きょうだい児の抑圧された思いは、きょうだい児の人生にとって、とても重みのある自身の根幹に関わる内容であり、きょうだい児にとって、自身の人生を大切に扱う時間や共有し合う場が必要である。

6. まとめと今後の課題

きょうだい児の現状と支援の大切さが明らかになった。この結果を踏まえ、今後は保育者として保育現場における支援に携わると共に、きょうだい児の啓発活動に繋がる絵本製作に取り組みたいと考えている。

2-2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第34回学生研究発表報告 食から自然を理解する ～五感を研ぎ澄ます食体験活動～

若杉 知也

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 目的

近年の子どもには自然体験不足が指摘されている。「自然」とのふれあいは子どもの発達にも欠かせない。一方で自然環境の破壊も世界規模での課題とされている。すなわち、「地球の成長限界」をふまえ、SDGs（持続可能な開発目標）が採択され、各国でその目標を達成しようと動いている。ここで設定されている自然に関する目標を達成するためには、多くの人に自然の仕組みやその価値を理解してもらう必要がある。幼少期から自然に興味関心を持つことができ、その持続が可能となれば、成長後も自然を大切に思う気持ちを持ち続けられるだろう。

自然と親しむ方法には、様々な内容や方法があるが、その中で筆者は「食」とのつながりに着目した。筆者の両親の話から、以前の生活では、「自然」と「食」は深い繋がりがあるようだった。しかし、現在は、それが見えにくくなっていると感じる。

「食」の体験は、口から直接そのものの味や香りを感じるため、強く印象に残る傾向がある。つまり、野生に植生する草花や木の実などの自然物を食することで、自然を直接感じる事が出来る。

そこで、本研究では野草^{*1}を採取し、それを食する活動を通して、若者^{*2}に自然に親しみ、その楽しさや面白さをより深く知り、自然の理解（五感を使った実体験の積み重ねによる身近な自然への気付き）につなげることを目的とする。「食」の活動と「自然」の組み合わせの相乗効果により、本研究での実践が強く印象に残ることを期待する。

2. アンケート調査（野草の認知度把握）の実施

(1) 調査の概要

2019年9月29日に宇都宮市の市民10～70代の135名を対象に、野草の認知度調査を行った。調査は質問紙法にて行った。質問項目は「野草や山菜」「昆虫・虫」を食べる事への抵抗の有無、および「よく食べる野草・山菜や昆虫類」の種類を記載させた。

(2) 結果・考察

調査の結果、全体の7割以上は野草を食べる事への抵抗はないことが分かった。反対に虫を食べる事に

は6割以上が「抵抗がある」と回答した。若者(30代まで)と高齢者(60代以上)で比較すると、野草を食べる事への抵抗は若者の方が「ない」と回答する者が多かった。一方、虫を食べる事に関しては若者の約8割が「抵抗はある」と回答しているのに対し、高齢者の約9割が「抵抗はない」と回答し、若者と高齢者で差が顕著にあらわれた。表1には食する種類の記述結果の回答数を示す。全体的に若者よりも高齢者の方の回答数が多かった。すなわち、高齢者は野草や虫を食べる経験が豊富で知識もあり、食生活の中に「自然」を取り入れていると予想される。一方、若者は回答数が少ないことから、野草や虫を食べる経験が少なく、その機会も減少していると考えられる。この理由に筆者は若者に好まれる野草料理が少ないからではないかと考えた。そこで、次に続く野草を利用した食活動の実践を考案した。

表1 食すると回答した種類数の割合 (%)

	高齢者	若者	その他
野草	37.2	20.2	42.6
昆虫等	40.6	9.4	50.0

3. 野草レシピの開発と官能検査

(1) 野草レシピの開発

使用した野草(コシアブラ、タラノキ、ユキノシタ等)は本学周辺で採取した。これらを用いて試作を行い、野草料理のレシピとしてまとめた。野草の調理では、天ぷらがよく扱われている調理法であるため、試行に用いた全ての種において、天ぷらを取り入れた。これに加え、各々の種の性質を活かせそうな調理法を試した。

(2) 官能検査で使用するハンバーグの調整

上記の試作品の試食の結果、野草を加えたハンバーグが最も適切と判断した。この後に実施する実践活動に向け、味の確認や使用する野草を選択したいと考えた。そこで、7種の野草を用いてハンバーグを作成し、試作、試食、調味料などの分量の調整をし、最終的には加える野草をユキノシタ、クワ、サンショウに絞り込んだ。

(3) 官能検査

① 味覚検査

野草ハンバーグの官能検査を実施するにあたり、味覚の正常な者を被験者とする必要があるため、本学学生の1年生41名を対象に味覚検査を実施した。味覚検査は、5味(甘味、酸味、塩味、苦味、旨味)の溶液を調整し、当てはまる味を被験者に回答させる方式とした。5味の溶液は約6割の者が正当する濃度とした。味覚検査の結果、すべての味を識別できた者および苦味、旨味を含む4味を正当した者を適合とした。今回の検査で適合であった5名に、過去に行った味覚検査で適合であった者12名(3年生10名、4年生2名)の合計17名の被験者を選定した。

② 野草ハンバーグの官能検査

検査に使用するハンバーグは、前述の3種に加え、野草を入れない「プレーン」を基準とし、4種で実施した。これらのハンバーグを試食してもらい、「香り」「青臭さ」「苦味」「酸味」「舌触り」「総合評価」の6種の項目の評価を依頼した。

評価の結果を表2に示す。「総合評価」で最も好ましかったのは、ユキノシタとサンショウであった。以上の結果から苦味や青臭さが少なく、総合評価が高かったユキノシタを実践で使うことにした。

表2 野草ハンバーグの官能検査

評価項目	サンショウ	ユキノシタ	クワ
香り	◎	△	◎
青臭さ	△	△	◎
苦味	○	△	◎
酸味	△	△	△
舌触り	◎	◎	△
総合評価	◎	◎	△

◎: 強く感じた ○: やや感じた △: 感じない

4. 野草ハンバーグクッキング活動の実施

食を通して自然に親しむことを目的とし、野草ハンバーグクッキングの実践活動を行った。本学学生の2種の異なる集団を対象とし、学内の森に自生する「ユキノシタ」の採取、調理、試食という活動内容とした。終了後には、活動内容に関するアンケート調査を行った。

(1) 経験豊富な集団(A)への実践

1回目の実践は自然体験が豊富な集団を対象とした。参加者自らが五感を使って自然を感じてもらうように、筆者はあえて声掛けを控えた。参加者は自らユキノシタの葉の感触を感じたり、匂いを嗅いでみる場面が多くみられた。普段から自然に接してい

る場合には、筆者が働きかけなくても五感を使って自然を感じることに慣れていると感じた。

(2) 意識して自然に接していない集団(B)への実践

2回目の実践は、選択授業履修者に対して実施した。この集団は、特に意識して自然に接していない様子の学生である。そのため、活動では五感を使って自然を感じてもらおうよう積極的に声掛けを行った。その効果があったからか、活動中に手触りや、匂いについて発言をしている学生が多かった。

(3) 活動を終えて～アンケート結果より～

参加者には「知っている野草」を記述させたところ、Bグループでは春の七草の各種を回答する者があった。しかし、Bグループは野草調理の経験がないことから、単に知識として野草を知っていると考えられる。Aグループの大半は野草調理の経験があったが、ユキノシタを認知している者は少なかった。

Bグループは、当初は自然に接していないとされていたが、野草を食べることへの抵抗は少なく、食べた経験がある者も多かったことから、ある程度自然に興味がある集団であったといえる。

五感に関する質問項目では、「触覚」の項目で若干の差が生まれた。これは、前者より後者の方が自然との関りが若干少なく、触覚という分かりやすい感覚で自然を感じた結果であると筆者は考える。

アンケートでも本活動で聴覚以外の全ての感覚を感じられたようであった。

5. おわりに

実践ではこの活動を通して自然と関わることで、野草に興味を持ってくれた人が多かった。活動の感想にもあったが、野草を自ら採取し、自ら調理して食する体験が効果的だったのだと考える。活動を通して自然と関わることを楽しめた様子であり、自然の楽しさや面白さを知ってもらう目的はほぼ達成したと言えるだろう。

「食」から自然と親しむ活動を考案し実践してきたが、これらの活動をするにあたり筆者自身も野草を食する活動をする術や、野草に関する知識などを学ぶことができた。人の生活と野草とのつながりから自然に対する理解が深まることを期待し、今後も興味関心を引き出せる方法を考えていきたい。

※1 本研究で扱う野草は野外に自生する食せる草木とする。

※2 当初は就学前の親子への実践を予定していたが、covid-19蔓延のため、学内での実践に変更した。

資料

資 料

I. 2020年度子育て支援研究センター事業報告

1. 主催事業

(1) 子育て支援研究センター公開講座

中止

(2) 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成事業

① 認定みどりこども園 交流保育

校地貸与に代替え

6月28日（金）

7月8日（水）年少・年長93名

7月9日（木）年中・年長95名

7月15日（水）年少・年長93名

7月16日（木）年少・年長93名

② 認定しらゆりこども園 交流保育

第1回、第3回は中止

11月18日（水）

「秋の自然に親しもう」

認定しらゆりこども園 年少児90名

子ども生活学部 1年生

※ 交流保育中止の代案として、教材研究の動画作成をし、youtubeにアップした。
動画は、大学祭で流し、アンケートを実施した。

(3) T i n y（障がいのある子どもと家族の支援）

第8回T i n yファミリーコンサート（オンライン配信）

第1部 撮影：9月上旬～中旬 配信：9月26日（土）16：00～

・人形パフォーマンス

出演：子ども生活学部 1年生4名、3年生4名

・ユーフォニウムアンサンブル

演奏：音楽科1年生2名、音楽科2年生1名

・パネルシアター音楽物語

パネル製作・出演：子ども生活学部1年生9名

音楽：音楽科2年生2名、1年生3名

第2部 撮影：9月中旬～下旬 配信：10月13日（火）17：00～

・カップダンス

出演：子ども生活学部1年生3名、4年生3名

・ピアノ&打楽器&管楽器アンサンブル

演奏：音楽科1年生3名、2年生2名

・段ボールパフォーマンス&ダンス

段ボールマスコット制作&ダンス考案：子ども学部3年生有志

出演：T i n y 隊全員

第3部 撮影：9月下旬～10月中旬 配信：10月31日（土）12：00～

・鍵盤ハーモニカアンサンブル

演奏：音楽科1年生3名、2年生1名

・ミュージックベルと仲間たち

演奏：子ども学部1年生6名、3年生3名、4年生1名

音楽科1年生1名、2年生1名

・合唱 振付け付き

出演：T i n y 隊全員（子ども生活学部20名、音楽科4名）

（4）親子遊びの会 ―子育てネットワークづくり―

10月31日（土）

「ぐりとぐらのえんそく」～親子でテントをつくろう～

参加者28名（9家族）、学生11名、教員4名

（5）卒業生のためのリカレント教育

中止

2. 地域貢献事業

（1）那須塩原市民大学 地域いきいき学部

「何だろくに答える、やさしい入門講座（後期）」（宇都宮共和大学連携講座）

中止

（2）とちぎ子どもの未来創造大学

中止

（3）高大連携授業

①高大連携出前授業

7月30日（木）宇都宮文星女子高等学校（学校見学会）

「乳児保育」

准教授 星 順子

「子どもと遊び」

准教授 市川 舞

「子どもの発達とコミュニケーション」	教授	杉本 太平
10月2日（火） 足利南高等学校（学校見学会）		
「子どもの発達とコミュニケーション」	教授	杉本 太平
「保育の仕事とは」	准教授	星 順子
7月2日（火） 鹿沼南高等学校		
「子どもの遊びを豊かにする手作りおもちゃ」	准教授	星 順子
10月15日（月） 壬生高等学校		
「人間関係を楽しくするコミュニケーション・ワーク」	教授	杉本 太平
10月17日（土） 宇都宮短期大学附属高等学校（調理科）		
「栄養士・調理師のための対人関係スキル～コミュニケーション・ワーク～」	教授	河田 隆
10月29日（木） 今市高等学校		
「保育者としてのコミュニケーション・ワーク」	教授	杉本 太平
1月22日（金） 黒羽高等学校		
「保育者になる人のためのコミュニケーション・ワーク」	教授	杉本 太平
3月15日（月） 宇都宮白楊高等学校		
「保育者・教育者になる人のためのコミュニケーション・ワーク」	教授	杉本 太平

②高校2学年対象 保育・幼児教育・初等教育に係る高大連携授業
中止

(4) 大学地域連携活動支援事業

地域の就学前施設との交流プロジェクト

①学内・地域報告会

第1回

11月15日（日）学生7名

第2回

3月20日（日）学生3名

②栃木県主催報告会

中間報告会（栃木県庁6階大会議室1）

10月12日（月）学生5名

年度末成果報告会（オンライン会議）

2月10日（水）学生12名

(5) 宇都宮市環境学習センター事業

「親子で楽しく自然体験in環境学習センター」

8月1日（土） グリーンパーク茂原東側林地

参加者51名（16家族）学生8名 教員2名

(6) 親子ふれあいネイチャー事業 NPOうつのみや環境行動フォーラム

8月15日(土) 宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ

参加者34名(10家族、体験参加学生1名) 学生6名 教員2名

Ⅱ. 2020年度専任教員の社会貢献活動（子ども生活学部）

職 位	教員氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
学長	須賀 英之	[各種審議会・委員会委員等]		
		栃木県私立学校審議会	委員	栃木県
		栃木県公私立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県次期プラン策定懇談会	会長	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		[団体兼職]		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮市中心市街地活性化協議会	会長	宇都宮市総合政策部
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

学科	職 位	教員氏名	委嘱の内容		
			名称	職位	設置者
子ども生活学科	教授	河田 隆	栃木県子どもの体力向上推進検討委員会	副委員長	栃木県
			幼児の体力に関する検討部会	部会長	栃木県
			栃木県レクリエーション協会	副理事長	栃木県レクリエーション協会
			栃木県民スポーツレクリエーションフェスティバル「とちまるフェスタ」	運営委員	栃木県
			公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団	評議員 (議長)	公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団
			宇都宮市社会教育委員会	委員長	宇都宮市
			宇都宮市子ども子育て会議	委員	宇都宮市
			栃木県社会教育委員協議会	理事	栃木県
			公益財団法人栃木県民公園福祉協会	評議員	公益財団法人栃木県民公園福祉協会
			那須塩原市民大学運営委員会	委員	那須塩原市
			幼少期の子どもを対象とした体力向上指導者研修会	講師	栃木県教育委員会
			栃木県幼稚園教育研究大会	講師	栃木県幼稚園連合会
			足利市幼稚園連合会教員研修会	講師	足利市幼稚園連合会
			鹿沼市幼稚園連合会教員研修会	講師	鹿沼市幼稚園連合会
			親子体操指導（3保育園）	講師	栃木県教育委員会
			那須町保育士研修会（4保育園）	講師	那須町こども未来課
子ども生活学科	教授	高柳 恭子	次期栃木県教育振興基本計画懇談会	委員	栃木県教育委員会
			那須町立保育園民営化に係る事業者選定委員会	委員	那須町
			鹿沼市子ども・子育て会議	会長	鹿沼市
			那須塩原市公立保育園民営化応募事業者の評価委員	委員	那須塩原市
			鹿沼市公立保育園民営化に係る事業者選定委員会	委員長	鹿沼市
			全国健康保険協会栃木支部健康づくり推進協議会	委員	全国健康保険協会栃木支部
			社団法人全国幼児教育研究協会	支部理事	(社) 全国幼児教育研究協会
			宇都宮大学教育学部附属幼稚園学校評議員会	評議員	宇都宮大学
教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学			

			新・家庭応援講座	講師	宇都宮市北生涯学習センター
			栃木県保育士部会研修会	講師	栃木県保育協議会
			那須町特別支援教育セミナー	講師	那須町教育委員会
			栃木県幼稚園連合会教育研究大会	講師	(社) 栃木県幼稚園連合会
			関東地区 地域活性化研修会	講師	全国認定こども園協会
			全国認定こども園協会ステップアップ研修会	講師	全国認定こども園協会
			鹿沼市保育士研修会	講師	鹿沼市子ども未来部
			芳賀地区研修委員会研修会	講師	芳賀地区幼稚園連合会
子ども生活学科	教授	田淵 光与	教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学
			那須町保育所主任研修会	講師	那須町子ども未来課
			令和2年度「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県
			すくすく子育て講座スペシャル	講師	宇都宮市東生涯学習センター
子ども生活学科	教授	蟹江 教子	宇都宮市男女共同参画審議会	委員	宇都宮市
			宇都宮市都市計画審議会	委員	宇都宮市
			栃木県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 運営協議会	委員	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構
			栃木県職業能力開発審議会	委員	栃木県
子ども生活学科	教授	杉本 太平	日本関係学会	運営委員	日本関係学会
			日本関係学会研修委員会	委員長	日本関係学会
			乳幼児発達・子育て支援研究会	アドバイザー	乳幼児発達・子育て支援研究会
			入間市乳幼児健診	心理相談員	入間市
			埼玉県家庭教育アドバイザー養成研修	講師	埼玉県教育局
			那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
			那須塩原市子ども未来部養成研修	講師	那須塩原市子ども未来部
			日本子育てアドバイザー養成研修	講師	日本子育てアドバイザー協会
			教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学

子ども生活学科	教授	月橋 春美	公益社団法人日本キャンプ協会 栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 栃木県スポーツ推進審議会 宇都宮市冒険活動運営協議会 教員免許状更新講習 教員免許状更新講習 介護員養成研修（介護職員初任者研修課程）	運営委員 理事 理事 会長 委員 講師 講師 講師	公益社団法人日本キャンプ協会 栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 栃木県 宇都宮市 文科省委託／宇都宮共和大学 文科省委託／公益財団法人日本レクリエーション協会 栃木県ひとり親家庭福祉連合会
子ども生活学科	教授	桂木 奈巳	教員免許状更新講習 宇都宮市環境審議会 宇都宮市環境大学	講師 委員 講師	文科省委託／宇都宮共和大学 宇都宮市 宇都宮市
子ども生活学科	准教授	土沢 薫	栃木県障害者施策推進審議会 栃木県障害者差別解消推進委員会 栃木県障害者差別解消推進条例検証部会 宇都宮市社会福祉施設事業者選考専門委員会 宇都宮市学校問題等対策専門委員会 栃木県公認心理師協会 栃木県公認心理師協会産業委員会 栃木県公認心理師協会被災者支援委員会 栃木県スクールカウンセラー活用事業 中堅養護教諭資質向上研修 家庭教育支援プログラム指導者研修 小学校現職教育教職員研修会 中学校現職教育教職員研修会 教員免許状更新講習 保育士等キャリアアップ研修	委員 委員 副部長 専門委員 委員 理事 委員 委員 委員 S C 講師 講師 講師 講師 講師 講師	栃木県 栃木県 栃木県 宇都宮市 宇都宮市 栃木県公認心理士協会 栃木県公認心理士協会 栃木県公認心理士協会 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会 日光市立大沢小・南原小学校 日光市立大沢中学校 文科省委託／宇都宮共和大学 東京都大田区

子ども生活学科	准教授	今村 麻子	保育士等キャリアアップ研修〈マネジメント〉	講師	東京都
			区内保育園園長向け「人材採用と定着」講座	講師	世田谷区
			通信制高等学校第三者委員会	委員	霞ヶ関高等学校
子ども生活学科	准教授	星 順子	ファミリー・サポート事業会員養成講座	講師	中野区社会福祉協議会
			教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学
子ども生活学科	准教授	石本 真紀	月の家（要支援児童放課後応援事業）	生活支援	特定非営利活動法人 青少年の自立を支える会
			自立援助ホーム星の家	運営委員	特定非営利活動法人 青少年の自立を支える会
			アフターケア関係者研修会及び職業指導員専門研修会	講師	とちぎユースアフターケア事業協同組合
			のびしなプロフェッショナルスクール 子どもの人権と人権教育（保育）	講師	品川区
子ども生活学科	准教授	市川 舞	教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学
			宇都宮大学教育学部附属幼稚園保育を語る会	講師	宇都宮大学教育学部 附属幼稚園
子ども生活学科	専任講師	大島美知恵	日本音楽療法学会関東支部	幹事	日本音楽療法学会関東支部
			リトミック研究センタ第一支局、第二支局	指導スタッフ	リトミック研究センター第一支局・第二支局
			教員免許状更新講習	講師	文科省委託／宇都宮共和大学
			那須町千振保育園保育士研修（リトミック）	講師	那須町こども未来課
			那須町黒田原第二保育園保育士研修（音楽療法）	講師	那須町こども未来課
			日本音楽療法学会スーパーバイザー養成講座	ファシリテーター	日本音楽療法学会
子ども生活学科	専任講師	坪山 恵子	一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）	正会員	一般社団法人全日本ピアノ指導者協会
			NPO法人くるみの会音楽振興会	評議員	NPO法人くるみの会音楽振興会
			宇都宮市文化協会	会員	宇都宮市文化協会

Ⅲ. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程

(設置)

第1条 宇都宮共和大学内に宇都宮共和大学子育て支援研究センター（以下、「研究センター」という）を置く。

(目的)

第2条 研究センターは保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした学際的、実証的な調査・研究を行うとともに、地域福祉の向上に資する政策提言を行う。

2 前項の調査・研究の推進によりわが国の保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした理論、政策の発展・向上に貢献するとともに、その成果を本学の教育内容に反映させることにより、本学の教育の充実、高度化を図る。

3 研究成果を地域社会に還元するとともに、地域社会との積極的な交流を図ることにより、地域福祉の向上に貢献する。

(事業)

第3条 研究センターは第2条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業をおこなう。

- 一 保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした自主研究、共同研究
- 二 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる受託調査・研究
- 三 保育・幼児教育・子育て支援関連資料、データの収集、整備
- 四 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言
- 五 保育・幼児教育・子育て支援の人材育成を目的としたセミナー、講座等の開講
- 六 講演会、シンポジウム、公開講座、研究会等の開催
- 七 経営等診断、研修、コンサルティング活動
- 八 大学、研究機関、企業、行政等との交流、連携活動
- 九 研究年報、研究レポート、A研究成果等の発刊
- 十 その他第2条の目的達成のために必要な事業

2 前項に規定する自主研究、共同研究及び受託調査・研究は、次の各号に定めるところによる。

- 一 自主研究 当該研究に携わる研究者の過半数を研究員が占める研究で研究センターの研究費を用いて実施する研究
- 二 共同研究 研究費の全部または一部を研究センター以外の諸組織、機関等の研究助成を受けて実施する研究
- 三 受託調査・研究 研究センター以外の諸組織、機関からの委託等を受けて行う調査・研究

(組織)

第4条 研究センターは、子育て支援研究センター長（以下、「センター長」という。）及び教授会から選出された研究員並びに本学学長（以下、「学長」という）が任命する事務職員によって組織する。ただし、事務職員は必要に応じて置くものとする。

2 センター長は、本学専任教員の中から、学長が任命する。ただし、学長が必要と認める場合は、本学専任教員以外の者を任命することができる。

3 研究センターに、副センター長及び運営委員長を置く。副センター長及び運営委員長は、研究員の中から学長が任命する。ただし、副センター長は置かないことができる。

- 4 センター長，副センター長，運営委員長及び研究員の任期は2年（年度基準）とし，再任は妨げない。
- 5 学長，副学長および学部長は，研究センターの事業に関し，指導，助言を行うことができる。
- 6 研究センターにおける研究に必要な場合，専任教員以外の研究者を客員研究員として研究に参加させることができる。客員研究員は，センター長が任命し，任期は対象となった研究等の完了時を上限とする。
- 7 研究センターの発展のため，学外の研究者，経営者等に名誉顧問，研究顧問を委嘱することができる。名誉顧問，研究顧問の委嘱は学長が行い，任期は2年とし，再任は妨げない。
- 8 前項の顧問は研究センター長の求めに応じて，研究センターの事業に関し助言，指導等を行う。

（運営）

第5条 センター長は研究センターを統括し，副センター長はこれを補佐する。

- 2 研究センターを運営し，諸事業を遂行するため，運営委員会を置く。運営委員会は運営委員長が主宰し，運営委員長が指名する数名の研究員を運営委員とする。運営委員長は運営委員の中から，必要に応じて副運営委員長を指名することができる。
- 3 研究センターの事業や活動を検討するため，全研究員参加の研究員会議を必要に応じて開催することができる。研究員会議はセンター長が召集し，主宰する。

（運営委員会の業務）

第6条 運営委員会は，研究センターの円滑な運営を図るため，次の業務を行う。

- 一 各年度の事業計画の策定及び予算原案の作成
- 二 研究員から提出される自主研究，共同研究及び受託調査・研究の企画書，予算案査定
- 三 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言の検討
- 四 第3条第1項第五号から七号までに掲げる事業の企画，運営，実施
- 五 研究年報，研究レポート，研究成果等の刊行，発表
- 六 研究センターの施設・設備，資料等の整備及び管理
- 七 その他研究センター運営に必要な業務

（予算及び会計処理）

第7条 研究センターの予算は次の収入による。

- 一 各年度の本学予算に定められた研究センター経費
 - 二 第3条に定められた受託調査・研究等の諸事業による収入
 - 三 寄付金
 - 四 その他の収入
- 2 受託調査・研究等に関する予算配分・原稿料等の基準については別に定める細則によるものとする。

第8条 予算執行にかかわる会計処理は本学の同規程を準用する。ただし，出張旅費等については，名誉顧問，研究顧問及び客員研究員にも適用されるものとする。

附 則

この規程は平成31年4月1日から施行する。

IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領

(趣旨)

第1条 この要領は、宇都宮共和大学都市経済研究センター規程第5条2及び子育て支援研究センター規程第5条2における客員研究員の取扱い等に関し、必要な事項について定めるものとする。

(称号の付与)

第2条 宇都宮共和大学都市経済研究センター及び子育て支援研究センター（以下「センター」という。）は、優れた知識、技術及び経験を有し、本学の研究・教育の充実発展に資すると認められる者に客員研究員の称号を付与することができる。

(指名)

第3条 客員研究員は、センター長が指名し、教授会に報告するものとする。

(付与期間)

第4条 客員研究員の称号は、年度ごとに付与する。ただし、年度途中の場合は、当該年度内の付与とする。

2 客員研究員の称号の付与期間は1年とし、再任を妨げない。

(施設の利用)

第5条 客員研究員は、学長の許可を受けて本学の施設等を利用することができる。

(遵守事項)

第6条 客員研究員が、本学において研究・教育に従事する場合は、本学の諸規則等を遵守するものとする。

2 客員研究員が、故意又は重大な過失によって本学に損害が生じたときは、客員研究員はその責めを負うものとする。

(謝金)

第7条 本学は、必要と認める場合、客員研究員に謝金を支給することができる。

2 前項に規定する謝金については、別に定める。

(交通費)

第8条 本学の依頼に基づき出張する場合は、交通費の全部又は一部を支給することができるものとする。

(称号の取消)

第9条 客員研究員が、本学の名誉を著しく傷つける行為をした場合は、センター長は客員研究員の称号を取り消すことができるものとする。この場合、教授会に報告するものとする。

(雑則)

第10条 この要領に定めるもののほか、客員研究員の取扱いに関し必要な事項は、センター長が別に定めるものとする。

附 則

この要領は、平成25年11月1日から施行する。

子育て支援研究センター運営委員会（2020年度）

センター長 牧野カツコ

副センター長 高柳恭子

運営委員長 石本真紀

運営委員 田淵光与 土沢薫 今村麻子 星順子 大島美知恵

客員研究員 田所順子 丸橋亮子

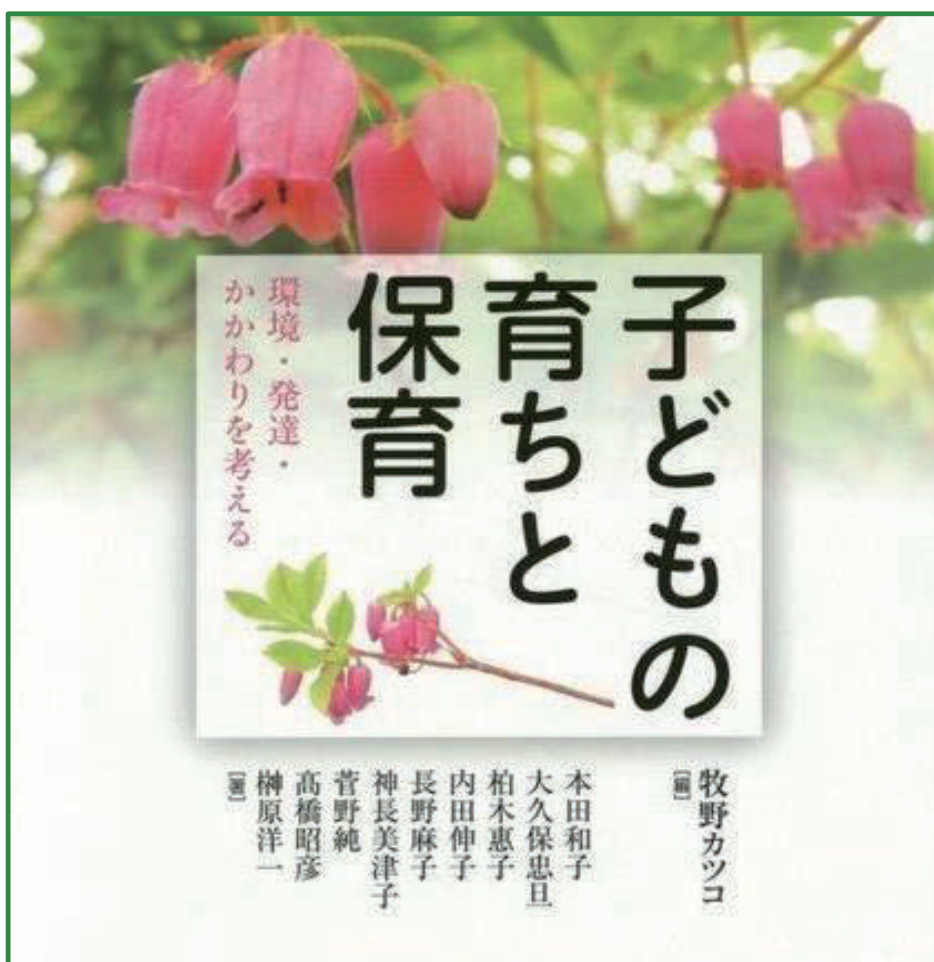
第11号編集担当 星順子

表紙デザイン 近江智子

研究センター年報 第11号

発行日 2021年3月31日
編集・発行 宇都宮共和大学子育て支援研究センター
〒321-0346
宇都宮市下荒針町長坂3829
TEL 028-649-0511(代)
FAX 028-649-0660
e-mail : kosodate@kyowa-u.ac.jp
Website : <http://www.kyowa-u.ac.jp>
印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
定価 1,000円（消費税込み）

宇都宮共和国子ども生活学部 子育て支援研究センター公開講座の記録が 装いを新たに、金子書房から出版されました。



目 次

I部 子どもが育つ社会・環境を 考える

1. 子どもへのまなざし
2. 子どもの成長と自然
3. 子どもが育つ条件

II部 子どもを育むかかわり方 を考える

4. 子どもの創造的想像力を育む親の役割
5. ことばと呼吸と音楽
6. 幼児期から児童期への教育

III部 気になる子どものケアを 考える

7. 生涯発達の心の基礎づくり
8. 医療的ケアが必要な子どものレスパイトケア
9. 気になる子どもと脳科学

人とのかかわりや自然から学ぶことの大切さ

子どもが安心して育つために必要なことを子育て支援の専門家らが提言。

お母さんにまかせきりにしない子育て、幼児期から児童期へのなめらかな接続、発達障害について知っておきたいことなど、いま、保育に求められる子どもの見方・かかわり方がわかる。

金子書房

定価 本体 2300 円＋税

表紙の写真は、栃木県那須高原で絶滅が危惧されているウラジロヨウラクというつつじの仲間です。本学名誉教授・元副学長 大久保忠旦先生が花の開花時期を見計らって那須高原に4回も足を運んで撮影されたものです。(本文 35 頁参照)

